

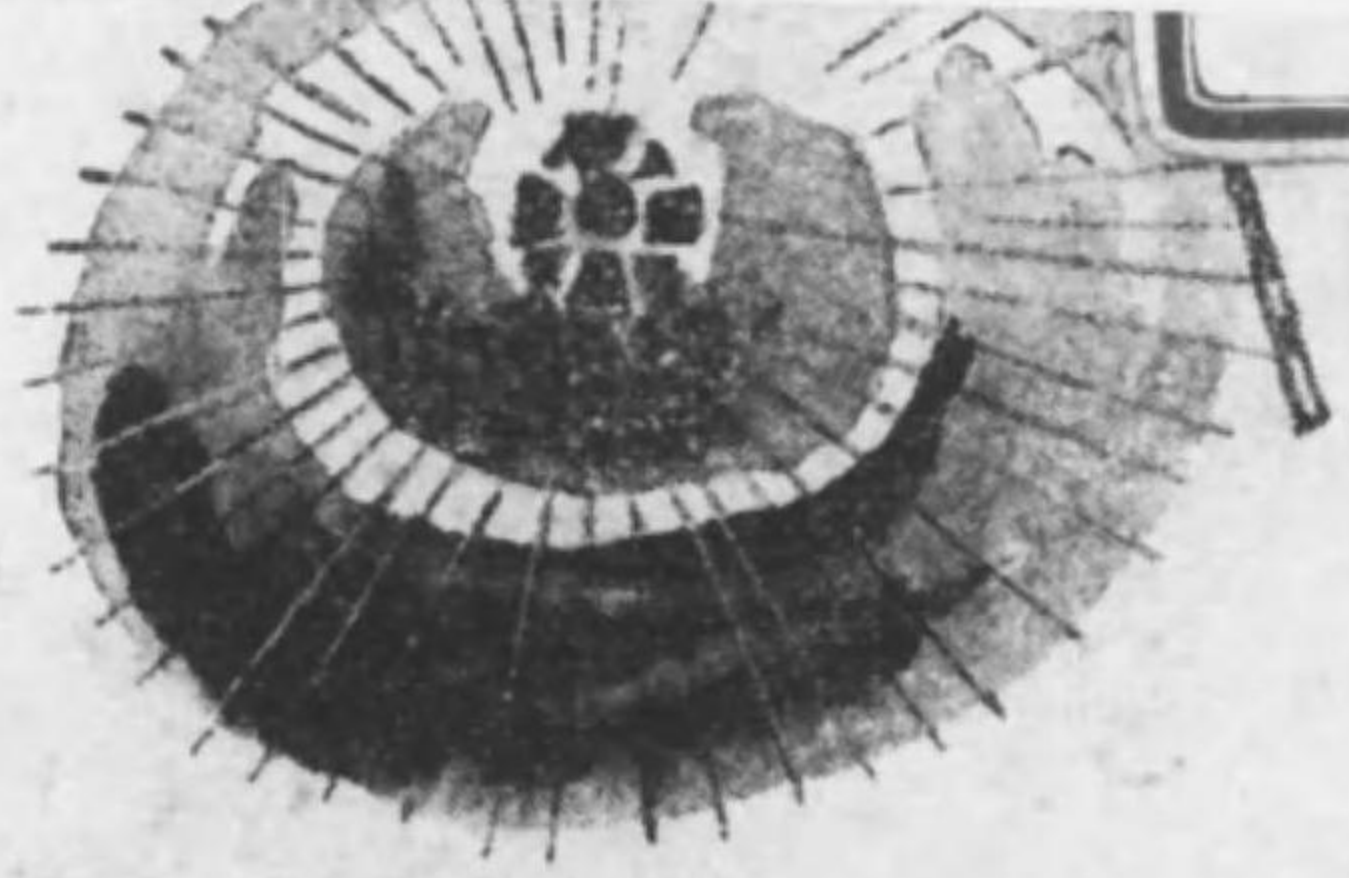
後田之詠詠

915.6-1267



1200500758553

5.6
26



始



915.6

I.26



詠諷く行旅

著笏蛇田飯



院書文人



序

芭蕉は、その「奥の細道」において「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」と云ひながら必死のおもゝちをこちらへ振向けてゐる。凡そ思索するほどのものが誰人でも感じてゐないことではないが、あらためて斯う呼びかけられてみると浩嘆をおぼえる。まことに後世をして深沈たらしめ腸に沁みわたる片雲の風を痛感せしめられることである。しかしながら、現實に於けるわれ／＼の羈旅的性格のうちには實をいふと何かしらん仄温い感情の交流がひそんでゐる。そのことは必ずしも月日の過客たるを喪失せしめることでも何でもないが、芭蕉が生きた時代と較べて生活様相のちがひと、それから個のふて／＼しい現實感がそくばくの距離をしめすものかと思はれるのである。されば、このまづしき旅人のすがたと、そのぶちまけたる若干の諷詠とは、古人のそれのごとく、直接的

に、おそらく永遠の浩嘆を感じしめないかもしれないのである。たゞ併し、まがふかたなく大正年代から昭和現在へかけて其の赤裸々な旅人のすがたが餘りにも現實的にさらされてゐる、と然ういふことだけは出来る。すなはち著者の場合、みづから謂ふ所の人温驛旅の映像といふに憚らぬものである。

昭和十六年三月二十五日

著 者

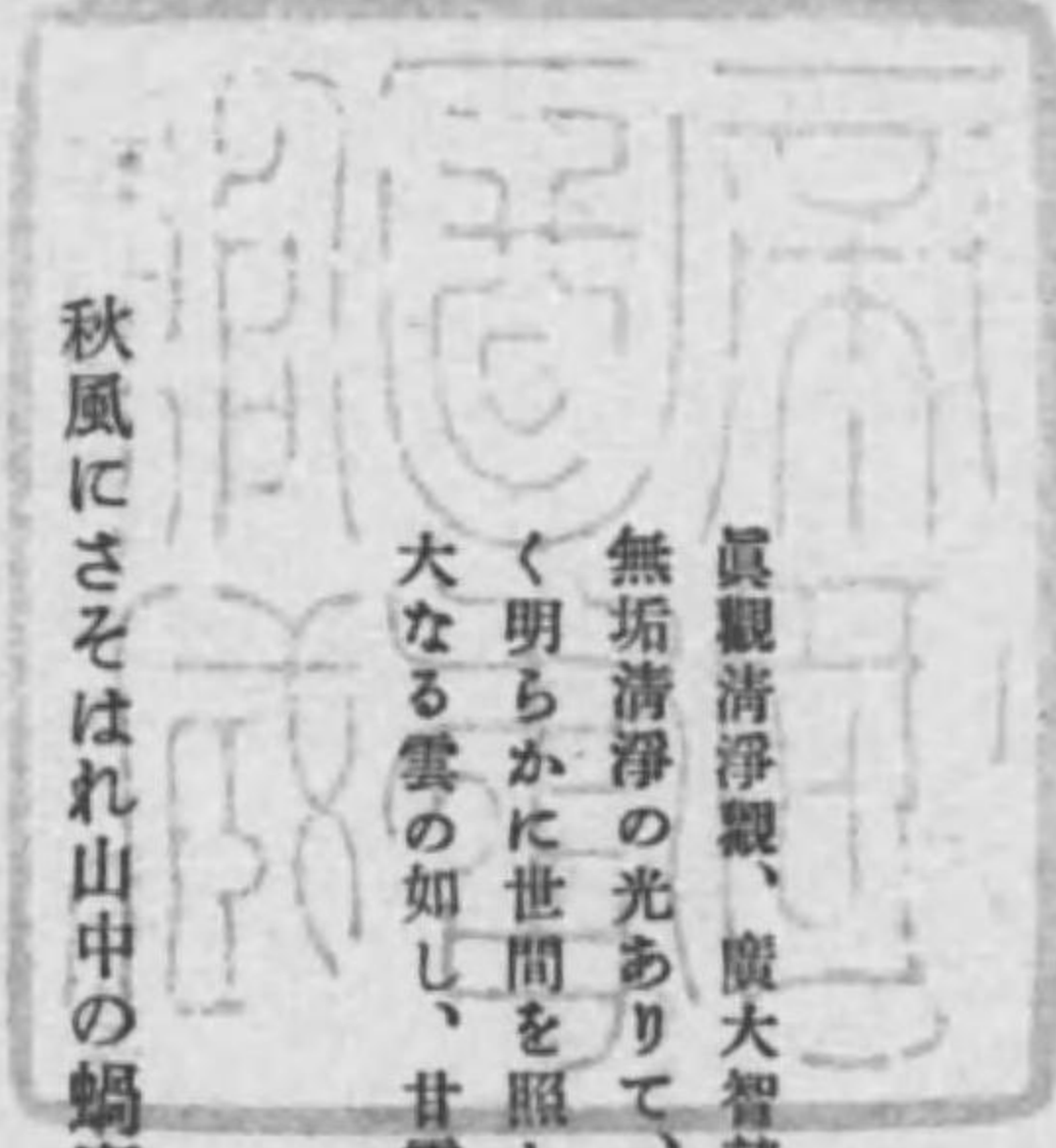
目 次

嶽 麓 紀 行……………	癸 酉 紀 行…………… 人温、水鶏、「豊國」、坑、山莊、鶴鴿、 鐵燈籠	癸 酉、秋旅中詠草……………	道 中 萬 華 鏡…………… おもひで、明暗、神戸風景、蜘蛛、吊提灯 淡路へ、別春莊、松風、鳴門、六峰莊	驛 旅 詠 草……………	麥 秋 小 旅……………
--------------	--	----------------	--	--------------	--------------

高	原素描……………
	小海線、葛の花、無源莊、古戦場の秋……………
西	國 驛 旅……………
	出廬、六甲の日和、寧樂の秋雨、瀬戸内海の空、茶仙庵、道後の湯、船房、車室風景、安來節、八雲舊居、有澤山莊、行程二十五里、暢神亭、湖上の秋、桂山邸句會、丹波路、名古屋一泊——東京……………
素	描 旅 日 記……………
	神戸、大阪編——京都、三河、名古屋篇……………
道	中 棗……………
筑	紫 へ 旅 す……………
	爐塵を拂ふ、白晝夢、別府、地獄めぐり、小倉、東行庵、三田尻、再度山、大阪、牧岡、歸庵……………

水	郷 風 景……………
	凌霄花、河骨、十二橋、筑波山……………
極	寒 驛 旅……………
	田子の浦遊漁……………
人	温 驛 旅……………
	出廬、堀江の宿、さくら花壇、御坊の宿、元の脇海岸、長良のほとり、井の口丸、四季の里、名古屋……………
大	陸 季 節 抄……………

嶽麓紀行



眞觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及慈觀、常に願ひ常に瞻仰すべし。
無垢清淨の光ありて、慧日諸の闇を破り、よく災の風火を伏して普
く明らかに世間を照したまふ。悲體戒雷のごとくに震ひ、慈意妙に
大なる雲の如し、甘露の法雨を澆いで、煩惱の焰を滅除す。

— 觀音經 —

秋風にさそはれ山中の蝸廬をたち出で、行く雲のかけさだめなき旅路にこころをくつろ
ぐ。來合せて行をともしする汀波の飄々とゆく影と二つ、相もつれて、千草の露に澄みわ
たる心をいためず。名山の麓をめぐりて、樹海の秋をさぐり、五湖に揖し、吹きかよう雲
霧に笠をぬらし、萩を手折りて霽れわたる碧瑠璃のみそらに雲水の情をやらんとす。

大正丙寅の歳陰曆八月二十二日。大黒坂の山里をよぎりて、しばらく春日山の麓路をたどる。蟲しきりに鳴き、桔梗つゆけく咲く。

秋草や蠶むしろ干せる峠口 蛇 笏

蘆川峠に登るに連峰遠く左右にせまりて谿谷ふかきあたりたま〜鶯子啼の聲をきく。

峠路やかまへて暑き秋の巖 蛇 笏

路に草刈の笠あり、山着をのせ、主なき馬のこれを守るを見る。

山着守る草刈馬や露の秋 蛇 笏

巖の路傍にある故人道等の句牌にイみ、少時又秋草の露の香をきく。かへりみて遠く雲表にうかぶ八ヶ嶽、駒、鳳凰、白根諸峰の景観にこころをあそばせ、俯瞰して蘆川溪流のとどろきを狭霧の底にきく。

雲しきていただきひろし秋の山 蛇 笏

鶯宿の山村と九一色村との中ほとり、谷川に架す丸木橋をわたりて、向岸の砂礫に腰を下し、携へたる晝餉をしたたむ。

旅人となりて道きく秋の山 汀 波

秋風や晝餉につきし山の蠅 蛇 笏

阿難坂の嶮にかかり麓の茶屋に憩ふ。媪翁しづかに茶の煙をあぐ。

岩おつる荒瀬しぶきや葛を吹く 汀 波

谷杉や雲をたのみに實をむすぶ 蛇 笏

行く〜宿かるべき旅箱のあるじと道づれになり、さまざまに彼の心盡しをうく。

奥山や雷雲いでて日のあたる 蛇 笏

阿難のいたゞき、豁然として眼界ひらけ、天空に大富士かかる。雲のゆきかひ其の裾ほとりをはなれず、渺茫たる樹海一と處縷々たる煙を上ぐ。烈風しきりに草を吹き秋冷の氣ひし〜と旅衣をおそふ。鏡のごとくしづかなる湖面とともにほのかなる夕霧をただよはす精進の湖邑をめがけてくだる。

富士屋に旅装をとく。心落ちつきて静けく小盃をかはす旅人ふたりに、夜の富士、雲につつまれて見えす。風しきりに窓に通ふ。

大富士を隠せる雲や夜半の秋 蛇 笏

翌れば卯の刻すこし過ぐる頃宿をいでて、湖上に舟を泛べ、さきんくの旅路をめざす。

秋湖やひたくよせて朝の漣 汀 波

根場ヶ原の樹海をつらぬく道を草鞋にふんで旅をいそがす。千古の秘密をつつむ樹間に小禽の幽聲をきき、苔ふかき熔岩の累々たる上に紅玉の實をむすぶ秋草をめでてかたみに嘆聲をはなつ。さるをかせ枝を垂れ、老木到るところに倒れて蒼苔に埋もれ日影をみるによしなし。

山風に懸巢鳥のこゑをききながす 蛇 笏

秋草や樹海出て逢ふ墓一つ 同

西湖をわたる。水清く且つ深くして湖底鮮かなり。

舷に秋水の藻をさしのぞく 蛇 笏

長濱の部落を経て、亥の刻河口湖上に舟を泛ぶ。吾に曾遊の記憶あらたなれども、湖岸よりつづく富士を馬手の天空に仰いで四顧の連山烈々たる秋日に浮動するこの大景に逢へ

ば即ち又陶酔す。

笠ぬいで小舟にしがむ野分かな 蛇 笏

船津より自動車の便をかりて、吉田を過ぎ、山中湖にむかふ。子の刻山中の古驛に着く。湖岸に出て、簀圍ひせる榻にいこへば湖面眼界遠くひらけ向岸はるかに二三の艇庫をみとむ。風出で、湖すこしく曇る。

柴づけに蝶とぶ秋の早かな 蛇 笏

旗亭に湖魚を焼き晝餉をしたたむ。

古驛の小学校や雁來紅 蛇 笏

旗亭を出て、ふたたび吉田にかへさんとすれども乗るに物なく、疲れ身を草鞋にのせ、双影相扶けて廣茫たる青木ヶ原をたどる。大富士常に弓手の空にそびえ西日つよく照る。草叢に邯鄲の聲をきく。

裾野路や蟲に色づくえびかづら 蛇 笏

裏富士や雲間がくれに秋の鳶 同

吉田の驛にて自動車に継る。小立、勝山を過ぎて雪雀ヶ丘を通る。

穂すすきのむらたちそよぐ裾野かな 汀 波

秋駒の顔よす袖や草刈女 蛇 笏

再び精進湖を舟に凭りて歸れば、宿のあるじ婢とともに湖岸へいで迎へ、ねんごろに疲れを慰む。

秋宿や夜蜘蛛出て這ふ膳のふち 汀 波

旅客ただ二人の心措きなきやどりに談笑夜を更かして寝る。櫓聲なく、後山に秋風の聲を聞く。

翌拂曉霧をついて烏帽子ヶ嶽に登る。いただきを人呼んでパノラマ臺といふに、展望を恣にせんとなれども、はげしき雲霧のゆきかひに心もとなく一步々々をふむ。嶽のなかばを過ぎ、林間雲ふかきところに汀波すがたを消す。

藁をしてたちのく山の馬酔木かな 蛇 笏

烏帽子ヶ嶽の展望臺に到るも、雲霧つよくせまりて、わづかに本栖湖を眺るのみ、四邊

幽に、離々たる萱草の吹かるるに逢ふ。去る日、瑞典の皇子妃とともに成られし趾、風雨にさらされたる卓又は榻にのこりて、木の間がくれに簧張りの假圃かたむきて見ゆ。

頂上の霧ふき通ふ假り圃 蛇 笏

木栖湖をゆん手に見下しつ々峰づたひにくだりて中倉峠に通草の蔓をひく。險路七里、渺々たる雲海に遠く富士川沿岸の峰々をのぞむ。大谿谷をへだてて、數戸の村落小さいそ、根ツ子を雲の間にながめ、すこしく下りて、木喰上人の出生地丸畑村を山腹に仰望す。溪流あり。瀧あり。釣橋あり。

つり橋やわれよりさきに秋の蝶 蛇 笏

古關村を過ぐ。

旅人の身につく秋の蝶々かな 汀 波

霧の日に培ふ蕎麥や花さかり 蛇 笏

つかれにつかれて、やうやく温泉の里下部の宿りにたどり着く。

温泉の里や路に出てゐる羽拔雞 汀 波

いただきに夕霧こめし温泉山かな
山の温泉しづかに暮る。

秋雨や 蔦の葉ぬるる裏表

蛇 笏
蛇 笏

(大正一五・一〇)

癸酉紀行

人 温

秋は私にとって最も多幸なるを感じられるとともに又すこぶる多事なる感を深うさせられる。實際が四五年この方多事多幸で過ぎて来たことに因る。秋になれば必ず私に與へられて来た俳諧旅行がそれであつた。芭蕉が「江上の破屋」の替りに、私にとつては白雲の中の蝸廬があつた。この蝸廬に棲息すること、それは深くも深く私に宿命的な感じをさへ彫りつけてくれるのだけれども、私が珠のやうにかき抱いた心のなかに宿かるところのそくばくの詩の發生は、行雲流水に觸れても花鳥草木に接してもたま／＼澎湃たるすがたを映さないわけではないが、最もあけすけに云ふて、時に、人を思ひ、人を愁ひ、人を親

しみ、人を嘆ずるその事がなく、に押へ難い無限の力をもつて迫り来ることを感ずる。この心のすがたをば私はこよなく尊重するのである。尠くとも私の心の状態に於て花鳥草木に詩の發生をうながされることよりも人事百般の機微に詩の發生をうながされることが安價なものでしかあり得ないとは感じられない。さればこそ、千里の遙かなる人を思ひ人を親しむの情に於て、或は荆棘をひらき秋霜の凜烈を踏んで、ともに手を携へたまへ、觀楓もこれを背き、行雲流水にうたふをこばみ得ないとするものである。今若し、心自ら曇つて、この見解をあやまり、人獸をさへ分ち得がたいとする境に彷徨するが如きことありとするならば、音に花鳥草木の詩を賣るかもはかり難い。鳥もよく花にうたふことが出来る。蜘蛛もよく枝に巣かけることが出来る。墮してここに至ればその藝や麗はしい外面をかざるに過ぎぬであらう。人を思ひ、人を愁ひ、人を親しみ、人を嘆ずる、詩情のむせびが、心のありやうに於て、私をして多幸たる秋を感謝せしめ、多事たる秋を痛感せしめることは、決してことわりないことではなかつた。

芭蕉の旅が草鞋穿きであり、一笠に身をしのばせた果敢なげなすがたであることに於て

彼はいくぶんの不便を感じたことであらう。しかしながら、その果敢なげなすがたが幾分の不便を感じたであらう事實と、世人の打ち眺めたことに可成りの距離を私はおもはせられることに偽りは無い。なぜならば、私は彼芭蕉が旅路のはかなさをも充分推測せしめられると共に、又彼が旅の温みをも、今、三百有餘年をへだてて想ひはからせられること多分であるからである。まづ、芭蕉は、

野ざらしをここに風のしむ身かな

芭蕉

と、大上段にかまへてから「旅」のすがたの無常道を振りかざしてしまつた。彼にとつては、さほどな誇張ではあり得なかつたであらうが、旅人芭蕉たるには相違ない彼も亦人無き夜見の國を彷徨するわけではなかつたのである。野ざらしを心にたたむとうたふ直ぐ其のあとから

秋十とせ却て江戸をさす故郷

芭蕉

と、吐露してゐる。此處には大上段の心がまへが見えないだけ、奥の奥にどうやら深沈とした芭蕉の心の眞個なものが蟠まつてゐるやうである。をかしたな比喻をあげるやうだが、

總ての鳥獸のたくひでさへ、産みおとされた山野谿谷のふるさとをば、獵夫等からどのやうな威嚇に逢はうともいかなこと遠くとび離れてはしまはない本能を持つてゐるとしてゐる。だから之れを知る獵夫の獵銃は屹度たやすく無慚にも彼等の形骸を枯草の上へ落しうるのである。雉子、山鳥の妖しい彩羽は、韓紅に血ぬられたすがたをふるさとの土に横ふることに於て、溪流の奏づる挽歌のひびきが無情を弔ひ、行く雲の影がこれを送るのである。人間も亦生靈の本能に於て、より以上哀別離苦、塋土を甜つて涙する、故郷忘じがたしのあはれをふりはなすことの出来ないものに造られてある。いつかは又廻り來り得るを知る芭蕉の心に宿かる江戸が、それは彼がふるさとではなしに、實に彼が旅のただ中にあるところの置かれたる一榻ではないか。深川のいほりに銃を鎖し通して棺に納まり終ることの出来ない限り、さうした人温を識る寂智が、芭蕉の心からたら／＼と雫して、深沈たる影をただよはすとき、我人ともに瘦身鶴の如き風羅坊を抱擁したくなるのは當然である。更に芳野紀行に彼が故郷を尋ねる段になると

ふるさとや隣の緒に泣くとしの暮 芭蕉

と極致を盡して、うごきのとれないところを露呈してゐるのである。なんと人温の豊かさではないか。かかる方面に於てこそ、私も亦彼が辿つた詩にあやからんとする一人である。さうして又人温のゆたかさに浸らうと念ずるものである。雲がいよ／＼白く蝸廬の軒端をとべば立秋の蝸の聲が後山の樹立にひびくを聞いて、静閑に時をわすれ「錠鎖す」に終始するに堪へないのが事實である。「江上の破屋」をたちいづる替りに雲間の蝸廬をあとにして、今年十月の旅路は、下野の國足利から、足尾の鑛山町に、久しい情誼を交はす諸友をたづねるの欣快を掬さうとするのである。

出 處 (十月十三日)

秋風やみだれてうすき雲の端

水 鶏

曩に、小川鴻翔君淺草に栖して祝融の災に罹り、新たに郊外西新井の地に居を卜した。

東武線は、恰度鴻翔新居のほつりを過ぎてゐるので、折から瓊々會に對して庵主がその人々の好意に對する宴をはらうとしてゐる其れに山廬のあるじをも足をとどめさせようとする意嚮であつた。東武電車は、西新井から足利まではわづかに二時間をも要せなかつた。で、鴻翔君の詩歌管絃(?)の宴に憂き身をやつすことが利便たることは勿論である。神田の和泉町から、舟月、堀口老、有風、惟水等の諸君とともに、ひたすらに駛走させたタクシーの窓硝子に、いつしか豊穣の稻田が展開したと見るときは、西新井の藥師堂が眼前にあらはれてゐた。秋日影にきら／＼と翅の光る蜻蛉が窓硝子に幾つも突きあたつた。鴻翔居の夕べの句筵に「西鶴忌」の兼題が貼り出されてあつたりしたのも心憎くかつた。座敷の柱に凭れて、漸く夕べ近くならうとする深色が漂つた蒼天を眺めてゐると、市の騒音が遠く聞えてきた。稻田を距てた錢湯の煙筒が薄けむりを吐いてゐる。その煙筒の支へ綱に鴟が高音をあげて尾をゆり動かしてゐるのがくつきりと彫られて見えた。人はおの／＼静閑なる歡樂に陶醉して、しかも亦弾切れさうな詩情を抱いた。菊の香りがどこからともなく座を流れた。田圃を打ちならした鴻翔君の新たなる平庭は、疎らなる植樹によつて、熟

れ色の鮮かな稻田と境されてゐた。其處に風雅な趣をもつた垣が繞らされて一と隅に四阿がちよこなんとしつらへてあり、邊りの榻に、わざと山菊さんきくの懸崖風な鉢が置かれてあつたりした。見るともなく其の垣根のほつりをながめてゐると、熟れ稻をもぐり出た水鶏がよた／＼ともの憂さうに濡土を歩いてゐる。その發見が、昵つと黙つて眺めてゐる心に甚だ新鮮な感じを與へた。

灯影が何時しかひたと座に敷かれてゐた。

誰が家の子ぞ遠く笙を奏するは。喜怒哀樂の情をつくして燈光に微吟する人温のゆたけさ。草昧の原野に弓弦をはり、日輪を仰ぎ、ゆく雲をながめて、皇紀第一年と指を屈せられてこの方二千五百九十三年にあたる秋十月十四日の夜半、詩にあそぶ遊子の情が、はつきりと躬目らかき抱かれたことに嘘偽りはないのである。

夕影にまぎらう秋の水鶏かな

歡樂のきはまる秋の大燈

籬菊葉の青幽き朝日かな

「豊國」

十五日。鴻翔居の清閑になごりを惜しんで西新井、驛へむかふ。鴻翔、舟月等の諸君とうちつれだつたが、いささか時刻遅れて、すでに出京してゐる筈の酒蝶、幽夢兩君の足利をさして出かけたことだらうと推測することの小淋しさが心を掠める。豊穰の稻田が展開する間の小徑をたどつてゆくに、水びたりの窪地が豆腐のやうな泥を靴へしたたかに附着させる。夙に花の落ちた木槿垣を透いて派手な色彩がゆらめいたのは、鴻翔夫人や豊女その他鴻翔居の賓たる婦人だちが驛まで見送つてくれる姿であつた。

きげんよき別離の袖に菊のつゆ

旅人のさめはてにけり古酒の酔

加須驛にて、おもひがけなく同行しようとする晚紅里、秋紅の兩君に會ふ。久瀧を叙し

て眼底の情味に酔ふ。館林といふ驛を通過する。かつて此處を通つたのは既に二十年も以前のことに屬するだらう。ぼろ服の學生姿で、腰に一足餘分の草鞋をぶらさげ、ステツキの尻を地上に曳いて、文福茶釜の古譚をおもひながら通つたのである。晚紅里君や秋紅君と風交をあたためるに至つたのはそれからすつと後のことであるけれども、どういふものか不思議に其の間の歳月を湮滅して直ちに追憶の繪卷をそのなつかしい色彩の中に投じようとする。寧ろ會ふごとくに然うである。

秋の風駕なる童子笙籜ける

態々館林まで出迎へてくれたきよし君のこゝした顔を人込みの中に見出す。上野伊香保に於ける拙著祝賀會に汀草君と二人連立つて出かけてきてくれた時以來の面接である。足利へ着いてみると、幽夢、酒蝶の兩君は既に無事でゐた。東京から有風、竹人、壺中、半春の四君とそれに土浦から精風君が見えてをり。加ふるに、恰度奉天から歸京したといふ南崖君が馳せ参じてゐたのは頗る珍とするに足ることであつた。南崖君について、今はつきり憶ひ起すことの出来るのは、たしか大正十一年の八月、不圖したことから眼疾

に惱んで九段の河本病院へ入院してゐたときのことである。いろんな方面の朋友が尋ねて来てくれた中に、矢張り南崖君があつたことを忘れることは出来ない。夏といつても素晴らしく暑い廻り合せの夏で、私は看護婦に命じては、大きな氷塊を二つの洗面器へたてて絶えず病室の兩隅へ置かせたりしたことを思ひ出す。極暑と眼疾とに戦ひながら、俳句一つをよく作り得なくてゐた鬱々たる心に、ひよつこりとあらはれた南崖君が薔薇色の慰めをひと刷きしてくれたことはまさしく心の裡にのこる。今おもひめぐらすとすでに十有二年の歳月が流れてゐるのである。

一と昔ゆめのまなりし火桶かな

「豊國」とよぶ大館なる料亭。樓欄に渡良瀬の清流をながめておの／＼火桶を擁す。流れのほとりに布を晒らす乙女、川鴉を追ふ犬、落葉を吹き揚げる旋風が清澄な眼界のなかに點じられる。

豊國のをとめに秋の古瀬鳴る

渡良瀬や秋さる橋の人通り

夜に入つて閨中の静寂に坐る。この館は、そのかみ或る遊里の青樓であつたのを其の儘此處にうつして旅館としたのだと云ふ。結構、決して不潔な感じを與へたりするものはないのであるが、いささか鬼氣人に迫るものを感じないとは云へない。廣々した廊架が縦横に通つてゐる角あたりに、二方を障子で圍つた戯場の舞臺に現はれてくるやうな部屋があつたりする。内に明か／＼と灯された燈が静まりかへつてゐる。例の禁中、「小夜更け人静まりて、主上、人やある参れ、人やあると被召けれども御いらへ申す者もなし」の「盛衰記」の静けさより尙一段と駄菓子味に落ちた深刻な静寂が翼をひろげて障子のかげから押しせまつてくる。折節彈正少弼仲國参りたりけることの替りに、金糸銀糸に千羽鶴かなにかを縫箔した眼ざましい襦袢の花魁があらはれて來さうである。然うした空想からゆくと近松徳三が筆するところの「伊勢音頭」に於ける福岡貢は姑く措いて、そのあとのただ血だらけなお紺が青ざめた顔にうばたまの黒髪をふりみだし、すつくと障子の陰にたつてゐることも氷のやうに心頭をかすめる。萬燈の海、不夜の城、絢爛眼をまばゆくする華やぎのなかにあればあるだけ、その静けさの奥底に蠨蛸の赤腹を水翳に透かすやうな氣味わ

るい凶悪がたまらなく感じられた。私は獨り離れて、明るくて冷めたい燈光の下に深沈として眠つた。

秋の夜の誰が袖ふるる障子かな

秋の夜のつらだましひをさらしけり

白菊に丑満すぐる上座かな

坑

足利では非一見しておきたいと思つてゐたのは足利學校遺蹟と美術的な染織工場とであつた。足利學校の聖廟の中に置かれてある聖像と此處に藏されてある宋版、明版等の貴重な珍籍古書は既にながらく心を往來するものであつたし、八王子市の染織工業と相並んで關東に羈を争うてゐる足利市の、而もこれは又兎角に派手な第一線に立たらうとする激亂たる横顔でも一と眼みておきたいと思ふた。その二つの慾望が時間の都合で遂ひに果され

ずに足利を發たねばならぬことになつたのは遺憾至極であつた。なごり惜しく別れをつけた足利から桐生を経て足尾へ身をはこんでくれる列車は、常に渡良瀬の溪谷へ沿つてのぼつて行つた。行くにつれて車窓に展開する清流と紅葉を點じた山々峰々の風趣は何となく温泉町へでも導くかの感じを興へるものがあつた。足利から同行した汀草、柊子の兩君に土浦の精風君、東京の半春、南北、竹人、壺中等の諸君、それに幽夢、酒蝶の兩君。一行打ちくつろいだ談笑を乗せて列車の進行は頗るのんびりしたものであつた。四時間餘りを列車に揺られて、風景に陶醉し談笑を満喫しながら通洞驛をめざしてゐると、早くも不泥笹葉、萌光、山撫子、池楓等の諸君がどや／＼と列車内に乗り込んでゐた。通洞驛には更に多數の俳人諸君が出迎へてゐてくれるのに、鑛山の大景蕭條たる裡、潑刺たる人溫を感じる。

會場たる泉屋へ着く。

鑛山に宿かる園の芒かな

今、地獄繪が如實に展開されようとする。それは東道役笹葉君が指導するところに従つ

て、命之れ服せざるを得ないかたちでから、銘々着衣をかなぐり捨て、鑛山の労働服に着更へさせられ、坑内見學といふ場面が現はれようとするからである。小倉の労働服に烏打帽を被つて地下足袋のいでたちで、小さなカンテラを各々一個づゝぶら提げた。路に出て秋の小雨が煙るやうにはら／＼と來る中を歩いてゆくと、眼前、鑛山の事象すべては、全く濃い繪の具でぬりこめられた色彩である。すこし落伍しようとした私の後ろから誰かゞ呼びとめてゐる。ふり返つてみると、獨りの人影も認められないではないか。側には笹葉君が頗る元氣な姿で濶歩してゐる。雲をつく巨人の姿が眼前へ現はれてくる、行くに従つてかき消え、絹絲のやうな細雨を拂ふ秋風が冷やかな白い手を觸れては通つてゆく。通洞坑口から足並みを亂して這入つてゆくと、坑内の眩しい電燈の光りにカンテラの灯が、白光に燃えてゐるばかり影を淡々しく失ふ。その灯影が鮮かに四邊を照らして人影を坑壁に現はすときは、火星のやうに遠く坑内電燈の光りが見渡される。沈みきつた銅鑛の香。地下水の驚くべき多量の流れが側溝を走る水聲。首に双する滴り。さうして坑内一杯に漲る人々の跫音。次第々々に首垂れてゆく氣配が感じられた。粗鑛を運ぶための鐵鑛電車が蜿

蜒たる影を後ろから現はして來たので、笹葉君の指圖で一行二人づゝ其れへ分乘する。電車がすさまじい響きを曳きながら、明暗交々來る坑内廊下を走るにつれ、疲れ身がほどよい温泉の湯氣にでもつゝまれてゐるやうな具合に、うつら／＼と睡くなつて來たのは、或は自分獨りであつたかもしれない。廊下といふのは坑内の最も廣い幅員をもつた坑道をさして云ふのである。軒をかいて熟睡するほどの大膽か痴呆かの側へ屬さうともするわけではなかつたが、延べ坑程三百二十哩といふ此の鑛山を縦横にはしつてゐる大坑道は、幽明なうちに青黒い魔影を漲らせて、山姥の乳房に觸るゝやうな生温るゝ氣温と額に鉛する悒鬱と、疲勞への牽引力をもつてゐた。大地がいつか知らぬまに陥ちてゆくことをかすかに氣付くやうに、沈黙へ沈黙へと、不可抗力で引きずつてゆく摩訶不思議なるものがやはらかな手をもつて全身をつゝんだ。私が持つ幻想の中に、氣味悪い陰影を曳いた赤鬼、青鬼が躍つてゐた。ときに、弱法師が風に袖袂を吹きちぎられて來た哀憐な姿をあらはし、よろ／＼とよめくのが打ちながめられた。私の直ぐ耳元で、笹葉君が注意深く大聲叱呼して高壓電氣の通じてゐる裸線を棒切れで打つ響きが、たびかさなるにつれて、鐵鑛電車の

軌道をきしる響きと、遠近の坑夫が爲る雑音と混乱し、坑内に充滿しよれ返つて一種の交響樂をかました。さうしていよく夢心地で揺られた。鐵鑛電車から下ろされて堅坑の昇降機へ乗せられると、一臺四五人、眼の廻る迅さで暗黒な地底へ牽き下ろされるのである。道がに青ざめた人々の横顔が痙攣つて、眼がきら／＼とカンテラの灯影に輝いて見えた。現實のすさまじい衝動が、鼻の先きの友人を世になくなつかしいものにして突きつけた。堅坑の眞暗い中に友人の香を感じた。耳のほつりを矢繼早に魔の巖角が走るひびきが聞えた。たゞ一筋のワイヤ・ロープの神は坑道三四百尺の上下を終へて、身をしつかりと土の上へ立たせてくれたのである。第二步を踏みしめた安全なる土の觸感が身内をぞくぞくさせた。

秋風 にくしくしみあふ顔と顔

袖 につく土爽かにおぼえけり

坑道の歸りは本山坑口へ向つてゐた。人々の足音は次第々々に勢づいてゐた。行く手遙かに小さな圓形の穴が見出されたのはまさしくその坑口であつた。歩くに従つて坑口の圓

はだん／＼に大きくなり、坑外に秋日影のかゞやいてゐる山膚がはつきりと如何にも朗らかに見えた。

鑛坑 出れば秋山々の菩薩かな

ともがきの秋日につるゝ命かな

地獄繪の身にしみ／＼と秋日かな

秋の日や浮世の旅の影法師

山 莊

泉屋別館の樓上に催された句會を終つたあとが酒宴につゞけられた。配膳のあんばいが冴えた灯影をかぶつてづらりと置き流されたものである。障子をはらつて銀色にかゞやく鑛山の月に少時く嘯くほどな心の隙をもろかせられない人温微妙な場面が、たとへば障子をへだてた綿弓の音をきいてくる／＼とあたゝかい蒲團にくるまつたやうな氣持を感じ

させた。てんでにふかす苺の煙りが、それは濛々とたち罩めて道に廣い一座が紗を透して相接するやうなあんばいである。これが又素晴らしく宜い味なのだ。諸君自らいふところの「山の猛者達」が温容やうやく朱を仄かに露はし、いゝ喉を聴かせてくれた。土浦の紳士精風君すつくと起つて霞ヶ浦音頭を舞踊するに至らうとは、神ならぬ身の誰がこれを知らう。

山の月冷えまさりたる絃歌かな

旅人の足ふらくと新酒かな

十七日拂曉の空が煙りのやうな小雨を降らせてゐるかと思ふと、幾つも重なり合つて聳え立つた鑛山のすがたが次第々々にはつきりと見えて来て、一二時間の後には赤裸々なその全貌を現はした。私は朝食を攝る前に少しばかりの買物をあてに獨り鑛山町をぶらつてみた。小狗が一匹前を通つたり、鑛夫らしい若者が元氣のない貌をしながら懐手をして行き過ぎた。路上がしつとりと薄霧に霑つてゐる。下駄屋の女の子が建てつけのわるい妻戸をがたびしさせながら繰つてゐる。西洋小間物舗の飾窓の中でその主が何か陳列換へ

でもするのか家事に勤勉らしく早起き姿で働いてゐる。旅籠の烙印が捺したりしてある履物は、どこのいづこでも誠に氣持にびつたりしないものだが、やはり暫時の漫歩しか興へなかつた。歸りしなには「豊潤洞」といふ古河氏の別荘で催される句會の光景などが想像にぶらさがつて、うす／＼と眼前を掠め去つたりしてゐた。幽夢、酒蝶、壺中、竹人、南北、汀草、精風等七名の諸君と、それに足尾の十名ばかりの俳人諸君と相前後して、柏木平の山莊「豊潤洞」へ出かけた。途中の邸宅から石字君がタキシードへ這入りこんだ。すでに打合せがあつたものらしく萬端がその差圖で氣持よく運ばれてゐた。足利から足尾へ向ふ間も、どこやら温泉地へでも導かれるやうな感じを受けたことだつたが、足尾の町並をはづれて、短距離ではあるものゝ柏木平へ向ふ間の山川風物、これは又ひとしほ濃厚に温泉地らしい感じを興へるものであつた。とどろく溪流。それに沿つて幅員が廣く立派に整つた道路。美事な橋梁。農家を見かけることが殆んど無くて、いづれも文化的建築に成つてゐる社宅。其等總てに對して、全景、一木一草をさへとゞめることなしに、唯茶褐色を露はし天を衝いてむらがり立つた大裸山である。此の裸山は至るところに別府や箱

根のやうな熱湯の噴泉をもつてゐるかの感じを與へるに不思議はなかつた。地肌そのものが初見参者にとつては熱湯を想はせるに充分だからである。だが、事實はこれに反して最も冷たい銅鑛なのである。石字君は、天の一方に聳えてゐる山頂の日の光りに輝いた半面を、私に指さし示して。

「あんなに光つてゐるのがあれが露頭です」

と説明してくれた。私はふり仰いで少時その露頭の光りをめづらしく見詰めた。頂ちかく、薄雲が少し、わたつてゐたのが、だん／＼に瑠璃色の空へ溶け込んで果敢なげに消え／＼になつていつた。

柏木平の入口で皆が車をすて、直ぐその樹がくれに森閑として見えてゐる豊潤洞をめぐめて小登りに登つて行つた。豊潤洞と云ふのは陸奥宗光の別荘を古河男が貰ひうけ、そつくりそのまゝ此處へ移し建てたものだといふ山莊であつた。打ち見た眼に豪華な感じを與へるやうな點は少しもなかつた。家を折り曲げた間どりのあんばい、雪隠の趣き、床、或は障子、然うしたものから、奥ゆかしい若干の時代的香味と當初所有者その人のい

くぶんかの嗜好を掬うると云へば然う云へた。この建築の建具に使用してある硝子などがその時代のもを其の儘用ゐてあるといつたやうな微細な點にわたつては、茶の間一つのぞいて見たものではなし、判らない點が多過ぎるものゝ、他の見聞に觸れたところから或る程度想像もつくことではあるが、私にとつて最も興味深いことは、此の山莊をかゝる山間の柏木平なる地點に据ゑたといふことにかゝつてあつた。うちつけに観察しがたい或る種のぜいたくの良さとても云ふか、無用の長物を飽くまで無用の長物として生し徹せしめた二曲屏風の味にその風趣を通はせ得たことを感得したのである。これに對する林泉もその素朴なる荒削りのところが面白かつた。溪流を通じて、ぞんざいな瀧をあらはしてゐる下に淀をしつらへ、汀にそくばくの杜若をあしらつたり木賊を植ゑたりしてあつた。さうして此の空を蔽ふのに素晴らしい老樹の柏をとび／＼にしてあつた。背景の全部が、高峰峻嶺であつた。この山莊に靜かなる圓座をつくつて二十人あまりの俳人が俳句をつくり合つたのである。縁の籐寢椅子へ腰掛けて、前方に展けた山峽の空を眺めると、樹立を透して、遠く空をついて聳えてゐる例の鑛山が見えるし、手近かには、雜木の間に其處此處

植林した檜や杉の黝々した林相が鮮明にみえる。足もとの籬には八ツ手の廣葉が繁つてゐた。八ツ手の葉がぐれにダリヤの花が少し霜にうたれたけれどもまだ充分韓紅をたもつて見えた。

見てあれば零餘子こぼるゝ籬かな

鑛山の雲がゝりして秋の晝

水翳に枯るゝもありて木賊かな

鶴 鶴

豊潤洞から柏木平の廣い山路をタキシシーに揺られて足尾の町外づれにある旗亭に着いた時恰度正午頃であつた。皆、此處で晝餉を終へた。拂曉の小雨に洗はれた山々峰々の嵯峨たるすがたが、鑛山町の町並に聳え、一杯に秋晴れの日影をあびてゐた。碧瑠璃の深空にくつきりと輪廓をみせた草木のない山膚が清淨と打ち仰がれた。その峰つゞきの一方の峽

をたどつて中禪寺湖へぬけようとするのが今日の行程であつた。中禪寺湖畔へぬけるまでに、峽路をたどるに従つて路は次第に峻しくなり何時にか半月峠といふ峠を跋涉することになるのだといふことを誰か話してくれた。旗亭のすぐ横合から道が通じてゐた。竹人半春、汀草の三君、それから土地の石字、笹葉、翠浦、萌光、松蟲等の諸君と袂を別つて一行は南北、壺中、精風、幽夢、酒蝶の諸君に足尾の俳人十餘名、すこぶる元氣ないでたちで町裏の路へ出ぬけた。往昔から無数の旅客が踏んで往き來した山路が、赤裸々な鑛山のふもとを帯のやうになが／＼とはしつてゐるのが遙かのあたりまで見渡された、爪先登りにとぼ／＼と歩いてゆくのであるが、おびたゞしい礫が折々靴裏へ石車をくれるので危く仆れさうになる人々も見うけられる。一木一草の青緑も見られない裸山から、麓路へかけての風景は、さながら砂漠の感じである。斜面の輪廓をはつきりとみせた山の背景をなす重疊たる白雲は、清澄な秋空にいちじるしい光りを放つて、ひろく行く手の路の岫をもさへぎつてゐた。路にうちつゞいた一行も駱駝によらないのを惜しむばかり、キヤラパン風景を思はせられるものがあつた。出發の旗亭で、不泥君外一二のもの／＼しい登山靴を

見かけたとき、その仰山なのが、ひそかに微笑させられるやうな感なきにしも非ずだつたが、漸く登るに従つて合點ゆくものが切々として胸を打つて來た。酒蝶君などは早くも肉刺をふみ出してしまつたらしく歩く恰好が同情に値した。溪流あり、橋あり、急坂あり、廢屋あり、小禽あり、轉る樹林あるに逢ふて何時にか鑛山地帯をぬけ出てあか／＼と滲透した日影に映えに映えてゐる素晴らしい紅葉を見かけ得る風景中を辿つてゐることに氣がつく。七曲りの峠路から、たゞ雜草が蔽ふばかりの山へかゝると、展望が次第々々に晴れやかになつて、送迎違ない山嶽の起伏が、人々の口から讚嘆のことばを洩らさすやうになつていつた。いづれも紅葉のうつくしさであつた。私は、峠の頂が遙かにそれとうち眺められる個所の徑ぞひの草むらに慰ふて、眞向ひの嶽の大觀に少時く心をうば／＼れたものである。大空を劃して三角形の緩い二邊がかたちづくつてゐる大嶺の腹に見入ると、其處はまばらな白樺樹林であつた。一本々々しろ／＼と鮮かに見える白樺は、その素直な樹相が手をあげて、成るべく多くの時間を其處にとゞまるやうに命じて來た。樹膚がはなつやはらかな光りは、甘くして悲しい涙を旅人の眼から要求する光りであつた。王朝禁裡の婦女

たちがなよ／＼とした白い手をさしのべて短冊を枝にむすんだ紅葉。詩歌三昧に陶醉した殿上人が狩りかたげた影法師を月光の這ふ築土にちらした紅葉。龍頭鷄首の絃に浮ばす流觴にちりかゝる紅葉。それにまがうかたなき絢爛たる古典の繪卷は、鮮かにも韓紅、臙脂黃紅、鬱金とり／＼の刺戟を感傷のるつぽに溶かし込んで、澎湃たる影と光りの波を咫尺の間に煽るのである。私は生ま／＼しい現實の眞の煙りを口腔から吹きとばして、この大自然が踊りくるふ中に呼吸した。

日輪の伸び縮みするもみぢかな
靴さきの龍膽のつゆありやなし

半月峠絶頂の茶屋をゆく手に遠からずみとめ得る頃から一行の元氣が皆盛りかへしてきてた。俯瞰しても迎も瞰定めがたく深い幽谷の老樹の梢を脚下にして、ぞろ／＼とつながつて行く誰彼が、これも亦年經た大樹の幹がくれに山腹を縫ふ山路を辿つてゆくのである。齡若い村嬢だちが緋の蹴出しを遠くから華やかにみせてやつて來る幾群れかに出逢つた。感じ易い性を抱いた一行の若い詩人たちは、なんとなく嬉々たるおも／＼ちを浮べてから自

然と人事を適當にちやんぼんしたカクテルを掬した。自然美の完全な陶醉にへとくになつた人々の心が、幾分甦つたかたちである。人煙を絶して、苔むした老樹と、清淨たる岩石と、香のつよい山土と、乾いた枯草と、風に揺れる枯蔓と、さうして近く流れる薄雲と只一つ瑠璃にかゞやく日輪。この間に點在する人間が三千年前に同じ山風の音を聴き、同じ土の匂ひをかき、同じ日輪を仰いだ人間と果してどれだけ區別することが出来るだらう。一人の詩人が言ふことには、

「あなにやしえめのこを」と。

然しながら詩人の艶々した髪には匂ひの高い香油がふくまれてゐたし、ネクタイは玉蟲色に光つてゐた。たゞそれだけが三千年の歳月の流れをものがたつてゐるばかりである。

世を経たる巖ぼろくくと露の秋

深山風鶴鳴分れ翔りけり

半月茶屋の展望。こしかたに律率たる大嶺雲を拂つて群がり。ゆくえを俯瞰すると薄霧のたちこめた中に中禪寺湖が想はれた。茶屋の榻を吹くはげしい山風の中で皆熱い澁茶を

すゝつた。

高^ト西^シ風や茶碗にあまき土埃り

急勾配の峠路を中禪寺湖めざして下つて行つた。一行の誰彼もいさゝか歩き疲れてゐた。こゝでもたま／＼打ち連れだつて登つてくる多くの旅客に出逢つた。その旅客たちの中には、急坂をあへぎ／＼登るに堪へがたくて、杖にすがつて玉の汗を流してゐる婦人なども見うけられた。極度に疲労した脚の膝坊主が、下るにつれてくすり／＼と笑つた。それが又ひどく五臓六腑に應へた。熊笹の生ひ茂つた麓路をたどりぬけて、湖畔の美人茶屋へ着いたときはでんでに崩れるやうに路側にそなへられてある榻へ腰をおろした。露をふくんだ山かづらが眼前の樹々に澤山ぶら下つてゐた。たま／＼脆く落つる蔓の葉が休息する心になごやかな味を泌ませた。落葉が、時々大きな水槽の中へもひるがへつた。水槽の中には無数の鮭が游泳してゐた。やがて、湖岸から、一行の疲れ身をのせた二艘の舟が、うす／＼と夕景色を漂はせはじめた湖上へ浮び出た。奥日光の山々峰々がのこんの夕影を仄かにあびて、温泉煙りが遠く幽かに見渡された。黒髪山の頂きは笠雲に閉ぢられ、中腹

から籠へかけて今を盛りに紅葉した林がその樹相を鮮明に見せた。誰も彼も疲れを忘れて童心にかへり、蒼涼たる波が靜かにうねつて彼を甜る舟の中に欣然として俯仰した。

一夜の睡りを托さうとする米屋といふ旅籠がすぐ其處の湖畔にあらはれた。東京へ急ぐ壺中、南北の兩君と、土浦へ歸る精風君とが、此處でなごり惜しい袂を別つことゝなつた。三君は自動車の小窓から淋しげなまひを投げた。米屋旅館で晚餐の膳を共にして少時談笑を交はした後、ふたゝび足尾へ引き返へさうとする其地の俳人諸君の面影が、宵闇をさへぎる玻璃窓に別離の情を漂はせた印象は、げに永遠の強いまぼろしである。誰か克くこれが心の烙印を湮滅し去るといへるよう。

がらんとしてしまつた座敷にぶら下つた秋燈の下に、酒蝶、幽夢兩君の淋しげな二つの顔に又一つ顔を向合せた。

秋の闇こゝろの玉をひろひけり

明くれば十八日。夙に湖面を染めた朝日影が枕邊にもさして、好晴の旅路がすがすがしく心に蘇生した。宿をたち出た三人の旅人の影が湖面へ返へず激轟たる水光に照らされな

がらとぼく／＼と歩いた。華嚴の瀧が、乏しい水を縷のやうに垂れてゐるのを遠く高處から眺めてみて、案外なおも／＼ちをかたみに交はしあつたりしたが、瀧壺まで下つて、ふり仰いでみると遠に多少の瀑勢のはげしさを觀望することが出来た。

日光靈廟の参拜は、澎湃たる濤のやうな無數の遊覽客の中に打ち交つた。心にも宿つてゐた此の靈廟が、はじめて接した眼に輪奐の美を極めて展開された。蒼古な建築に、朱と金具が巧みに配されてあるのを觀た。蒼鬱たる綠樹がこれを圍んで幽邃滴るばかりである。旅人が杖を曳いて陶然たるものは直ちに肯けるところであつた。だが、私はこの中で然うした衆目をおどろかすもの以外に一つ面白い拾ひものをした。恰度、唐門の一つ手前で、かつてきてゐた御廐の三猿でも見ようとして行くと其處に立札が樹てられてあつた。それには靈廟築造の頃、諸大名が國々から、献じた燈籠の數と種類とが數字で揭示してあつた。何十對かの多くの石燈籠と、何對かの青銅造りの燈籠と、さうして唯一對の鐵燈籠とがあることを語つてゐるのである。私はこの一對の鐵燈籠といふのに興味を感じた。ひそかに自分の心に其の誰たるかを問ふてみた。私の心は直ちに仙臺の城主伊達政宗

あたりを描き出した。顧みてこれを幽夢君に嘔きながら、あたりを探したが、おびただしい石燈籠が送迎されるばかり絶えて鐵作りの燈籠とは發見されなかつた。漸く唐門の磴下に近づくに及んで、その門下の石垣詰めに緒茶けた姿の、極めて武骨な一對の鐵燈籠が見出された。酒蝶、幽夢兩君をうながしながら歩をはやめてその燈籠に近づいてから、刻された文字を讀んでみると、年経ても尙あざやかに「仙臺宰相藤原朝臣政宗」としてゐるではないか。雨露風雪にさらされたるその風貌。當時の強豪彼政宗が面だましひは躍如としてこの鐵錆びの緒茶けたるごつ／＼した男性的な燈籠にやどつてゐるのである。歲月の流れを超えて、私はこゝに新鮮潑刺たる藝術に於ける個性の問題を沈思默考した。日光靈廟の杉の梢に、幽遠な響きをふくんで初嵐が吹きわたつて來た。

閑かさや秋逝く土に靴のおと

影とめて旅ゆくみちのすよきかな

歸庵

旅もどり爐近き蟲もなごりかな

(昭和八年・二〇)

癸酉ノ秋旅中詠草

昭和八年十月十四日。西新井小川鴻翔新居に催された
る瓏々會に於て。

秋の風龍駕かゞよひ往き給ふ
仰がるゝ薦の破れ羽や秋の風
青々と仄めく菊のつぼみかな
道中の側女もはべり西鶴忌
詠人にもし蕭たる西鶴忌

同十五日。足利市「豊國」に於ける俳句大會にて。

雪月花夜ながきゆめのむすばれぬ
岩けづる秋水翳り流れけり
水翳に秋鶉は迅きみよしかな
榛の月曉けまさりつと渡り鳥

同十六日。足尾町松原泉屋別館に於ける大會にて。
悪業もなく朽ちはつる案山子かな
詠人に霧の花濃し園のみち

足尾銅山即事 三句。

機關車に雲や鴉や秋の山
草もなき嶽の群ら立つ狭霧かな
鐘坑出るや霧たちのぼる五百重山

同十七日。足尾柏木平なる豊潤洞に於ける句會にて。

銅山の秋色ふかきかしまだち
秋光や隠栖をとふ靴の音
秋光になほ紫陽花のふかみどり
隠栖の花弁も焦さず秋日満つ

同十八日。東京上野公園花山亭に於ける雲母支社同人
主催の大會にて

蜻蛉のおとろへ落ちぬ枯蓮葉

足尾町二句

山町の醫局は月に狎遊ぶ
花街の灯月の銅山そびえけり

同十九日、神田有明館に於て

八專の稻田の水や蓼咲ける
深窓にそだちて愛づる花火かな
手花火の穂の颯つくと牀几かな
手花火の炎を喰まなと思ひけり
撃ちとりて椋鳥白き羽のあはれかな

夜も漸く十二時に垂とする頃ほひいよ／＼熱し來れる

諸君の強要するがまゝに

切株に置いて全き熟柿かな
草童に柿たわとなる蛇籠かな
あかね空花野の萱のとぶ架かな

道中萬華鏡

おもひで

旅立つたのが四月の二日である。

甲斐峡中の水をあつめて、ひと落しに落してゐる富士川の流れば、かじがき鵜澤といふふるしゆ古宿のあたりからまつたく趣きを變へ、いかにも本邦三急流の名にふさはしい河川の景觀をしめしてゐる。富身電車は素より、中央線が甲府と東京とをつなぐ前は、御坂峠とか笹子峠乃至柳澤峠と云ふやうな四時白雲のたゞよつてゐる峻嶺を越えて行くほかには、鵜澤から時間船に乗つて十八里の急流を下り、東海道岩淵の宿へ着いてから、こゝで大江戸へ向ふなり京・大阪へ行くなり、おかしやうき陸蒸汽の便をかりるよりすべはなかつた。であるから、軍隊へ入營

する若者たちが、日發ち夜發ちの慌しいあんばいだから、大雨後の激しい奔流に船を碎かれて、あたら花の命を亡くしたといふやうな話も、幼少の耳へ折々きくとめたことがあつた。岷澤宿からほど遠からぬ郷になにがしといふ豪農があり、その愛娘の、花にもまがうやうな二人の姉妹が、身延山へ參詣するために、富士川を船で下つたが、天神巖といふ激浪渦巻くあたりで船がくだけて、そのなきがらさへ揚らなかつたといふ、あはれふかい昔譚が、いまでも、童女らがもてあそぶ手毬の唄にのこつて此の國原につたへられてゐる。私が始めてこの流れを下つたのは齡のころ十四五歳でもあつたらうか、兎に角いくばくか心慄に、春の花曇りにも似たやうな氣持をかきいだいた齡頃であつたやうに記憶する。岷澤の旅籠を、二番鶏の鳴くころには立ちいで、番頭の提げた提灯に足元を照らされながら、富士川の岸邊へついでみると、曉の薄闇の中に船がづらりと並べられてあつた。その中のどれか一艘へ乗せられるのである。廣々と見わたせる河面が、仄かな波の光りをふくんで何かしら押し迫るやうな川音が漲つてゐた。宿外づれの河岸は黒々と蟠つた山から山へつゞいてゐた。さうして連山の中腹を横ぎつてゐる道沿ひの家々に飼はれてゐる雞

が、いよ／＼拂曉にちかづく鳴き聲を幾度となく長々とひゞかせた。そんなことも心に浮んでくる。早くもさきに纜をといた屋形船は、この川船獨特の、おもひきつて虚空へ上げた舳を川下へ向けて流れ出してゐた。私たち少年仲間が、坊主頭をつき合せた屋形の中にも行火が眞ツ紅な火をほのめかして、仲春とは云ひながら、きびしい餘寒を犇々と感ぜしめるところから、たまらなく嬉しいものに覺え其れにかじりついてゐたことを記憶する。ゆる／＼と屋形が動くかと思ふと、舟が纜をといて岸を離れ、たちまち中流へ泛び出た。夙くに薄闇へはる／＼と消えた曩きの時間船の櫓の音が、ギィーと、又間をおいてはギィーと、ゆるくかすかに聞えるのが、たよりないやうなかなしげな聲だつた。薄闇の波間から、をり／＼小鴨の群れが櫓の音に驚いてとびあがる羽音を聞いたりした。平家の雑兵ばらが、これの大群に吃驚して逃走した物語りも少年の感じやすい心に恰度錦繪を繰りひろげるやうになま／＼しく浮び上つたことである。夜のとばりが、すつかり打ち開かれて、屋形にみなぎる春日影に、行火の白灰がふか／＼とまひたちさうになつた。もう其のところには兩側にひろ／＼とつらなつた磧から、鶺鴒のとびたつて翔けてゆくのが眺められ

た。然うしたやうな、往時を偲びながら、今は、おなじ旅の身を電車に揺られて、いつの間にか身延も過ぎてしまひ、甲斐大嶋、内船南部、十嶋といふやうな、山よりは寧ろ水にえにしの近いやうな驛名を持つあたりを通つてゐた。三十有餘年の歳月が其處の斷崖のものと流れる富士の水よりも迅く、夢のやうにすぎ去つてしまつた感懐がしみくくと心に湧くのである。このあたりまで來ると、富士の流れはいよ／＼河幅をひろげて、あるかなきかの薄霞に俯仰される山水は、はなはだ大景を展開する。磧に聳る鴉、河波をかすめる河原鶺鴒、漸く咲きほころびた漁農の宿の吉野櫻の花がくれに、河岸一帯の連嶺は、遠い頂にまだ古雪をかむつてゐる。

落杉茶かげろふ巖のほとりかな

内船南部にて

うす靄に嶽日永くて柚のみち

裾野、富士驛にちかく

大宮野馬耕に春の虹たちぬ

明 暗

海濱沿ひにひよろ／＼と黒松が伸びたつてゐる。その向ひは紺青に盛り上つた海原で、たま／＼白い翼をひろげた鷗がひるがへつてゐる。鷗は、どうかすると、こちらの青々とした麥畑へまで風に乗つてくることもある。その邊にちらばつた漁農の伏屋を蔽ふて、黄に熟した夏蜜柑が、うちつけに温暖の氣候を偲ばせるに充分な實をつゞつてゐる。さうした風景が、東海道を上下する旅客をよろこばせる蒲原、由比、興津、袖師、そのあたり一帯へかけての展望である。私も、すでにいくたびかこの風景の中をよぎつた。元祿七年のむかしに、

駿河路や花たちばなも茶のほひ 芭蕉

と賞されたるこの土地の風味。いま早くもほの／＼とした嫩芽を粧ふた茶山が、瑠璃色の空をかぶつて、春光を湛へてゐる。然ういふ窓外の明朗な風景に反して、これは又何と

いふ動ずんだ呼吸ぐるしい内部の空氣だらう。鼻先きに、えも云はれぬむさいものが蠢動してゐるではない。自駄樂な老婦がもつてゐる特有な髮油のくされた臭ひ！ 縮れ毛が強いてかき上げられた老婆の頭である。いかなこと止まるべくもない縮れた後れ毛は、雲雀の巢を割つたやうに、亂雑に垂れさがつてから醜惡を擴大してゐるのである。何かなげ出された響きを、すぐ身のほとりに感じたとおもふと、あちらの窓下を枕にして寝てゐた老爺が、やをら起き上りさま松丸太のやうな肢をなげだしたのである。むじやくと毛の生えた太股を、二つ三つ掌でなぐりつけてから大欠呻を天井へむけて吐きちらした。この松丸太が、べつと唾を吐いた腰掛の下は、むき捨てられた蜜柑の皮と辨當の空箱と、ふん反りかへつた麥酒壘とで山をなしてゐる。三等客車の酸つぼく毒甘いやうな匂ひが充滿してゐるのである。胸毛をあらはにした松丸太が、何か二言三言いふと、こちらの雲雀の巢がいまゝで借用してゐたとおぼしい、握り太の煙管と大煙草入を一緒に渡せば受けとるが早いか、苜をぐつと一とひねり詰めこんで、すつばくと燒嶽の噴煙めきたるを吐き出すので同席してゐた何處かの制服を一着した御曹子、黒塗りの頭髮を片手で觸はつてみながら

起つて不淨場か何かへ行つたのも無理はない。それにしても松丸太と雲雀の巢が夫婦であるらしいことは遊子をして一驚を喫せしめた。更らに、も一つ遊子をしておどろかしめたことは、雲雀の巢の前に、可憐花のやうな乙女が、うなだれて坐つてゐることを發見させたことである。うなだれてといふよりも、もつと克明に云ふならば、何時からか泣いてゐることである。その眼のほとりといひ、唇のあたりと云ひ、總ての表情からいつて、又これからでも直ぐに、眼へいつばい涙が湧き出してくるだらうことを想ひはかるに充分な眼なざしである。結局詩人風羅坊の場合に於ける富士川邊りの捨兒でほかあり得なかつたところの、この謎のやうな點景は、いさゝか月並めきたる筆法で云へば、これから泥水の深みへと墜ちてゆかねばならぬ運命にある蓮の花(?)の蕾であつた。彼等の、ときれくに交はす會話が、遂ひによく遊子をして肯かせた。

名古屋、京都、大阪と走る間に、夜の色がしだいに深まつていつた。外界自然の明暗と、車室内部の人事的明暗とが、いよゝゝ複雑に織り交つてゆく間に、この自然に對し又人事相に對して、青年がいさゝかやうな感情の瀰漫を覺えながら、灯の海原にまがふ神戸

港街の明るみへと近づいてゆく現實を感じた。さうして、フォードル・ソログープの「私は野卑にして賤劣なる人生の斷片をとつて、それでもつて蜜のやうな甘い傳説をつくる。なぜならば、私は詩人だから。私はでくくと肥え太つた緒ら顔の賤女のやうな人生を好まないから」といふ言葉を思ひ出しながら。

夜の港街がばつと眼前へあらはれた。

春の灯に旅愁の顔をさらしけり

神戸風景

山の手の閑かな旅籠に一泊する。大阪の驛頭に突如として現はれ其の後同道してゐる南北君とともに、神戸支社諸君の人温を感じながら、ふるさとにあるのおもひでくつろいだのである。

翌くれば、墨石、曉雨、草史、南北、紫津女等の諸君とともに、くるまをとばして阪神

合同の大會へむかふのであるが、好晴にめぐまれた扇港の天地は、塵埃をとどめぬ街路のプラタヌの若芽と、コバルトの穹窿と、さうして、はるかなる林檎とが、路上を織り混つてあるく東洋人と西洋人との感覺へ、たゞに繪畫的な、さうして又音樂的な色調と音律とを流動せしめるかに見わたされた。

神戸の地を踏むことは、もはや數回に及んでゐるのである。神戸繪卷の、濃く又淡い、茶けた而して嚴かな、雑多な印象が夢寢のあひだにも來往する。――

雨で少しうるほつたあとの廣いアスファルト街路。この街路が緩い起伏の送迎に違ないのもこの市街の特色である。電車は、飢ゑた畜類のやうな喚叫をあげて曲るかとおもふとたちまち緩い起伏の軌道へとかかつて、もし薄月夜でもあるならば、架線を仰ぐと、桐の花のやうな凄じい電光を發ひらいてゐる。その下に、ニグロをひきぐしたる競馬好きの窈窕たる夫人が夜風に仆れさうな恰好でから、タキシ一の扉を排したりしてゐるのである。なぜ競馬好きであるかは、携へたオペラ、バッグが證明した。街路の波！神戸特有のこの波にゆられるくるまの内で、囁く話題のなかには、たま／＼港のマドロスについての刺戟

強いものがとび出して来る。同乗の一人が或る俳優たる船舶部員の参着遅いことを誰かと語り合つてゐるのを訊くと、A—丸の船員の葬儀のためだといふ。その船員は、大荷物船A—丸の木材引卸しに従事してゐる間に、あやまつて船底へ落ちた。頭が柘榴のやうに碎けてしまつたと云ふのである。日常つゞき起る恚ういふ出来ごとは、船舶部に生活する感銘からすると、恰度、汽車の發つとき、驛長が手をあげる程度のものであるらしいのである。人生が一片の平らな塊になつて街路の靴の下にあるのを見た。

或る俳優の案内で、K—ダンス、ホール一見の光榮に浴した。恰度、晚餐を終つて二三時間をすぎた秋の宵であつたと思ふ。ドアを排して入るとボーイが慇懃な態度で迎へてくれた。と見ると、われ／＼の二三秒前にも一組の男女が、素晴らしい盛装でから、別のボーイに衣類の塵を拂はれてゐるところで、女は裾模様の和装だつたが、男は瀟洒たる洋装だつたので、鄭寧にオーバアをたゞまれて、みがき上げた様なすがたで背廣のまゝ女とともに階段を踏んで上つていつた。私たちに對するボーイの瞳は、最大級の敬意をもつてゐることを意識されたが、オーバアをとつて疊んでくれなかつた、餘りに自由を與へすぎ

たことが心竊かに若干の不滿を感じさせた。それでも、友人が、オーバアの儘で、ボーイに案内されてぐん／＼階段を上つてゆくので、私もあとから——しかも禁じられてゐるらしい眞をぶか／＼燦らして従いつた。階段をのぼりつめて、一つ二つ重い大きな廻轉扉を排してはいつた。此のドアの際で、眞青の妙な服装をしたボーイは、片手を思ひきり水平に伸ばして、この部屋へお這入りといつた會釋を、しなをやりながら黙つてしてみせた。私は、幼時たま／＼見たことのある川上音次郎と貞奴が舞臺へかゝる滑稽な光景を、どういふものか、瞬間心に想ひ浮べてゐた。貞奴の、あの鼻腔と、音次郎の廣茫たる顔面とが、はなはだあざやかに心を掠めたのである。ホール内部の音楽の律動が、岸近く廻瀾をあびるやうに、耳へ漲つてきかれた。床へ觸れる靴の踵が、シアターを踏むやうな心地を感じさせながら内へ導いていつた。と、シャンデリヤの光りを浴びて渦巻いてゐる男女の顔が、颯つと一齋にこちらへ視線をむけた。こゝでも亦、渦の輪邊をしづかに案内されながら通つて、綺麗な一個の椅子へ腰を据ゑさせられた。卓子は、さかんに旋廻するダンスの氾濫を一望し得るやうな、こゝろもち高みに位する個所にあつた。後から／＼新

手な紳士淑女がはいつて来て、一と組みづゝびつたりとからだをくつゝけてはステップを踏んだ。けれども、どこか少し堅くなつた、云はゞ享樂を堰くやうな氣配を私等に感じさせてゐた。この人形めいたる一群の男女を眺めてゐるうちに、そのなかに、頭顱がほとほと燈光を反射するところの紅毛人が二三人混つてゐることを發見した。彼等は、いづれも鳩のやうに弱々しく可憐なる乙女を、思ひきりひつ吊るしてぐる／＼旋廻してゐるのである。ダンサーの裳裾は時に朝顔のやうにひらいて、汗ばんだ重苦しい香をおくつて来た。仄かな湯氣をたてゝゐる紅茶を吸つたあとで、この雰圍氣に食傷をおこしかけた意を友人に通ずると、彼も亦嘯いたる貌をして卓子をはなれた。階段を下る途中、彼は雪白のハンカチをとり出して額の汗を拭いた。彼はH——署の高官であつたのである。

雲濤君の案内で、墨石君と三人、黄檗といふ普茶料理をおとづれたことがある。

亭の庭前に敷きつめられた玉礫が、打水をあびて光つてゐる上を、くるまを下りた泥靴でざつ／＼と踏む漫歩の心地がすこぶる宜かつた。青々した八ツ手のかけにぶら下げら

れた軒の雲板を、一つぼこんと叩くと、綺麗な乙女が出て来てかまちへ三つ指をついて迎へた。乙女は、うつくしい着物を一着に及んで淡栗色の腰衣をつけてゐた。廊架を二た曲り三曲りしてから、とある部屋へ落着いてみると、例の卓子が置かれてある。そこは先づ尋常だが、一隅に小さな蒼古の釣鐘がぶら下げられてあるのである。中華民國の粹に徹しようとする俳人雲濤君がやをら起つて一つ叩くと、餘韻嫋々、やうやくにして婀娜たる國色、いともしとやかに繁若湯をはこび來るのであつた。

好是清涼地

都無繫絆身

晚晴宜野寺

秋景屬閑人

淨石堪敷坐

寒泉可濯巾

自慙容鬢上

誰か白氏のみでこの情を委せんやである。白雲が、樹木の間まひ下るは、かならずしも鐘聲の餘韻がもたらす幻想ではなかつた。雨のやうな泉聲が窓外にきこえてゐた。鳥羽繪に見かけるやうに、膝を前へ長くのばして、寛いだ上體をうしろへ崩れさうなのを辛うじて支へた兩腕、口に菓を嚙しながら首をかたむけた恰好で、窓遠くつらなつた高みの林間をふり仰ぐと、深山幽谷からたちのぼる一條の煙りが、初秋風の日影をうけてしろくと吹きみだれんとしてゐるのを見たことであつた。

恰度朝食をすませた頃、墨石君が宿へやつて来て、S—丸へ遊びに行かうといふ。南北君と三人で、くるまを馳らせて三菱倉庫の建ち並んだ地域で下りたつと、碧い海、直線で割する建築、金屬の匂ひ、船乗の會話。煙筒の煙り、それらが俄然われ／＼のすがたを油繪のやうに地上に印した。海風に吹かれながら先頭をきる墨石君の瀟洒たる背廣の上着がオフィスの匂ひを頻りにふつとばされてゐる。旅愁を紛失してしまつた南北君の肥えた腹

が爆笑をつゞけてゐる。舳へ乗つて、青波をつき切つてゆくと、無数の鷗が芥の漂ふなかに浮んで、粒々した黒耀の瞳をこちらへむけて揺られてゐる。と、忽ち翔けみだれる中を通りすぎてS—丸の舷梯を上つてみると、ながらく航海をつゞけて久しぶりて寄港した彼の女は、ふところの船員だちをすつかり市街地の紅塵のなかへとはき出してしまひ、しんかんたる爲體であつた。船長のY—氏に紹介され、その船房で鳥渡御馳走になつてからしばらくの遊歩をこゝろみる。日和のやうでも海風は割合に肌をうつた。上甲板で記念のカメラにおさまりながら、扉港背景の山々峰々を眺望すると、その邊りはほのかなる淡霞を罩むるかの氣配である。

阪神大會の會場にあてられた甲陽館といふのは、夙川驛近い公園の内にあつた。ひろやかな幅員をもつた高い礎を踏んでのぼると、甲陽館の玄關へつき當る。礎を踏んで登りながら、たま／＼吉野櫻の花蕾が、頬や肩を撫でるのに出喰はす。よくみると蕾はもう綻びかゝつてゐる。ふり仰いで、日當りのよい梢をながめると、蕾どころか盛んに花をひらい

たのが認められた。会場へはいつてみると、大阪驛に南北君があらはれたやうに此處に亦有風君がにこ／＼したおも／＼ちをしてあらはれ出た。

大會を終へ、翌B K放送後、新大阪ホテルに投ずる。こは之れ南北君が、やまがつをしてホテル、ニュー、オーサカの一宿を喫せしめんとする遊戯的好意の導くところである。

山廬のあるじは、大阪の諸君と共にぞろ／＼とこのビルディングの内部を押し歩いた末、休憩室のソファに、跳ねかへるばかり腰をおろして、毯のやうに軀の躍るを感じた。

薫香にゆく春の扉をひらかしむ

蜘蛛

やうやく深沈として更けわたつてゆくホテル・ニュー・オーサカの大伽藍のなかに、地底の、若しくは天界の、唸り聲を聴くやうな昇降機リフトの響きがつたはつてきた。大伽藍と云つても、それは私自身の感覺の誇張で、現にリフトの凄じい音響は、夜更けて尙怎麼に旅

客がひつきりなしに昇降してゐるかを物語つてゐるし、廊下の華麗な絨毯を踏んで、肩を摩してゐた紳士淑女たちをおもひ浮べないわけにはゆかない。たゞ其等の大半が夜闌を寢沈んでゐるしづかさから來る感じである。私は二三枚の葉書を認め終つて、苴に火をつけた。けむりがたちのぼつて、大きな化粧鏡の中に深くゆらめく影が、少し氣味わるい感じを興へた。ベッドの上に懸けられてある壁間の吊額が、なんとなく不調和に感じられるので、近づいてみると安藤廣重の版畫であつた。例の東海道の古宿が、濃い紫陽花色の海を背景にしてゐるのである。こゝの支配人郡司さんの趣味が一通りあたまの中を掠めさつた。寢ようかとおもつて、鏡の前に立ちながら、ネクタイをほどいて、トランクのナイトガウンをひつぱり出してから亂暴に裸身に纏はうとすると、なんか鏡から頭へかけて蜘蛛の絲がひつか／＼つてゐるやうな感じがした。鳥渡拂ひのけてみたが、すると又バスの部屋の方から銀色の絲が左の耳のあたりへまどひか／＼つてゐるやうな氣がした。私は慄然として佇んだ。地底から湧きおこるリフトの響きは魔のやうなつばさをひろげてゐた。蜘蛛！蜘蛛は、あらゆる蟲類のうちで私の餘りこのまないものである。本邦の會呂利怪談咄や狗

波利子が傳へる、眼は鏡のやうに大きく、爪は銀光をはなつてをり、手足は龍のやうで長さは一丈三尺五寸にも及んでゐる蜘蛛。ギリシャ神話の、處女アラクネの物語にあらはてくる蜘蛛にしても、古文獻の織りなすあやは、たとへば輓光を憫ます土蜘蛛が着た錦繡の其れのやうに、うるはしい感じを與へないことはないけれども、私の訊いた或る少女があやまつて蜘蛛を食べたところ、蜘蛛の毒素がたちまち全身へまはつて、皮膚の色がみるみる凄じい斑點をもつた蜘蛛のからだの色に變つてしまつたといふ、生ま／＼しい現實的なはなしになると、氣味悪く、膚に粟を生ずるものがある。學者の説によると、蜘蛛は六十七科二千五百餘種三萬有餘種の多きにのぼるさうである。その中で、本邦の産としてはオニグモとトリノフンダマンを毒腺を有するものと認め、アヲオニグモや、ビヂョアヲオニグモのやうな總て青色の光りをもつものに劇毒を聯想させられるけれども信じがたいとてあるが、學説、所詮いまだ奇蹟を破壊するに足らないとする感情である。それよりも現實的に蜘蛛を食つた少女の皮膚は、茶色に黝すんだ^{グレイ}疣のやうなすさまじい感じを、まさまざと眼に強いることをいかんともしがたいのである。高い天井の燈を、一度スキッチを

押して滅消した後、ぱつと又白晝のやうに明るくしてから、一と風呂浴びて寝ることにしようとした。バスの部屋へ這入らうとして、スリッパの微かな音をたてると、寢臺の下から白壁へかけて、肢の莫迦長い平たい大蜘蛛が、しづかに、しかし迅速な精力をもつて動いたのがちらと認められた。私は斯の恐怖心を、まったく病的にかんがへざるを得なかつた。落成いくばくもない、ビルディング豪華版の名に耻ぢない、然も七階の434の部屋は、未だ人の子ひとり宿つたけいせきが、どの點から觀察してもみとめられなかつた。睡眠不足の錯覺にみちた一人の裸身の旅人は、バスの部屋の重いドアを排するが早いか、雪白のタップに熱湯と冷水とをちやんぼんして一時にほとばしらせた。夜更けたその音響が白晝のやうに明るいバス、ルームの内で蜘蛛の銀光をはなつ絲のやうに走りみだれ、體にも繁吹きかゝつた。タップに程良い加減の湯が漲ると、どつぷりと沈んで、四肢を思ひきりのばした。夜深い湯が滿ち溢れて、淡い蜥蜴色にかゞやくのを見た。温かい冰山(?)に惰眠するやうな懶い氣持になり、眼をつぶつてみたり開いたりした。扉の木材と硝子と化粧鏡をのぞく外は、すべて北極のやうな乳白な皮膚に南洋の椰子がみゆる濕氣をこめた心臓

をもつてゐた。鏡前の一輪挿に、なにか韓紅の造花らしいものがさしてあるのが、不思議にも寂寥にたへない感じを興へたが、一方の隅に、露骨に設置されてある便器を發見したとき、この餘りにあらはにして、本邦生活の慣習とかけ離れたものが、かるく心を掠め去つた。これは寂寥を打ち消すばかりか、或る一種の情感をそゝる感じに逢着させた。何故か？ これは謎でもなんでもない。よく解りきつた、凄じい現實的な問題である。かつて或る街頭で獅子吼してゐた老法師の云ふところによると、東洋人が次第に草根木皮の食を排して、肉食に傾いて行くといふことは、生理的にだん／＼動物性を加へてゆくことであるといふ。老法師にまつまでもなく、われ／＼も亦むげにこれを否定しない。故人芥川龍之介によれば、彼は母乳一滴も得ることが出来なかつた爲めに牛乳で發育をとげたと云ひ牛乳で成長したるが故に掻き抱いてゐた迷信が、この迷信に對する反證を、西洋史の中の羅馬建國者ロミユルの狼の乳で育つたことを發見することによつて破壊された、と然ういふ言葉の終るか終らない數頁の後に、彼は、はじめて牧場の白牛を見たとき、その白牛の瞳の中に何か人間に近いものを感じたと然う云つてゐる。詩人の、しかも鬼才を藏して縦

横の文辭を遣る彼の手藝は兎も角として、白牛の瞳に何か人間に近いものを感じたといふことを空想視されんとする世間を左様におそれなくとも、私は芥川のそれを信じた一人である。これあるが爲めにこそ、心頭を滅却すれば火も亦涼しが生きてくることになるのである。豈夫れ、羅馬の建國者ロミユルを要せんやである。私は、雪白のタツプを捨てた海老のやうな裸身をすつかりタオルで拭ひ去つた後、蓆を三分の一ばかり灰にしてから、夜の蜘蛛を妄想から遠ざけてベッドへもぐり込んだ。旅の疲勞が、次第々々に遠い海へながれてゆくやうに、リフトの響きに誘はれながら睡眠へと落ちていつた。

毒花に蜘蛛たはむる、春の夢

吊提灯

四日の夜、大阪支社同人が打ち寄つて、松本といふ小庵で座談會やら句會やらいとなむ豫定になつてゐるのだといふ。雨中を案内されて行つてみると、何時も變らぬ大阪の眞率

な集るは、雨中もめげず、馳せつけて早くもぐるりと一座をかたちづくつてゐた。會場の小庵は寒夜句三昧の道場として用ゐられた處だとの話である。巷間の、此の現代離れがしていても隠棲めきたる小庵！これは又蒼古な趣きをいつばいにした瀟洒たる棲家であつた。寄りつきの部屋の壁間には氣味のわるいやうな古面が、いくつも懸けられてあつたり或る一と間の壁は、淡い煤色をふくんだ朱泥のやうなもので塗りこめてあつたりした。廁をかりようとして軒をつたはつて行くと、簀の子垣にうすぼんやりと馬子提灯がぶら下げであつた。烈しく廂をうつ雨しぶきが、無慚に提灯をぬらしてゐた。案じて後からついて來てくれた鈴木君が、くらやみから顔をつき出して、

「おわかりか」

と、聲をかけてくれたのが、ぎよつとするほど、なぜか身に沁みて無氣味な感じだつた。屋内の電燈の餘光で、夜雨に打たれて見える庭木の青葉が、雨蛙の脊のやうにびかびかと濡れ光つてゐた。

席上作句。

星なくて春の夜空や我橋
月うすき東大寺みち春の夜

松本邸即事

春の夜の茶壺をつゝむ古金襴

淡路

神戸へもどつて、又山の手のK―旅館へ一泊の後、朝倉、曉雨兩君とともに淡路へ渡航する。墨石君は七日に州本大會へ參着する筈、鏡女、鴿峰女、寄生木の三君も、多分州本で一緒になるだらうといふ豫想であつた。好晴に恵まれた四月六日の五時である。航路は、ものしづかに青海波へ鷗を飛ばせてゐた。先年、飛行機で此の汐の眞空を飛び去つたことを思ひ出し、上甲板から大空をふり仰いだ。濃い瑠璃色がふかく澄みわたつて、風ぎ雲がとびくりに浮いてゐた。それでも追に海上のことである。朝倉君と或は曉雨君と雑談

を交はしてゐる甲板上の我等のオーバーコートは汐風に吹き煽られてばた／＼と音をたてた。辛うじて燐寸から火を移し得た頁を、纏て、海波の上へ投げ捨てると、吹鼓は行衛さだめず吹きとばされていつた。きつい餘寒がしだいに薙々と身にこたへ出した。三人とも船房へもどつて、又静かに雑談にふけつたりした。二時間半の時は、ゆめのまに過ぎ去つてしまつて、たゞ見るそこに横はつた港はめざしたる州本港である。船着きの地上に、玩具箱をひつくり返したやうに右往左往する老若男女の群れが展望された。その夥しい群衆に採まれながら、多数の自動車が蠢いてゐた。群衆と自動車とにつらなる町の家々、棧橋へ最も接近した汽船乗合所の建物。その家根越しに或は海へ臨んで大枝を青々と擡げてゐる巨大な黒松。さうした早頭風景の中から、道化たこゑをはりあげ、上陸者にむかつて頻りに何か云つてゐる男があつた。彼はメガフォンを口に當て、何か差圖らしいことを云ふのであるが、踵の皮のやうに硬ばつた聲帯は、彼が青年の頃、この港町の子女をなやましたらうところの美音がつぶれてしまつて、徒らに胴間聲がほとばしつた。想像がゆるされるならば、斯様に観光の群衆を現出することを忘れてゐた淡路國州本港の過去何年かの夜

景の中に、錢湯歸りの濡手拭をぶらさげながら、米山甚句かなんかを、得意な鼻聲で唄つた彼氏であつたかも知れがたいのである。

須磨の海濱からうち眺めた淡路島は、ほんの畠中の丘陵にひとしい影を海上に浮べてゐるのに過ぎない。四國と一葦帯水の鳴門海峡で境し、兩側に播磨灘と紀淡海峡をひかへて大阪灣深く長軀をよこたへてゐるこの島の突端が纔かに須磨方面の海濱から眺められるばかりなので、然うした感じを與へるのも當然なことだが、この長軀をもつ島國淡路のやゝ中央に位置する州本をめぐり航路をとつてみると、航行二時間半の景觀は、決して畠中の丘陵たる感じをいつまでも持續さすべきものではなかつた。渺乎として波打際からそゞり立つ陸續きの山々峰々、料峭たる春寒の薄靄に模糊として、さながら淡彩の繪屏風をうちひろげたありさまであつた。やゝもすれば薄曇りに變らうとする天候が、餘寒のはげしさを肌身におくりはするけれども、見渡す連山のところ／＼に彼岸櫻が二三分の紅を呈してゐた。ある山ふところの村落には、すでに満開かと思ふばかりに咲きみだれた櫻さへ打ち眺められた。

汽船を降りようとする夥しい船客のために舷がやゝ傾き加減になるのであるが、我等もその人混の中にもまれて、辛うじて棧橋を渡るを得た。さうして、船上からはやくもそれと見えてゐた淡路俳人の出迎へてくれてゐる一團に近接した。陸上の混雑の中に處々、己れの陣を守つて章魚賣がゐた。彼等は、地上へ蛸壺をならべておいて、生まのまの章魚を客の望み次第何匹でも蛸壺へ入れて賣らうとするのである。すでに歸路についてゐるらしい旅客の中には、この蛸壺をぶらさげてゐるものも見えた。

午 ち か き 嶋 の 小 港 春 が す む
章 魚 賣 の い と 機 嫌 な る 花 曇 り

別 春 莊

此處の大部分の俳人を洲本へ殘して、松柳、魚里等の諸君と我等の一行を乗せたタキシ
ーは、海岸沿ひの路を由良へむかつてひた走りに走つた。由良町へつゞく天川といふ海濱

の小部落へはいつたかと思ふと、タキシーがひたと止つた。砂礫が敷かれた海濱道路の側に、一と抱へ乃至二た抱へに及ぼうとするやうな巨きな黒松が曇天を摩して樹つてゐた。海岸から小高みにつゞいた地點に、あたりの伏家を威壓し、豪壯の風情を示してゐる一邸があつた。大阪の實業家政岡といふ人の閑居であるといふ事であつた。東道諸君の長老格である魚里君の云ふところによると、この政岡邸が今日の句會場にあてられてゐるのであつた。御所櫻の咲きほころびた門をくゞらうとすると、其處に、執事の爺が、紋付羽織に袴を被けた肅然たるすがたで頭を下げて出迎へゐた。邸、内部の構造が、純日本式の凝りに凝つた立派な落着きのあるものだつた。奥まつた一部屋へ案内されて、少時く休憩してゐると、彼の爺が出て来て、慇懃に挨拶したが、主人の政岡氏は、扁桃腺炎か何んかで發熱九度にも及んでゐるから遺憾ながら寝てゐるのだといふのである。さうした中で、此方は圖々しく句會をする！常識の擡頭する此方の不安が、一瞬はげしく心を掠めて通つた。しかし、急遽な轉換を避けて、徐々に時間をおくる間に怎ういふむきに此の場面を解決すべきかは自分の心に素直に決められていつた。

一休した後、要塞地帯になつてゐる成澤遊園地に案内され、磯邊に、さまざまの色をもつた寶玉のやうな小礫を拾ひとつてみたり、岩屋山といふ小高い丘へ登つて由良港の展望をほしいまゝにした。丘腹といはず、ふもとの林垵といはず、絶えず鳴門柑の鬱金色に熟せんとしつゝあるのを見た。

春風や柑園ふかく靴返す

山奥から伐り出して來た木材を運搬してゐる樵婦に出逢ふた。彼女等は十數尺の太やかな松材を二本乃至三本麻縄で堅く結んだ上、これを頭上へ乗せて、臀を振りくゞ歩いてゆくのである。中には老齡の者も見受けられた。海上に遠く働く彼女等の夫と、山林に樵る彼女等の素朴な生活を思ふて、原始的な感じをうけた。山の雲、海の響きが「古事記」の傳ふる著るしい古蹟であるだけふかく神代をさへ感ぜしめたことである。

島山や神代の霞いまもなほ

途中、待ち合せてゐてくれた栗林田華子君に出逢ふたのは欣びの一つであつた。別春莊に歸着したのは、夕暮近いころであつたと思ふ。邸内に私設小博物館があるから、それを

案内するといふので一見した。なるほど、東西の珍奇といふ珍奇なものが集められてあつた。ことに南洋方面の土人の趣味的手藝品には面白いものがあつた。政岡氏の道樂がこの蒐集癖であるといふはなしである。だが、私の最も興味をひいたものは、寧ろその私設博物館なるものへ通する渡廊にあつた。母屋へ接続した中華民國風な小建築——その扉にしても、卓子にしても扁額にしても然うした一切の裝飾づけられてゐるものが、支那乃至朝鮮それ／＼の土地から、そつくりその儘持ち搬んできたものを取りつけることによつて、構成されてゐるので、この建築といふのは純粹な創意的建築に値しないものを感じると、もに、私設博物館と同じやうに、より強く物質的感覚を強いられるものがないでもない。つまり物質的にみつもらるゝ感じが先きにたつことである。そこへゆくと、畫廊は、踏むに三和土であれ柱は棕櫚の剝肌であれ、その婉婉たる風格、兩軒に垂れたる小壁と、柱毎に左右の小壁を繋いで垂れたる同じ小壁とに、淡彩の南畫が綿々縷々と描き續けられてゐるのである。此の、寧ろ素朴といへば素朴なる畫廊を包んで、林泉いまだ充分の體をとゝのへないとする平庭の落葉樹と常磐樹が、疎なる配石をふくんで、いつそ清楚たる感甚だ

豊かなるものだと思われ。ことに、今、新緑の季節に入らうとして、萌芝の唐木瓜はすでに嫩葉ととも八分淡紅の花をひらき、青巖によつた椿は纔かに一二點雪白大輪の花をかざしてゐるのである。こゝろみに萌芝を踏んで其處の桔槔のかけられた井戸に近づいてみようとする、齒朶と青蘚とに埋れんとしてゐる。古色蒼然たる風趣は更なり、常磐樹がくれに、蒼古なる青銅の大梵鐘が、素朴な四阿風の小舎に吊られてあるのである。撞くべからざるこの動んだ大梵鐘はむしろ撞かずして四時翳々たる餘韻をつたふるものでなければならぬ。雪の夕に宜からうし、青葉の風雨に打たれるも面白からう。ことに、園樹の紅葉、花よりもくれなる秋において、蕭條たる夕影をあびたるほとり、蟋蟀のはしり聲、珠のやうにきこえはじめた情景の如きは、掬すべきものがあらうと思はれる。然るを、撞木をつり下げて、撞くに便したるときは、むしろ吾人のとらざるところである。築庭やうやく二十年にすぎぬといふはなしであるが、僅かに二十年の歲月にしてこの風趣を存せしめた努力をば充分察することが出来る。

青巖の朝日夕日に木瓜の花

夜に入つて、檜木造りの能舞臺を前にした觀覽席の大廣間で句會がひらかれた。華やかな裡にうち沈んだ夜氣が聾々と膚に寒さを感じしめた。經木に紅白の紙をおいて盛られた乾菓子が、銘々の前へ置かれた。これが又、いたく古雅な感じであつた。

能舞臺幕料峭と夜風たつ

魚里、松柳諸君を通じて我等に一泊することを懇篤に通じられたが、曩に知るを得た發熱九度の病者をひかへてゐる家庭にとどまらなくもなかつた。之れが私の素直なる結末であつた。厚情を深く謝して由良の俳人諸君に別れをつけ、タクシーの便をかりて、洲本の俳人諸君とともに、もと來た海濱道路を馳驅して洲本の旅館へ投じた。

松風

四月七日。

文字通り白沙青松の大濱公園に曉天の雲色が麗はしく透いて見えた。昨夜十二時にもな

らうかと思はれた頃、旅館へ乗りつけたので、欄干から展望をほしいままにすることもなく寝てしまったが、朝みると、此處の眺めは頗る宜かつた。海濱一帯は名だゝる海水浴場で、岩清水のやうな澄明な汐が、音もたてず風ぎ浪を寄せてゐた。併し、風ぎとは云ひながら、海をさへぎる數多の黒松の老樹は耳をそばだてると辛うじて聽かれる程の松風の幽音を絶えず奏でゝゐた。朝食をゆるりと攝つてから、朝倉、曉雨兩君と共に、宿をたち出で、恰度迎へに来てくれた洲本の俳人諸君と、すこし磯邊をぶらついた後、大阪から鏡女、鶴峰女、寄生木の諸君が来るのを埠頭で待った。

浪華女をのせて霞める天女丸

はる／＼と諸君を乗せてきた船は、盛りこぼれるばかりの観光客で、船が横着けになると共に、舷がいたく傾いた。鶴峰女、寄生木の兩君と、鏡女君とは、船内で互ひに探し合つたが遂に洲本の棧橋へ着くまで、見つからずじまひになつたといふ、さほどに混雑を呈してゐたのである。同勢合體したところで、洲本大會のはじまる時間まで町のあちこちをぶらついて歩いた。さうして皆で一緒に晝飯を食つたりした。何町といふか、三熊公園に

近い廣やかな片側町を歩いてゐると、或るしもた家らしい築土塀の上に、鳴門柑の樹がこゝにも大小數多の淡黄色の果をつけてゐるのを見た。この果は、もぎとらざる限り三年でも五年でも枝にぶらさがつてゐて、夏季に入ると綠色に變じ、他の時期には鬱金色をしてゐるさうである。綠色を呈した夏季にとつて食するのが最も甘味が豊かで良いのだといふことを同行の誰彼が説明してくれた。甲斐の如き、恁うした柑橘類に縁のない山國に生活する自分にとつて、鳴門柑は珍しい感じを與へる果實であつた。洲本なり、由良なり淡路の町を歩くあひだに、若布のからびたのと、乾鱈の串にさゝれたものばかりが多く眼にとまつた。中で、鳴門柑をまるごと、砂糖か何んかで煮て雪礫のやうに仕上げたのが二片の葉をとどめてゐるのは少しばかり興味を惹いた。海濱を歩いて、山はもちろんのこと、城趾、公園、町外れにさへ巨きな黒松が樹つてゐて、幽かに松風の音をおくつてゐたのは、この孤島の銘記するに足る風致であつた。

定刻午後一時、金天閣句會。神戸からわざわざ墨石君が参加したのは、其の勞を多とすべきものがあつた。封建時代の遺物である此の閣の障子を打ち開いて、三熊山の頂を仰ぐ

と、鬱蒼たる樹林を抽いて、玩具のやうに天主閣が聳えてゐた。近年、吏青嵐氏か誰かの主唱のもとに町民の建立するところだと云ふ。山つゞきの中腹に、其處此處、炭竈の煙りがたちのぼるのが見えてゐた。

餘花の峰うす雲城にかよひけり
鳴山の城の曇りに松の花

鳴門

洲本の宿りをたち出でた我等の一行は、鳴門の渦潮を見ることを目的としてゐた。朝倉曉雨、寄生木、鏡女、鶴峰女の諸君と自分とを一行としたのであるが、東道として、土地の桃季君が加はつてゐた。洲本驛からガソリン、カーの便をかりて、一路福良港へむかつた。此の二十三餘軒一時間の行程は、一路、淡路といふ島國のふところを貫いてゐて、思ひがけなく廣茫たるこの島内の展望をほしきまゝにすることが出来た。先山連峰が曇天に

聳えて遠くはしつてゐる麓の驛々を順々に送迎する淡路唯一のこの列車は、始終青々とした稻田の中を進んだ。ひろくと遙かに見渡せる稻田のなかに、櫻の咲き盛つてゐる古陵があつたりした。古事記以來、この島に散在するこゝかしこの古蹟は、往古を偲ばせるさまゞの趣きを持つてゐた。おのころ島神社、淡路陵。遠く先山のかなたに離れて伊弉諾神社のあることをも訊いた。薄曇りの空模様がはげしく餘寒を感じしめる裡に、懐古的な感情が、やゝ陶然とするに庶幾いものをもたらしした。

福良港からの便船は、三四十分間で、鳴門公園と名づけられた徳島縣管内の一小島の斷崖下へ到着し、蒼々とうねる汐に投錨してゐた。舢へ乗り移つて、島端の粗末な棧橋へ上らうとするのであるが、寄せ返す大濤に揺られに揺られる舢は、やゝもすれば棧橋近く寄つては流し返されるのであつた。互ひに扶けあつて、棧橋へとび移つてから、斷崖の九十九折を登つてゆく。土産物をならべてゐる二三の賣店が見うけられた。貝細工や、乾若布の間に交つて、小さな草籠に十數個盛られてゐる松露があつたりした。島の絶頂に登りつくと其處が展望臺になつてゐて、ベンチが設けられてあつたり、茶店が散在してゐた。か

へりみる海洋は、一望淡路島を遠く模糊たる雲煙の中につゝんで、手近の鳴門遊園地の突端から彼方、福良方面の群島を薄霞に据ゑてゐるのである。午後一時半頃から、はげしい潮流に變ずると云ふはなしなので、一と先づ茶亭に憩うて、晝餐を攝りながら、二階の欄干越しに海上を眺望してゐると、鳴門の海峡に、今まで蜘蛛の子を散らしたやうに無數に浮んで若布を採つてゐた小舟が、俄かに、海峡の向ふの突端がそより立つた岬の蔭へ逃れるさまが手にとる如く認められた。と、海峡の青潮がざわ／＼と白泡をもんで、長く水脈を引きはじめた。その、長く遠く幾條となく引かれた水脈は、見る／＼激しくなつて、さながら大河の激流を現じて來たのである。若布刈舟は、いち早く岬の蔭に一とかたまりにこぞつて、恰度蛸蚪の陣を見るやうに、安穩な容子が遠く打ち眺められた。干潮の急なるにつれて、鳴門が境ひする播磨灘の汐は、紀伊水道へ向つてすさまじい勢で流れはじめたものであることが背れた。汐にもまれる白泡は白鳥の大翼の如く／＼大きくなり、高濤が眺めわたすかぎり遙る／＼と際立つて見えてきた。その中に、渦！ 渦！ 渦！ 大渦と小渦が血をなげたやうに見えるのである。どうしたことが、親子ともおぼしき二人を

乗せた一艘の小さな若布刈舟が、その渦潮の外れを、激流に乗つて、所謂鳴門落しを決してゐるのである。小舟は辛うじて渦潮の皿をよけながら、激流に翻弄されてゐる。逃れ遅れたのか、何か必要に迫つての餘儀ない行爲か、展望臺上に、遠く瞰俯してゐた總ての人は、はら／＼した思ひで、片唾をのんでそれを見詰めた。中には、あつと云ふやうな聲を、思はずあげてゐる婦人なども見受けられた。舟は、激流に投じた木の葉のやうにもまれにもまれて、時々高濤の白翼にかくれては見えなくなることさへあつた。さうして流れに乗つて走ること流槩よりも早いのである。この若布刈舟が、辛うじて、鳴門を乗りきつて、こちらの山蔭に消え込んだと思ふと、其處へ又大きな觀潮船が福良の方角からあらはれてきて、渦汐に乗りかゝつた。この觀潮船はわれ／＼が乗つて來たものと同様の大汽船であつた。彼の女は白い船體を激しい荒濤と渦巻く潮流の中へと突き入つて、白鳥のやうに泳ぎまはつた。遠く播磨灘から押してくる大汐が、鳴門の亂列した暗礁に堰かれて、こゝに、遠く一列の懸瀑をかたちづくるほどの落差を生ずるのであるが、その瀑のほとりまで潮の激流を溯つていつた觀潮船は、たちまち流れに乗つて翻翻と揺られながら、

こちらの海岸へと近づいて来た。

展望臺に群集した多数の観潮客の中を、一人の老爺が歩るき廻りながら。

「鳴門を落ちる潮が、はるか下手のあの群らがつた島へぶつかるとハイ、それが流れ返つて渦を巻くことになるのでござります」といふやうな説明をするかと思ふと、

「此處の海で轉覆した舟人は、大昔から死體が揚つたゝめしがござせんや。こゝには無数の大きな鱒が居て、人が溺れるとおもふと直ぐ食つてしまふからでござります」と仰山に一人の旅客に話しかけてゐた。その間に又、赤銅色の皮膚を持つた一人の若者があらはれて、

「俺はこゝで二十年から船頭してゐるさ。落ちるやうなことならこの俺が一つしか無え命を亡くなさにやなるめえ、渦のまはりくるく〜と漕いで渡つてみせるだが、一人がたつた一圓でいゝ。渦なんてこんな速くから見ただでは面白くねえだ。さあどうだ一圓々々と、しきりに勧誘して廻つた。誰一人應ずるものはなかつた。その若者が側へ近寄ると、群らがつた観潮客はてんでにそれとなく逃げていつた。

空模様が次第に險惡になつて来て、海洋と云はず、公園つゞきの山地と云はず薄暗くなり、展望の範圍がせめらるゝことを感じた。展望臺をくだりながら、樹立を透かして瞰俯すると、斷崖下の蒼海に投錨してゐる観潮船が見えた。それは我々の歸着を待ちうけてゐるものであることが判つた。九十九折をくだりきつて、磯邊へついてみると、最前到着したときより、浪打際は遙かに遠ざかつてをり、今尙干潮のさまをまさしくと示してゐた。観潮客の男女が、こゝかしこの磯砂に群らがつて、ステッキや洋傘の先きで何かつ突いてゐる者もあるし、躑んで一心に錢蛸を探してゐる者もあつた。横はつてゐる大岩磐は色彩に富んだ海草と貝殻を附けて艶々と濡れてゐた。その濡れ岩に佇つことが人々に何となく清淨たる氣持を感じさせるかに見えた。塵界の一切を洗ひ去つた神代ながらの岩磐は、双びない原始的なものであるに相違なかつたからである。小雨が銀の絲をひいてほそく〜と降り出してきた。岸を洗ふ蒼々たる浪の上に幾つとなく細かな波紋をゑがくのが認められた。我々が順々に艇へ乗り移つてから、本船へ到着した頃には、漸く雨脚が滋くなつて、遙かの島々は雨霧につゝまれ、欄下にゆらめく汐に、灰白い笠を擴げた水母が颯つ

颯つと迅く流れていった。

夕汐に雨きて迅き水母かな
霞みだつ観潮の雨あらくし

福良港

観潮の歸航の雲に鴨引ける

六峰莊

神戸へ歸着して、この扇港の夜景が萬燈を鑲めたころS—ホテルに投じた。部屋のカーテンを引いて、茶にひと息ついたからだだが追にくたくに疲れてゐることを感じた。曉雨敏氏兩君と別れ、鴿峰女、鏡女兩君をおくつて、獨り、港街の騒音を遠くきながら深沈として、熟睡をむさぼるべきベッドに横はつた。

九日。それでも旅の夜は明け易く、窓外の樹々の青葉に朝日影がさすにはまだ多少の間

があらうと思はれる刻に目覺めてゐた。

明け易く大姿見に灯りぬ

鸚鵡籠吊るはした女に櫻欄咲けり

扇港銀座の漫歩をこゝろみてから、午近く、神戸支社諸君の第一樓に於ける招宴につらなつた。夕景、エナメル工場見學の後、六峰莊主人の案内をうけて、曉雨、敏氏君等とともに山莊を訪ふ。門外にタキシードをすて、爪先上りに登ると、花園を南にひかへて少しく等閑に附しかけた温室が設けられてあつた。何處で接しても温室といふものに若干の興味を惹かれる私は、こゝでも亦、硝子を透いて見える鉢もの、薄幽い影が眼にとまつた。仙人掌の類が、やゝぞんさいに置き並べてあつたり、屋根隅に枯れ瓢箪が二つ三つ結へられてあつた。主人の風雅な瓢箪の栽培が直ぐ心にとめられた。「獨乙人が置きはなしていつたものを其の儘うつちやつて置くのですから」と、主人は手入れに無關心である點を鳥渡言譯した。さういへば、この山莊の總てがその獨乙人の設計に成つて、建築されたものを、日獨戰爭の直後、偶然手に入れたものであるといふことが何處やら肯ける。主人みづ

から其の後これを詳細に語られたことであつた。見渡すかぎりの山腹をすべて庭園とし、豪壯な本邸なり、離房なり、乃至茶室なりが、おの／＼遠く離れて建てられてあつた。黒松が幾本となくすく／＼と伸び樹つてゐる。木立がくれに茶室がちんまりと静かな趣きを見せてゐるのであつたが、其處へ案内される途すがら、遠く麓の別邸を瞰下すると、邸の庭先からつゞいて青みどろを湛へた林沼が鶯鶯の杳をうかべてゐた。大きな青葉を繁く疊んだ熊笹のかけから、一羽の白鷺がとびたつて、緑葉の間を翔けるかとおもふと、遠く山つゞきの空へと消えていつた。山腹の小徑！ 綺麗に掃除されて一塵をとどめるとも思はれない此のやまみちに、たま／＼零れ落ちるものは松の古葉である。青苔を一面に冠つた巨大な巖のほとりに佇んで、幽寂な林沼の鶯鶯を瞰めてゐると、松落葉がや／＼しげく肩にふりかゝる。そんなときは晴嵐が梢を渡つて、遠く海潮音を聴くやうな、でなければ、いつそ古風に、そのかみの嵯峨龜山のあたりを偲ばせるやうな、風韻を耳につたへた。案内に先だつてゐたあるじの六峰君が、をりふし彈正小彌仲國まゐりたりける風情に、横笛こそぬき出しはせないけれども、青葉にかくれた茶室の片折戸をほと／＼と叩くと、これは

又、局にはんべる小女房ならぬ茶道の師匠としてやゝ老いたる松壽女史の影が、内にゆらめく氣配だつた。

「松壽先生？」と、あるじ。

「はう」

といらへて、ものごし肅然と我等をむかへた。曩の日、三河に松遷畫伯の招待をうけてその新築成つた茶室に饗應された砌りでも、天下の三大茶室の名ある出雲菅田庵の茶室に招ぜられた場合でも、その風趣こそ揃すれ、茶はもつて咽喉をうるほすに足り菓子はもつて胃、腑を満たすに足るとする野人、焉んぞまた之れと分つものあらんやである。萬一、禮容倣はざるものありとするならば、即ち俳句三昧の微光に溺浴する化身これ罪ありとする而已である。

一喫すあつ茶をおける根柢かな

莊園山徑

春蘭に山藪黄なる柴のさき

夜の色につままれんとする樹立に、仄かなる夕づつが閃めきはじめた。林徑をたどつて花圃の夜露をふみ、バルコンに桜欄竹の夜氣を感じながら、扇港の展望に眼をはなつと、歡樂に酔ふ童女の瞳のやうな無數の灯が渦巻いて胸つくばかりの華やきであつた。籐椅子に凭つた米國仕込みの老紳士筑水翁は、日本主義思想を論じ神代を説いて、しきりに俳句文藝を謳歌した。六峰莊のあるじは、果して巧緻を極めた瓢箪の製作を燈下にして醉餘の氣を吐いた。莊の家族ととも、墨石君の參着、五月雨會員の列席、晚春首夏のこの一夜が花のごとく明るく、春潮のごとく溶けあつて霏々たる和氣をかました。

送らるゝ暮春の驛の夜の雨

大 阪 驛

おのゝの情濃く春を惜しむ顔

歸 庵

夜にかけて卯の花曇る旅もどり

(昭・一〇・五)

羈旅詠草

旅だちの草もえそむる閨門かな

富士峽十島を過ぐ

嶽雲に十島の花ちりそむる

四月三日朝、墨石君の案内にて南北君とともサンルイス

丸へ遊びにゆく

鳶かもめ帆も吹きかすむ港かな

港山うすがすみして馬酔木咲く

淡路岩屋へ登る

由良の帆に柑園の風光りけり

由良別春莊

庭苔に巖がくれなる白つばき

福良港

かもめ飛ぶ觀潮の帆の遅日かな

麥秋小旅

戊辰陰曆多草月のはじめ、突として山廬の柴門をたたく打波、吳籠の二子。すでに夕風庭樹に風いで、晚涼やうやく扉にせまらんとする頃ほひである。富身電鐵を利用して、駿河路に一日の小遊をこゝろみることをすゝめてやまぬ。あはたゞしい鹿島立ち却て興を加へ、蒼篁うちつれて山をくだる。

道端 や 筍 微 雨 の 石 の 苔

吳籠庵に憩ふて、晚餐のあとをしばらく觀螢の漫歩に時をうつす。水郷の農家蠶飼の給桑を終へて、灯明るく、籬蔭に据風呂の煙りをあぐ。小流の岸草無數の螢火をやどし、風吹けば一時にみだれて青草に光り強く

虚空をとび交ふ瑩薄闇に嗅覺を掠めてさる。

冷えくくと端竹にやどるほたるかな

汀の庵の假寝、はやく草枕の情をそよりて、ひそやかなる談笑、深沈たる夜氣に更けゆく。

紙燭して夜涼をかこつ寝ざめかな

翌くれば寅の刻七つ時といふに、汀の庵を發つて顔も洗はず。裏門より、菜圃一つ隔つる東花輪驛より電車に乗る。十返舎が彌次喜多の旅、數ひとり増せども、真の煙りの中より洩れいづる珍談奇話、敢て彼等にゆづらず。昔に昭和とこそはなりにける爲體である。

古驛市川のほとりをすぐるに、霞外子が寶壽院の薨た

かく老棒の間に隠見す。

寺山や穂麥にたわみ竹實る

夏露や穂に出てはやき水田草

山村岩間

谷あひや夏霧こむる墓どころ

波高嶋——往時身延山へ參詣するもの河舟によりて下り、こゝに舟をすて、登山す。

富士川や夏がすみして波高嶋

竹秋や釣人かすむ大磧

十島驛。乗客稀れに、日漸く高峰かけて萬遍なく直射す

山驛の立夏のしるき圃かな

大宮の廣野にいで、願れば、尙淺雪をいたゞく富嶽の大形、その裾を延びるだけ延ばして甲駿相接するところに白雲むらがり立つ。かしここの村落遠く炊煙をあげ、廣茫千里、薰風よく漲る。瑠璃のごとき大氣を衝いて往くほどに、眺望ますくひろく大富士いやが上に高く、旅情いよ濃かなり。不二驛のほとりを過ぐるに、梨晶を送れば、甘藍圃をむかへ、甘藍圃ありとみれば、之れを繞つて遠く代田展く。耕牛は從順に農人の爲めに働き農人は孜々として鋤く。

驛前に穂家の麥干す薄暑かな

鈴川驛より海岸に出でんとして、砂丘寶仙寺山を過ぐ。老松犇々と樹ちならんで、松落葉しげく、松籟ひたと風いで、初蟬の聲幽かに、暑氣盛りとおぼしく旅衣にさす。樹間の苔むす古碑の邊りに落葉を掃く姥を見つけて、曳網の様子を訊くに、面々のやうな容貌をもつた姥は、箒の手をとどめて網主から賃金の事まで叮嚀に語る。けだし、最近、刀圭家連の目論見あるものゝ如く打波最も野心つよきは宜なりといふべきである。姥は樹間を送つてねんごろに道を教ゆ。

寶仙寺山の松林をぬけて、西瓜畑の間を行くに、起伏

せる砂丘遠く海に連り、海は淼茫として波穩かに、模

糊たる煙波の中うすくと漁舟の帆をあぐるを見る。

耘れる海女のやすらふ跣足かな

田子の浦

捨て權や暑氣たゞならぬ阜月空

波打際に、若者一人、海中へながく數十尋の細紐を抛けてこれを守る。章魚を釣るのである。紐の先きに附けた木片に、蛙二つ三つを固く結びつけ、章魚が餌を嚙むを細紐の引き加減に感じて、手應へあると知れば急につよく引くと木片に取附けてある大きな鉤は章魚のいづこの部分へでも突き刺さるので、その手應へを確かめて、急劇に手繰りよせるのである。若者が、俄かに肩へ細紐を掛けて、渚から砂丘の方角をさして駆け出したので、見てみると、章魚は途中で鉤を外づれたらしく、細紐はたるんで、若者は少し消氣かへつた。木片の蛙の肢はぐたぐたに章魚に嚙まれてあつた。

鈴川驛より汽車によつて興津へ去る。海岸の旗亭に晝餉をしたゝむるに、海風欄にみち風潮をとぶ白鷗、乾海老を搔きならす海女をかすめて、午天の日つよく欄下の橙に照る。三保の燈臺を欄とすれゝに遠く眺めて盞をかはすに、涼風に袂をひるがへす小婦の酌も騒がしからず。彌次喜多の興、箸の先に集つて、時刻すぎの藝當うたゞ急なり。

躑て、農林省經營の園藝試作場に少時く遊歩の時をすごす。温室のメロンはやくも土瓶
大にみのりて、仙人掌、龍舌蘭異常に伸び、枇杷の實ゆたかに熟するのを見た。

この地に閑居する吳籠子の姻戚たる一寡婦を訪ふ。佳
人柴門を鎖して、花盛りなる美女櫻の生籬ふかく琴を
弾く手をとどめて、よろこび迎ふる仲國ならぬ膝栗毛
の荒武者三人。たゞ／＼清閑無双の境をひたになつか
しむ。

草の戸に人こそしらね薰衣香

興津の海上に舟を浮べて遊ぶに、風つよく、波漸く高
まり、釣魚術なし。

舟泛けて大浪すゞし礁

蒲原濱

閑鷗の翔けもこそすれ麥むしろ

東花輪の里、汀の庵へたどり着いて、へと／＼に疲れた足腰をのばせば、すでに亥の刻
過ぎ。庵をめぐらす篋の笹の端にやどる露しげく、蛙聲雨の如く星闌干。

うるほへる歸庵の袖の螢かな

(四・三・五)

高原素描

96

小海線

甲斐巽寄りの地點にある山廬から、盆地水郷をへだて遠く西北の空に聳えてゐる八ヶ嶽に鬚鬚する白雲は朝夕のながめである。その八ヶ嶽の裾ほとりに小海線が新設された。中央線小淵澤驛から、信濃の小諸、小海間の既設線へ漸く聯結の成つたもので、人呼んでぜいたく線とも云ふ、高原無敵のすばらしい納涼列車風景を現じたともいへる。挿話を敢てすれば、初運轉の當日、小川平吉翁を試乗せしめたといふやうな、人生迎も滅びざる一片の人情味が轉け出されたりしたといふやうなことも其處にあるのである。

拂曉、山廬を出て俳友十名餘りと一緒にこの高原の軌道を駛る列車の窓に凭れながら、

山間特有な淡橙色の日影を、横顔から肩いつばいに浴びた。午前十時ごろの微風が、爽かに落葉松や山毛櫸の枝葉にたはむれてゐるし、ことに日の光りは、玉のやうに山毛櫸の葉にぶら下つたり、赤松の濃い緑葉を透して鬱金の矢をするどく亂射したりしてゐる様が見受けられた。たま／＼樹林の間へ展開されて見える青草の原つばは、日の光りが最も花車な手でかろ／＼と壓へてゐた。そのやはらかな感じは、此の小旅行の途にある一行の氣持ちをわく／＼させた。たとへば一人の紳士は、綺麗に櫛を入れた髪を少しでもみだすまいといふ風に、パナマ帽をそつと把つて網棚へのせたとおもふと、薫りのたかい紙巻を燻らしながら、隣席に囁き交はしてゐる淑女だちに多分の關心をふりむけ、瞳を耀かせた。やはり護謨毯のやうにはずんでゐる淑女だちの美しい瞳の光りが撥ね返つて、これをつゝむに言ひしらぬ芳烈な薫香の漂ひである。彼女だちは、他の一行の紳士だちが道樂にするロケーションのモデルとして同伴してゐるところから、舉措の總てが、車室そのものを舞臺風景としての明朗さを示してゐる鹽梅であつた。

軌道が素晴らしく弧をえがいてゐて、列車が大迂回するとき、旅客の九割餘は車窓の外

97

に展ぜられたところの列車後部の連鎖とそれが高原の雄大な自然を背景とする行進に、遊戯めいた面白さを感じて一齊に展望の眼をみはつた。然うでなしに、山風が執拗に吹き消さうとする燐寸の火を真にうつさうとする者、コンパクトによつて化粧くづれを整へようとする者、或は涼氣に煽られてからハンカチを何處やらへ飛ばしたと座席を探すといったやうな偶然な支障を全部の一割とするには餘りに多過ぎるであらう。赤松林の中を衝いてかぎりなく一直線に駛る場合は又駛る場合で、爽快な駛走のいとまない高原風光の送迎で旅客だちの胸はいつばいに張りきつた。

葛の花

産れるから山野に親しみ得なかつたといふやうな、云はゞ都會詩人の想像で葛の花を心にゑがいたなら、或は實際の花の模様と甚しい懸隔が生じようといつた其麼特異の花を持つのは葛である。葛はいふまでもなく多年生纏繞藤本である。莖の長いものになると二丈

から三丈餘りに及ぶものがある。花は、葉腋に五六寸の穂をなしてつゞられる紫紅色の蛾形花である。この點が想像に遠からうとするところである。先年叡山へ登つたとき、ケール・カアの窓から瞰俯すると山腹におびたくしい葛叢をみたことであるが、その後また神戸の六甲を跋躓したときもこの山に澤山の葛を見た。ことにゴルフ、リンク外の徑沿ひに、黒松を蔽ふたりしてゐた葛はまだ遅花をつゞつてゐたと記憶する。もちろん甲斐山國は、至るところに葛を見ることが出来るが、殊に郡内と北巨摩の高原地となると、その花房の大いさなり、潤葉の青々としたあんばいなり、他に優れた立派なものが隨處に見られる。芭蕉が更科紀行のときは時期が違つてゐたにしても、郡内の旅では暫々出逢ふたことであらう、甲斐山中として

山賤のおとがひとづるむぐらかな　　芭蕉

の作が「續虚栗」にのこされてある。この八重むぐらが恐らく葛を除外するわけにはゆかぬであらう。あながちこの作のみが做す業ではないけれども、兎角旅人芭蕉の創作的香味に葛を感じがちである。

古戦場と記されてある史蹟の野徑をさしはさんで、とある赤松の枝から今を盛りの葛の花が垂れてゐた。昇る日に照らされて、いましがたまできら／＼とおいてゐた露はかき消えたあとに、源氏など聯想するやうな古典的な感じをもつその紫紅色の花房が、まことに鮮かにしかながら素朴にして又謙虚なおも／＼ちをた／＼へてゐた。

無源莊

老樹が深く枝を交した森林のとある窪地から、多量の地下水が湧出してゐる。さうした納涼の好適地を背景として、甲府商業學校の寮が設けられてあるが、それに掲げられた扁額を見ると無源莊としてある。この噴泉に因んだことでもあらうか。既に、暑中休暇中籠つた學生は片影もとどめない。静閑な寮内は、大きな懸時計の振子の音ばかりを残してゐる。前庭には、門際まで一杯のコスモスが咲き溢れてゐて、榛や胡桃の樹立には秋蟬が鳴いてゐた。廣々した部屋につゞいて、これは又法外にひろくしつらへた内縁へ寢椅子を据

ゑて、寂然として眼をつぶつてゐると、初秋の日影は漲つてゐながら、さすがに高原の爽味の氣が犇々と襲つてくる。ひそかに睡魔がうかどう眼をばつちりとひらいてみると、文字通り天空一碧の清澄さである。日光の中に瑠璃の玉が續き流れ、くるめいてゐる。正面の胡桃の樹から向う下りに甲斐盆地の模糊たる水郷といひ、市街地といひ、一望の下に茅ヶ嶽の莫迦長い裾を曳く一線にはりついて見渡される。恰も、東方の山腹に位置する山盧と十餘里をへだて、相對してゐるわけである。今、この寮に催された句會は、三昧の眞只中にあるあんばいである。胡桃の樹の下堰のほとりへ、下手から一人の老爺があらはれ、利鎌を翳して雑草を刈りはじめた。カメラを携へた少年がこつそり裏庭へはいつて来て、秋草の咲き亂れてゐる邊りをうろ／＼した。すさまじく新鮮な匂ひのする山風が、ひとしきり又虚空をながれて通つた。

古戦場の秋

玉蜀黍の醜花が咲く山地をながめ、小徑を辿つて行くと、高原の史蹟として名をとめてゐる古戰場へ出た。古戰場と云へば、すぐに浮びあがるのは、之れも芭蕉の

無慚やなかぶとの下のきりくす 芭蕉

又

夏草やつはものどもが夢のあと 芭蕉

である。眼をつぶると、日本古來の槍弓劔刀に雄叫びをあげて鏑を削つた戦場の華やかな光景が浮んでくる。緋緘、黒革、小櫻、卯花、澤潟、櫻鳥、藤緘、敷目緘それもおもひくゝの好みに出征する將帥の馬上に手綱をひきしぼつた雄姿と、従者の陣笠に身をすくめて、あるじの大薙刀をひつかついだ道化姿が想像される。引つ組んでもみにもんだ末に豪敵のために首をかき落されて、大身の槍のきら／＼した穂先に突きさゝれた生首は、形相すさまじく大たぶさを振りみだして、どろ／＼した黒血を槍の柄に滴らせたであらう。時移つて、或は小雨の降る夜半に、めらく／＼と青火が虚空に燃え上り、あまたの將卒の亡靈はあたりに揺らめいたことであらう。今はたゞ、想像の錦繪に最もくすんだ色彩を

刷いたのみで、皇紀二千五百九十三年八月の午後の太陽が、比較的涼しいとは云ひながらまだ／＼青草に可成り強い光りをなげて、むつ／＼と草いきれを感じしめようといふ古戰場でしかなかつた。天文年間、信濃の村上義清麾下の軍兵二千騎餘り、この地を侵略して來たのを機山公まだ若冠のころほひ手勢をもつて迎へ撃ち、たうとうみなごろしにしてしまつて、一々彼等の耳を斬りとつてから之れを土中に埋め耳塚となづけた。名將も追に齡の若さで悪戯をこゝろみたものであつた。

薄は最うむら穂を光らせて風にゆらいである。足もとにはしきりに蟲が鳴いてゐる。蟲のなく青草を踏んで少し奥深く這入つてゆくと、そこに草叢を少しぬけ出し臥牛の相をした大巖が横はつてゐて、傍に「物見石」と書いた標柱が建てられてある。そのかみ甲州方の物見が村上勢の陣容を遠望したあとを残してゐるのである。日光の直射に逢つてほとほと暑くなつてゐる巖の肌へ手をかけて、獨り私は靴のまゝやつと言ひながら攀ち上つて見た。茫々數百年、その頃の山嶽雲影さながらに、遠く古戰場を圍繞してゐる。陣鉦の響きも法螺貝の音も聞えるではなくて、金鈴をふるやうな蟲の聲が幽かに斷續して草葉のかけから

きこえてくる。日は照りながら、どうやら俄かに降り模様空合ひで、女郎花や藤袴の咲きみだれたゆく手の甲斐小泉驛邊りの雑木林には、淡橙色の日影をかすめて狐雨が降つてゐるあんばいである。すこし一行に落伍して、獨り秋影を曳きながら人々のあとを追ふて草原をたどつた。

(昭・八・一〇)

西國驕旅

出 廬

秋とはいへど暫く烈日のつゞくに道のちりいさゝかは厭はしい。芒の葉は青々とのびてはらりと穂をひろげた中に、絮を清澄な虚空へはなつて、機嫌といへば機嫌だとも云へる風情である。バスへ合圖する靴のうらに、鄙路の石ぐるまを感じながら、山郷を發つたのが十月十七日の午後であつた。甲府一泊、十八日の拂曉、子呆とゝもに甲府驛より富身電車に身を托さんとする。子呆母堂、酒蝶、虎山、彌紅、雪彌、つね女等の見送りをこゝろに謝して、狭霧に甲斐連峰の仄かなるをいとほしみながら。

はつ紅葉ありあけ顔にながめけり

有明の秋色 あさし愛宕山

不盡溪流の響きを、やうやく車窓にきく頃より、狹霧まつたく晴れわたつて、雲間七分のすがたをあらはにした大富嶽、はらりと秋雪を粧ふを仰ぐ。群青なる山相、巖を紺目にたゞんで、ゆるやかに裳裾をながした白雲のむらがり、みる／＼吹きちぎるがごとくに、碧落へ溶けて消えるのもある。大宮の梨園、眼のとどくかぎり打ちつゞくを硝子越しに認むるとき、過ぎ來し一方の天にはや大富嶽は赤裸々なすがたであつた。耕作の班牛が野徑に童子の細鞭をくらつてゐる。

富士驛の登に、秋日和の靴の音が、かるい響きをたてた。

雲もなく道者も止めず秋の富士

天照らす日の表なる秋の富士

富士驛を發つてトランクを机代りに、「東柯句集」の序を書き果たさうと鉛筆を執れども紙一二枚つゞつてすゝまず。二三夜の寝不足が漸くあらはれ、眠るともなく、さむるともなく、うつら／＼と濱松を過ぎ豊橋を過ぎる。兎角する中に名古屋驛に着いて、蘇南、不

釣、雨園の諸君と逢ふ。夢さめたる心地で、喫茶舗の香りたかい紅茶に唇をうるほし、室花を盛る雪白の卓布に眞の灰をちらす。

去る年、この卓上に薬壺を置き忘れてたち去つたこと

など思ひ出で

秋深き白晝の灯におもふこと

大阪驛へ着く。灯影初更を過ぎ、出迎へて呉れた支社同人の數多の貌をまさ／＼と照らし出す。すでに、たび重なる見知り越しの笑顔と歡談の爆發。中に、南北君突如として現はれたるは、東京にて其の約あつたとはいへ、恐悦至極である。旅客の人波に揺られながら構内を出る。

大阪の灯の巷

灯海の濃くなるばかり天の川

奏鳳庵

盛花やとても難波の秋の庵

難波なる奏風庵をたちいでんとするに、あるじのひとり兒、惜別を語るには餘りに幼く夫人に抱かれてゑまひをおくる。こゝに人温掬すべきものありである。

旅ゆきてふところほとる懐爐かな

神戸の夜會をさしてゆく人々、南北、紅夢、如星、奏風、大文字、しげみ、鶴谷、青風、子呆等の諸君。去る年、同じこの三菱俱樂部樓上にて句會をいとなんだ時と思ひ較べて、四邊のすがくしく、燈光の澄明なる感あるのは、祝融の災後、再建した新鮮さから受ける感じに外ならなかつた。會て之れを見なかつた青疊、それに晝光燭のやはらかな光りが漲つたのが、作句に浸る氣持を快くした。菊、秋蝶、茸等數句を作つて、後、俳話をころみる。十一時半、會終つて、南北、子呆兩君ととも、庵主の案内にて月明の街路を墨石庵へたどる。

仰ぎ見る月ゆく紺にうろこ雲

二十日。墨石庵を發つて六甲縦走の企てに従ふ。山頂縦走の雄々しさは名ばかりといふべきか、麓の登山口驛から、バスに揺られて少時九十九折を登ると、中途に設けられたロープ、ウエーの小驛。近代文明が拵へた大供を乗せる搖籃は、見る／＼天險の虚空をのぼつて、仄かなる秋霞に、楓や山櫻が初紅葉するを麗はしいと瞰下するいとまもあらせず頂上の小驛にひたと着いた。南北君はすでに阪急で袂を別つて、白映君が加はり、墨石、雲濤、草史、曉雨、子呆等の諸君と、縦走なる名に於て、山頂道路のひろやかなる緒土を踏んで秋風に吹かれながら行くのである。白馬や白根の連峰に比すべくもないとは云へ、道に穹窿薄明のむら雲をすかして、森茫たる碧海が眼前に展開せられたありやうは一段と調子をおとしたものゝすさびの優な壯麗さが感じられる。白雲をきつて飛翔する秋燕の影はとゞめないが、穂すゝきは打ちみだれて巖を颯る。風雨にさらされた斷崖絶壁に辛うじて轉落をまぬがれてゐる奇巖が、人を招いて、天籟を感じてゐるところ一塵をとゞめない清淨さである。いつかポケットへしたゝか板チョコを詰め込んでおいた老紳士雲濤君が、

これをねぶるのも些の可笑しき感じなければ、草史、子呆等の小壯者等が嬉々たる興素より不自然さのあるべき筈がない。紗を透すやうな秋日影が淡々しく足もとを流れてゐる。龍膽が醜草の隙に、鮮かな濃紫の色をのぞかせてゐる。えて、瀟洒たる嗜好にこゝろを傾ける墨石君がこの一花を摘んで胸元に留めたのもことばりて、寧ろゆかしさの一つでなければならなかつた。

秋 燕の屎のしるくと巖の上

ゴルフ場の邊りには龍膽の花が咲きつゞいてゐた。葛の葉は、初嵐にもまれて、絡みかかつた老木の古枝が折れた儘、よるべない風情であつた。とある小亭に備へられた振舞ひの澁茶に喉をうるほしてからは、一路下り坂となつて、紅楓緑松の間を、ひたすら有馬へと急いだ。

菌干して家毎の留守や有馬道

秋高く髪ふりみだす柳かな

寶塚花壇漫步

たそがるる園生の秋花まくれなる

寧樂の秋雨

心齋橋筋の小倉屋ビルに句會を終へてから、庵主の誘ふがまゝに再び奏鳳庵にひき返す。翌くれば二十一日、早曉のむら雨、窓の玻璃越しに仄かなる光りを曳いてゐる。

會遊の寧樂をめざして案内さる。一行如星、奏鳳、青風、草人星、鶉谷、しげみ、紅夢鏡女、鴿峰女、子呆等の諸君。寧樂公園道の砂礫をうるほす微雨の中に、鏡女さん例の鹿に遣る煎餅をしたゝかに買ふて頒つを見るよりはやく寄り來る鹿、二つ三つこれを與へて身にくねらせのがれんとする姿は艶たり。鴉梢に啼いて、陽たま〜〜耀ふ。

秋 微雨 日輪の朱の燻りけり

去る年もこゝに句遊をしいた江戸三亭にくつろぐ。籬の蔦、なかばはくれなるに、淺茅の巖冷かである。此の宿、さゝやかな小亭を二つ三つをちこちに散在せしめて、甲亭から

乙亭へ婢が霧雨の中を。火鉢を運んだりする風情、甚だ感興をひく。芝生からむくりと起きあがつた老鹿が執念くその婢についてくるのが見受けられた。

秋雨や浅茅の路の十文字
老鹿のまとへるもある園のちり

瀬戸内海の空

一夜とつくりと休養をとるために、支社同人の好意から岸本旅館の静かな部屋に案内をうけて安眠をむさぼる。眠りさめて静かに眼をやる雪白の窓掛の隙から、霧のやうな小雨が降つてゐるのが硝子越しに見られた。時化でない限り、航空機で渡るべき瀬戸内海の大空が想像された。街路の轆轤の響きがたはつてくる藁に、爽々しい朝の色が流れてゐる。例の如く夜具の中へとつぶりとうづめられた子呆の頭は、微動だもせない。早くも婢によつて運ばれてあつた鐵瓶の湯気が仄白く和やかな空気を醸してゐた。午前十時をやゝ

過ぎたと思ふ頃、放送局の自動車がかしむけられて来たことを告げられ、曩に來合せてゐた奏鳳君等と旅宿を出て放送局へはこばれる。

十時半、婦人講座放送——生活と俳句道。

旅客航空券		
飯田武治殿		
航空機型式	一四式水上機	
登録記號	J-BBBL	
一等操縦士	海野昌男	
大阪——松山間		
大阪	高松	松山

放送後、同じ自動車によつて送られ、レストランで寒々、如星・紅夢・奏鳳夫妻、其の他と乾盃を交はして後、日本航空研究所の事務所へ行く。こゝにて旅客航空券を受けとる。雨はまったく歇み、空は薄曇りであるが風を感じないのは甚だ祝福に値する。鏡女、鴿峰女等の諸君も來り合はす。木津川飛行場

へ向ふ。廣茫たる海濱の草原の中に大格納庫が棟を並べてゐるあんばい。いともほがらかな感じである。自動車をすてた處で、この格納庫まで——殊に小さな感じのするオートバイで、地上を走るが如く迂迴して、休憩所を兼ねた事務所まで駛驅するのは旅客の氣持を昂

らせて甚だ面白い。漸く秋日和に返らうとする薄色の日影が、枯れた藜や、みだれた芒に流れてゐる。事務所の横合に焦げかゝつてゐるダリヤを眺めて佇つてゐると、半遊君が背廣の上に仕事着を被けて、にこ／＼しながらやつて来た。格納庫の先きから男女打交つた群がぞろ／＼近づいて来るのは大阪雲母同人の一團であることが判る。運轉を試す一臺の飛行機が格納庫の前で、俄かに大きな音響を爆發させはじめた。その飛行機の前方にあつて草叢が風を喰ふために數十間の遠きに耳り伏し靡いて見える。私たちの乗るのは其れではなく、別に岸近く水上に浮んでゐる飛行機であつた。恰度午後一時半の出發時刻が来たので、いざなはれるまゝに、岸近く横たはつた船板から、飛行機へ掛けられた鐵梯子を上つて、乗客席に着くと、はやくもプロペラの音響は虚空を切つて、いよ／＼大きく唸り出した。一方の硝子窓から、ずらりと入り亂れて並んでゐる大阪同人諸君の見送つてくれる姿を眺めると、プロペラのすさまじい大音響で、言葉の一つもきこえはしないけれども、張り緊つた顔貌が手も足も留守にして、心一杯にこちらを凝視してゐてくれる。子呆君をしつかりと落着かせてから、私は窓を少し開いて並み居る諸君を見た。或は萬歳を

叫んでくれたかもしれない。いや、諸君の動作は、まさにそれと見受けられるのであるが其の面もち、其の眼なさしたるや、普通世間に見うけられる處の萬歳聲裡に浮きあがる面もちと全く異つたものである。我生れて四十有餘年、かくの如く、動作と、表情との、ちぐはぐな場面にはじめて出喰はしてみた。私は、窓からつと右手を突き出した。さうして情誼かぎりない諸君へ向けて、滿腔の敬愛の念をおくるために打ち振るの外はなかつた。私の一本の腕、それが蒼々した海原と天空との間に打ち震ひながら、疾風のごとくはしつて海上に大飛沫が上つたと見ると、いつしか見送りの諸君が掻き消え、陸は遙か下に遠く見渡された。たゞ森茫たる海波が一面に下界にひろがつて來てゐるのである。幾多の船舶がちりあくたの如く蒼海にちらばつてゐる。

「なか／＼高く來たね」と、子呆君の顔を氣遣ひながら見て、

「愉快だらう」と云つたが、又、

「大丈夫かね」

と附け加へた。子呆君は、少し蒼みが／＼つた貌を窓へ向けて下界を瞰下してゐたが、私の

耳近く爆裂させる聲に應じ、

「大丈夫です。面白いですね」と元氣を見せた。私は、曩の日富士川の波上を走つてゐた飛行艇に三四回乗つた経験を持つてゐるので、この凄じい速力の航空機とは速度に於ては比すべくもないが、プロペラの音響には毫も變りないことを知つて、その場合をまさしくと心に避らせたりした。聽て淡路島を弓手の前方に見ながら、神戸の上空をさして飛んだ。天空から瞰下する素晴らしい佳景に心を牽れて、神戸の俳人諸君が仰望してゐられることなど想像しながら、不圖子呆君に注意の眼をむけると「面白いですね」と應へた五六分前の元氣が掻き消された塩梅である。それでも強いて元氣を示さうとする面もちなので、戯談交りに身邊りの紙片をとつて「まゐつたか」と鉛筆の走り書きをして見せると、私の手からとつた鉛筆で其の紙片に「いかにも」と返書した。愕然とした私は、最早筆談で戯談をとばす隙も何もなく狼狽しポケットに携へて來た寶丹をとり出してやりながら、天空を翔けてゐる觀念から全くかけ離れて、極端に狭い二人のみの世界に落ちこんで行つた。淡路島を弓手にして播磨灘の上空を翔けりに翔けるのであるが、高松に一度着

水するまでに、尙一時間を要する。介抱する片方の手で幾度か取り出して見る時計の針の動きは、世にも遅々たるものを感じられた。鳴門海峡を見渡し得ると思ふ上空で、四五回たてつゞけに機翼が煽られた。突風の襲ふたびに、つと機が引きおとされて、窓から斜かひに見える銀翼が躍つた。寒霞溪や屋島の絶景と絶縁して、二人の世界はいよいよ極限された。やゝ機體が傾斜するかと感じたとき、窓外に眼をはなつと、直下に高松の市街が完全な平面的に展開されてゐた。吸ひつけられるやうに海波の上へ機體が浮んだと思ふと、忽として其處へ現はれて來た輕舸が、がちりと機側へ鐵鎖を掛けた。介添して子呆君を機上から輕舸へ移す間も、プロペラの旋廻は歇まなかつた。機上をくだる子呆君の衣服といはず頭髮といはず、宛然颯風に襲はれたやうに吹きたてられた。離別の大音聲を送りつける私の片耳が烈風にうち貫かれて、少時く蟬鳴をかもしてゐる。それでも蒲柳の質たる子呆君を、やつと安然地帯に卸し得た安堵でほつと一息ついたかたちである。たゞ頑健な身一つ、航空機は又もかるくくと素晴らしい上空へひき上げてくれた。私は携帯したトランクの中に脱脂綿があつたことを思ひ出して、少しばかりひきちぎつて耳の穴へ固くつ

めた。耳底の蟬鳴が漸くしづまると、兩側の窓を打ち開いて、縦横に風を通した。さうして、はじめて句帖をポケットからとり出す氣持に轉じた。

秋燕もゆき我も行く天路かな

空ゆけば山々秋の唐錦

秋風や天馬がのせし身の一つ

たま／＼海岸沿ひに飛ぶとき、俯瞰すると小學校の庭に運動會が行はれてゐるのが見える。圓形をつくつた白衣の兒童の間に紅色の旗が鮮かに入り亂れてある。土曜日であつたことを思ひ出す。しばらく往くうちに又運動會が眺められる。燈灘の上空を翔るに及んで渺々たる海原の兩岸、鞆の方と、新居濱の方とが迥かに模糊として見渡される頃、これまでになく高く上つてゐることを感じた。さうして、これまで地上から想像し、おそらく高く上れば上るだけ危く心細く感ずることだらうと思つたことが全然正反對で、低空を飛ぶ氣味悪さに反して、心の澄みまさる安泰な感じを抱き得ることを知つた。伊豫越智郡一角の端を横ぎると、それからは殆んど海岸沿ひに翔けた。今治から松山へ通ずる軌道が仔細

に瞰れば帯の如く長く走つてゐる。とある丘陵の上空を通るとき、山畑に耕してゐる四五人の男女が瞰められたりした。

薄雲に秋耕見ゆる空の旅

眼界のうちに遠く松山の市街地が展望されたとき時計は午後四時半を示してゐた。此の航空全時間二時間半と告示されてゐるのに恰度三時間を費してゐることが判る。やゝ惡氣流であつたことを如實に物語つた。見る／＼三津ヶ濱が直下に現はれて、海濱に佇つ伊豫通草會の諸君の出迎へてくれる姿がそれと認められた。我が航空機は大きく旋廻して砂岸近く大飛沫をあげた。私は機上にたちあがるや否や、耳の穴から、囊につめておいた脱脂綿をとつて、波の上へかろく抛つた。

雲の旅終へし秋日の磯づたひ

茶仙庵

はじめてこの地を踏んだ四國の旅は、ものめづらしい事柄を多少眼前に浮ばせるだらうと期待してゐたことだつたが、遂ひにさほどのこともなかつた。文化の足どり、いち先きに狭い海を渡つてゐて、到る處に華々しい人間生活の光景を展じてゐたに過ぎなかつた。愛媛縣廳の丸い屋根、若干の煙筒、銅像、脂粉を化粧ふて道行く者、多少洗練された言葉、さうしたものが一と通り腦裡に刻されたことは慥かである。それと温情をもつて飄々乎たる旅人をむかへてくれたことは中々に忘れ得ぬところであつた。

松山大會の前夜、後夜、庵主及び伊豫同人諸君の導くがまゝに、旅の塵を拂ふて、やすらかな眠りをむさぼつた茶仙庵は、この伊豫行中異色あるものとするに憚らない。海濱のとある料亭に、通草會を中心とする多數の伊豫俳人諸君と會見を終へてから、茶仙君外數氏の案内で、湊町の、やゝ時代色を漂はした低い土塀の門をくゞつた。園内の飛石を踏む足元があぶなく薄暗かつた。けれども、園の植込みを透して、向ひの茶室には電燈があかしくと灯つてゐた。植込みの疎らな常盤樹の闊葉を照らしその餘光が眩ゆく眼にちらつた。外椽から、數奇をこらした部屋へ上ると、狭くして甚だ明るい燈下に居据つた心が、

晏如として、ふるさとにあるの思ひであつた。床の茶掛けを受けて、花筒には粒の大きな山歸來がなげ挿しに活けてあつた。貞淑な茶仙夫人のものごし、十二三才にして光城と號する童子、これは茶仙君の二男坊で、長男の大鏡君が遠く東京に遊學して畫壇に志す留守をうけて、父母の温い愛に、すんなりと育ちながら俳句を詠みこなさうといふのである。學校の制服を着てゐて、燈下にきちんと手を正しながら、言葉は發せないが、童子には少しませた慇懃なお辭儀をした。私の眼へ向けた光城君の眼は、まことに澄んでゐた。頭髮は、たま／＼櫛を入れるであらうほどに綺麗に、頂きながに伸ばして、耳のほりから襟足をすが／＼しく刈り込んだ摺梅は、當人の嗜好と云ふよりは寧ろ、父母のたしなみから發してゐるものではあるまいかと打ち眺められたが、それが又、童子光城君にふさはしく身についたものであつた。「少年光城」と署名して寄せて來た句稿から、一度選抜して雜詠へ加へたことを、仄かに記憶から呼びおこすことが出來た。しかし、私は遂ひに光城君と一回の談話さへ交へる機會をつくらなかつた。光城君は、たま／＼不思議な貌をして私をながめることもあつた。茶仙庵に於ける、光城君の存在は、世間一般に見かける處の所謂

あまやかし兒と、少しく其處に類を異にするものがあり、光城君自身も亦、あまやかし兒たるに甘んじない、ませた冷やかなところが稀薄ながら仄見ゆる點を面白く感じた。句會へは必ず父親の茶仙君をせがんで同行するさうである。私をとり巻いての句會の席にも、光城君は、小さな、青年めいた頭を静かにたもつて、ちよこなんと坐つてゐるのを見かけた。句が、誰れにも採り上げられなくとも、別に落膽するおもゝちを示す容子もなかつた。小耳をかたむけて披講を傾聴してゐる風情が、まことにいぢらしいものであつた。拂曉、戸を排して、外縁に苜を吸ひながら、中庭の苔蒸した古井戸に感興をおぼえて眺めてゐると、はやくも起きいでゝゐた光城君は、やはり制服をつけた足に駒下駄を穿いて、ポケットに双手を突ツ込んだ儘、用ありげでもなく、飛石を踏んで門外へ行かうとすると、ころであつた。鶏が、どこかで、長く搖曳する関をつくつてゐるのが聞えて來た。島國の古驛、郡中宿のこれから活動にはいらうとする騒音が、藁を越えて、この茶仙君の控家が持つ閑靜を襲ふこと次第に急である。植込みを間にして、門近く、これは又純然たる茶室が、低い土塀にはりついてゐるが、昨夜、茶仙君は、そこへ寝たらしく、布團を運んだり

する姿をちらと見かけたりしたことであつた。が、早くも清淨と掃除されて、火桶、煎茶の用意も整つてゐるところへ案内されるまゝに、いつてみると、此處は昭和聖代を後ろ向きにして、昨日のこと元祿の蕉翁が宿かりたらんとさへ眺め得る小庵の靜閑。庵主の數奇ごゝろが、一杯に漂つてゐる。窓を蔽ふ木犀に、花は枯れつくしてゐたが、さやかな秋風が流れて、蔓ものゝ葉がぼろりと落ちたりした。

こゝへは婢を呼ぶでもなく、茶仙夫人が手料理のみごとを盡して自ら立ちはたらく間に庵主は又、青苔の蒸した風流な古井戸のほとりに躡んでから、何事か一心に懸つてゐる。ながめると、庵主が一匹の巨大な鰻を掴んで俎板に構へてゐるのであつた。

庵ぬしや はつ 秋風 に 玉櫛

道後の場

二十三日の松山俳句大會を終へて、翌日、海上に漁舟を泛べようか、それとも道後温泉

に浴さうかと、通草會諸君の間には意見相半ばしてゐたが、私の興味は、多少の道中疲れもあつたし温泉に浸つてのんびりと一日を過ごさうといふことにかゝつてゐた。漁舟の準備も、やゝ整つてゐたやうであつたが、朝になつてみると、漁翁のはなしに、風波が高過ぎて不可いといふのを幸ひ、道後行を決して出かけた。小人数で、活東、茶仙、喜月、石峰、併月、一風、花丘、子呆等の諸君であつた。道後ゆきの電車で、松山の市街を出ぬけたかとおもふと、最う道後の温泉地が眼前に展開してゐた。

どこの温泉地にも見かけるやうに、旅館が櫛比してゐた。三階四階といふやうな、手摺が高く見上げられる旅館もあつた。手摺に手拭や坐布団が干してあつたり、女中が姉様冠りをして拭掃除をしながら、街を見下してゐるのも見うけられた。街の中央とおぼしい處に一層大きな建物があらはれて見えたが、之れぞ道後温泉であつた。この大建物の中に、種々な名のついた浴槽が設けてあつて、旅館に止宿する湯治客は、みな此處へ通つて來るのである。であるから旅館には内湯といふものは設けてはない、といふことを誰かゞ説明してくれた。なるほど、見てゐると、あちらこちらの旅館から、手拭をぶら提げた浴客が

此處へやつて來た。

温泉の建物は、出入口が表裏にあつて、最初、表口から這入らうとすると、誰か、もの馴れた人が裏へ廻つて案内した。裏口の方が静かで、拭掃除の良くゆき届いた塩梅が清潔な感じを與へた。廣い階段を二つ三つ踏んで上ると、鼻先きの、受付といった個所に、小娘がかしこまつてゐて、浴券か何かうけとらしかつた。その廣々した部屋から更らに段梯子を上つてゆくと、男女を區別する控室といふやうな大きな部屋が幾つも設けてあつた。どの部屋にも二人を一組とする小娘が端然と坐つてゐて會釋した。時節柄みな同じやうなセルか何かを着て、娘々した紅い帯を締めてゐた。我等一行の落着いた部屋にも、やはり一組の小娘が坐つてゐたが、部屋の一角に茶の調度が設備されてあつて、其處の受付である少し齡嵩な別の娘が汲んで出す茶を、小娘たちは浴客の銘々に運んでから、脱衣宮と浴衣を夫れくくにくばりあるいた。さうして、手鏡とブラシと櫛の備へられた器を其處へもつて來て、さらに、一つく木製の小宮を銘々に與へた。此の小宮は携帯品を入れて錠を卸し、錠は各々の手首に巻くニツケル鍍金の腕輪のやうな仕組のものになつてゐた。

てんでに小宮を受けとつては、腕輪をびか／＼耀かせながら浴衣を着てゆく姿が、何となく變つてゐて面白く感じられた。

私は浴衣も借用せず一と通り浴場の様子を見ようと思つて行つてみると、曇つた硝子戸を開ける前に、一種汗臭い浴客のはげしい香がむつと流れかゝつて來たので、街の錢湯へ夜遅く行つたやうな感じから、それとなく慌てゝ引き返してしまつた。例の小娘が、串團子を皿へ盛つて出した。梅の實ほどの、白と緑色をした團子が交互に串に貫かれてある。娘が「坊ちやん團子」と名づけることを話して訊かせた。漱石の「坊ちやん」によるのださうである。皆が浴場からぼつ／＼歸つて來て珍らしげに食べてみた。漱石の創作「坊ちやん」に現はれてくる主人公が便所へ落した紙幣を婆々が拾ひとつて洗つたのを火鉢で乾かしてから嗅いでみるとぶんと鼻を衝いたといふ漱石一流の描寫面がどうしたものか此處へあらはれてきて、私も一つとつて食べた團子にかすかにからまつた。さきの浴室から流れ出た臭ひが、再現したこと以外ならぬとは思ふ。人々の晴れ／＼しい貌を眺めると、少しでも憂鬱になつたりしたのは氣の毒だと云ふ常識が働らきかけた。私は欄干に凭つて

下の街路をながめながら真をふかした。今しがたまであか／＼と流れてゐた夕日影がはたと消えて、花柳街の方から、風に吹かれながら入浴に來る二三の賣春婦らしい姿が斜に横たはる路面に見下ろされた。

鰯雲 仰ぎて島の温泉宿かな

途上

物乞の眼に憑く蠅や秋の風

船房

松山驛を午前五時に發つて今治へ向ふ汽車の中は、前日一度今治へ歸宅して又わざわざ松山へむかへに來てくれた霜平君と、それに一緒の子呆君とで少々睡眠不足の顔をつき合せながらの雑談で通した。おそらく三時間くらゐ外眠らなかつたであらう伊豫支社の諸君

が、拂曉の歩廊に緊張したおもむちを並べて見送つてくれた光景は忘れがたいところのものであつた。さうして又、霜平君の瘦せぎすな體が、坐つてゐても起つてゐても何となく横にすこし傾き加減に見えた。きびしく釣り上つてみえる眼と、少々あざ黒いその顔が、言葉に出す以外、深くなつかしげな情を秘めてゐるあんばいは頗る旅愁を慰めてくれることだつた。今治の埠頭で別れをつけて瀬戸の海に浮んだ汽船の二時間半。睡魔がいよ／＼襲つてきた。ふら／＼するからだを子呆君と共に毛布に固くくるまり、殆んど半睡の状態で過ごした。それでも、船房の窓を透して淼茫たる海波が疊むさまを尻眼に見かけないこともないし、人の好意から贈られた林檎にナイフを當てることも忘れはしなかつた。

かもめ飛ぶ八重の沙路の初あらし

船房に睡くかなしき紅林檎

絨毯に白晝夢疾く消えにけり

假睡をむさぼる間に一度談話室へ入らうとすると、書箋紙の半折をちらかして、二三枚の揮毫をしかけてあるのが眼にとまつた。思はず悪いものを見てしまつた感に胸を衝かれ

たが、怎うしたものか揮毫のぬしはあたりに見えなかつた。べつに此方が悪いことをしたわけではないけれども、何となく心が耻ぢたかたちで愴惶として此の部屋を立去り自分の船室へ歸つた。その揮毫が漢詩であつたことを瞥見したばかりで、揮毫者の誰であるかも心にとめることもなく其處を去つたのだつたが、しばらく後になつて、尾の道驛に着いて列車を待つてゐるとき、歩廊の日當りをぶら／＼歩いてゐた。すると、ベンチの上に一個の黒皮の鞆が置かれてあつたので、見るともなく眼をとめると、其れに高楠順次郎といふ名刺が附されてあるのを見た。私の推測は、曩の船内の揮毫が恐らくこの老翁の爲事ではなかつたらうかといふことへ落着いていつた。

間もなく列車が秋空へ黒煙を騰げながらやつて來た。

車室風景

倉敷驛で山陽線に乗り換へて、一途伯備線によつて伯耆大山を經、松江に向はうとす順

序になつてゐたので、豫定通りの列車を得た。午天ぢかい陽の光りが萬遍なく青天井に漲りわたり雲雀でも鳴きはすまいかと思はれるやうな清朗な天空の中に少しばかりの雲が浮動してゐた。日支事變が一段落をつげたところから、凱旋の歸還又は傷病の兵隊を出迎へる驛々の人数が黒山のやうに溜つてゐた、自分たちの車室内に、既に倉敷から乗り込んでゐた二人の各赤十字のマークが附いた白衣を着た兵隊は、出迎へてゐる人たちの目標であることがわかつた。一人の若い軍醫が附添つてゐて、見るからに病弱らしい二人の兵隊を何くれとなくいたはつてゐた。殊に蹙れてみえるA兵隊の腋からとつた體溫計を眺め、

「ん、八度ばかりあるな」

と、自分のポケットへおさめたりした。馴れた調子の軍醫は、こともなげに冷靜な自身の容姿をととのへてから、小鞆の上で何か手帳へ記入したりした。三十八度の熱を持つたA兵隊は案外に平氣な顔をして、網棚から一個の紙箱をとり卸ろすと、その中から餅菓子を取り出して、B兵隊にもすゝめながら二人で甘まさうに食べあつた。箱を包んだ新聞紙のかさ／＼する音と、ひどく鬱金色をした卵焼か何かで巻いた生菓子とが、たいへん

調和して、この二人の兵隊をあはれつぽく見せた。さきから推測してゐた胸の病であることは次第々々に強く肯けた。車室内に、これ等の人々の他に猶一と組みの夫婦づれが、私だちの横合に席を占めてゐた。男は六十間近からうと思はれるおでこの赤禿げ頭に残り少くなのかみの毛を、はる／＼とした地點から腦天へもつて来て油で適當に配列しておくといつたあんばいである。眼が甚だ細いのは關りないとしたところで、鼻の頭が熟してをり總じて赭ら顔なのは必定酒を嗜む結果とみられた。短い脊丈けれども袴をこゝろもち長く穿いてゐる處に氣安さを感じてゐるらしく見えた。中々細心な老爺であることは、日和下駄の鼻へ何かくつ附いてゐたのを氣にし、しきりに意を用ひて居るやうな處から、又懐の紙入を時々出してみたりするやうな點から察せられた。婦の齡が夫婦としてはかけ離れ過ぎてゐた。夫婦としてかけ離れてゐることは決してめづらしくないとしても、彼の女が結びあげた大丸髻が第一にそぐはないものだし、いやに襟を後ろへ投げたことも、素顔ではあるけれども、まさ／＼と白粉焼けのあとが浮んでゐることはあるものを觀察せしめるに充分であつた。ことに、坐席を迂り下りて不淨場かどこかへ行かうとするとき、坐つて

ゐた席を下りて、下駄に身をさゝへるや、小揺りにからだを揺つて容子めかす下劣なこなしは、最早牢乎としてぬくべからざるものを暴露してゐた。彼の女の齡は三十を二つ三つも越えたであらうか。二人の間の會話少なゝのも充分思ひ遣られるところであつた。B兵隊は早く生菓子を食へ飽きて、體をぐつたりと睡さうにしてゐると、A兵隊は足の爪先に靴をすつていつて向側の坐席へごろりと仰向に臥そべつた。これを離れて見てゐた爺は、A兵隊の頭近くのべてあつた自身の毛布の上へ臥るやうにすゝめた。爺が起つて行つてすめると、軍醫も口添へしたので、A兵隊は寒れた薄黴い顔をにこ／＼させながら両手を組んで枕にした。仰向いた顔が白い齒をみせて感謝の意を表してゐた。軍醫は自分のこととばかりに、鄭重に爺へ挨拶した。さうしてポケットから手帳をとり出しながら、爺の姓名と生國とを訊しはじめた。爺は、淀みなく本島の北の端のなながし縣の何處に居住してゐるもので、伊勢大廟參拜を終へ、ぶら／＼旅行で郷里へ歸り途に就いてゐることを告げた。軍醫は爺の云ふがまゝにいち／＼手帳へかきつけてゐた。爺は坐席へ歸つてしばらくたつと、又起ちあがつて短い脊丈のからだを軍醫の前へはこんで行つた。若干の金子を包

んだらしい懐紙の玉を軍醫に贈つて、さて窓の硝子越しに遠く田園の風景に眼を轉じながら、軍醫の顔をば見ることなしに、二人の傷ましい兵隊さんだちに遣つてくれるようにと懇懇を通じたものである。若い軍醫は鳥渡眼を圓くしたやうだつたが、懐紙の玉を握るに及んで、おも／＼ちを軟らげながら、甚だあざやかな軍隊口調で、

「さうでありますか、然ういふあなたの思召なら頂戴しておきます」と言ひながら、靴の中から又何か印刷された紙片をとり出して、それへ何事かを書き入れた。さうしてから「あの方から君だちに遣つてくれと云ふことだ。三圓だから一圓五十錢づゝ分けたらいいだらう」と二人の兵隊に言ひきかせて、猶、お禮を云ふようにとつけ加へた。少時くたつと、A兵隊とB兵隊は一緒に起つて、白衣の胸元を搔き合せながら、爺と婦の前へ行つて活潑に擧手の禮をしてから感謝の挨拶を述べた。その口調が又軍醫以上に嚴格であつた。爺は額をかゞやかせながら會釋し、婦はひどくもじ／＼と恐縮してゐた。列車の窓を何時の間にか日影が去つてしまひ、伯耆の秋空高く聳ゆる大仙の素晴らしい暮景がのぞき込んでゐた。

秋風や小錢をにぎる兵二人

安來節

山陰水郷の夕景色をながめながら松江市へ着いた。この縣の内務部長桂山氏夫妻其の他の懇ろなる斡旋のもとに、名だゝる大橋にちかい宿りに旅装をとく。さうして間もなく、松崎水亭の俳句會場へ案内された。句會、俳話の後、餘興の御馳走として窈窕たる女人の名物安來節と鱒すくひの踊が展開された。その光景はかの嵐雪が、

すまひ取ならぶや秋の唐錦　　嵐　　雪

と詠じたるそれに匹敵するであらうほどの印象であつた。彼の女だちは踊にあはせて、

松江大橋流れよが焼けよが

和多見通ひは舟でする

と唄つてきかせた。古くは泉鏡花描出するところの、小股の締つた婀娜者が、韓紅のたま

禪にきりつとした反り腰、ゆらりとするまぼろしの、人魚のやうに美しい蠱惑的な艶味を放射するとおもへば、これは又、眞青な浅い竹籠を、片手すくひにすくひ上げて打ち翳した素晴らしい細線の屈曲と慄動。茶が、つた旅愁にまさしく一抹の生彩を加ふるものに相違なかつた。

あらはれて無月にこぞる人魚かな
遠のきて人魚のまねく秋の海

八雲舊居

千鳥城一見の後、小泉八雲の舊居をたづねた。城北鹽見繩手の壕水が片端の埃りをあびて、地面から移す眼に豊かな感じを與へる蒼然たる趣きに、家並みは凡そまだ封建時代の面影をつたへてゐた。その中に一つ、とある古邸が見出されたが、それが明治二十四年に八雲夫妻のしばらく睦しい生活をいとなんでゐたといふ舊居であつた。自動車からいち

やく下りたつた多々緒君が案内を乞ふ後に従つて桂山夫人桂芳、子呆君と共に屋内に這入つてみると、あるじも居るのか留守なのか判らぬやうな、ひっそり閑とした屋内で、老婦人の低い聲が、明朗な聲の持主たる多々緒君と會話をとり交はした。つい鼻先の場面である。貧しい士族屋敷の雰圍氣が感じられた。屋内の北側に接した八雲の居室だといふ部屋から、南面した一室へ眼を向けると、椽側の硝子戸を透して、庭の百日紅の老木が明らかに見えてゐた。それを舊庵主が最も好んだものであるといふことを老婦人が説明した。未完成の儘に残されてある狭庭の溪流にかたどつたさゝやかな作業が生ま／＼しく八雲その人の情を私の心へ押し迫まらせた。ものゝ完成が、兎角鑑賞の距離を一步置かしめるに反して、この戯れめきたる築庭が未完成であるだけ、それだけあの鼻の高い眼の大きい、直線的な感じをうける容貌の持主をまさ／＼と浮ばせてくれるのである。彼は松江大橋のほとりの宿りで、其の界限の米搗の音に聴耳をたて、

「それは米搗の太い杵の音なのだ。杵は一種の巨大なる木槌で、長さ約十五尺の柄が樞軸の上に水平に載せてある。米搗の男は柄の一端を強く踏んで杵をもたげる。それから足

を放せば杵はその重量によつて米の臼の中へ落ちる。杵の落ちる響きが一定の拍子でとれて来るのが、日本人の生活に伴ふあらゆる響の中で、私には最もあはれに思はれる。米搗の音は日本といふ國土の脈搏だ」

といふやうな滋味深い感想を洩してゐる。斯様に日本の國土を熱愛した彼が日本へ渡來した三百有餘年前、生々粹の日本人の一人に芭蕉といふ詩人があつたことは誰も知つてゐることであるが、その芭蕉は、餅搗の音をきいてから、

有明もみそかにちかし餅の音　　芭蕉

と彼が得意な短詩形をかりて詠じてゐる。八雲謂ふところの日本の心臓の鼓動なるものはまことに白音であり、そも／＼此處に根元を持つところのものである。夫れに聴耳をたて得たる心境を讀ふるに毫も躊躇するものではない。慙うしたものゝ觀かた、慙うした五官の働らかせかたは、彼が舊居に遣した兒戯に類するほどな、その實、大真面目な、模造溪流の未完成のすがたに何よりもはつきりと宿つてゐることを感ずる。書齋であつたといふ北面の部屋の前に小さな池がしつらへてあつて、小松や杜若などの植物が夫れ／＼に配置

してある。彼が其處の磐石に佇んで、遠い郭公の啼聲に耳を傾けたであらうこともよく肯
けた。中間の部屋の中央に一つの卓が据ゑられてあり、其の上に八雲齋居保存の寄附金を
落し込む木造の小筒がのつかつてゐた。

木や巖やへルン 齋居の秋の色

有澤山莊

松江の名勝舊蹟の一つ有澤山莊の茶室を一見しようと自動車を轉じた。其處に古く設け
られてある菅田庵といひ向月亭といひ、いづれもこゝの舊藩主松平不昧公が遺愛のものだ
さうである。山莊と呼ぶ幽邃を極めた丘岡一帯の邸の内に在るのであるから、道を探して
木戸を叩かうといふほどな趣きで、木戸既に人煙に遠い風情を持つところから、案内にた
つた多々緒君さへ一寸戸惑ひしてゐるかたちであつた。緒士の坂徑の一つを擇んで、時々
靴を這らせながら爪先上りに登つてゆくと、見晴らしのよさうな個所に古ぼけた草家が

見出されて、木造りの門が閉されてあつた。つと、多々緒君がはいつて行つた後、しばらく
くたつて案内さるゝまゝに庭づたひに行かうとすると、礫の敷きつめられた庭には飛石が
續いてゐて、飛石の上に、竹の皮で拵らへた粗末な草履が揃へられてあつた。雨露風雪に
晒らされて、一塵をとどめない飛石を踏んで、時に礫の上へも踏み外づしてみる足裏の觸
感は甚だ快いものであつた。薄い靴下が這る竹皮草履の穿きにくさも、礫がころ／＼とく
すぐるやうに應へるのも、少々誇張して云へば雲上をわたるの感である。事實、茶室の濡
縁を上つて、どかりと疊に胡坐をかいてから、障子を打ち開き山莊八方の展望を恣にした
場合、白雲上に扶坐する詩人たり得ざるものは夫れ逆まに落つる衆仙人に非ずして何ぞや
である。一代の茶人不昧公が觀賞に値した一石一木の總てに歲月の流れは雨露風雪をたゝ
んで、こゝに心を遊ばすものゝ羽化登仙するを避けがたからしめるのである。茶室の若者
が運んできた茶の苦味は羊羹のあまたるきを解消せしめるのに若干の効果あらしめるに過
ぎなかつた。庭から、灌木を低く刈り込んだ生垣越しに瞰下すと、纔かに紅葉しかゝつた
楓の老樹を透かして、死んだやうに静まりかへつた古池の面が見えた。なにかしら耳底に

響かうとする幽かなものを追はうとするのであるが遂ひに聴きとめ難い。けれども多分それは松籟であるであらう。庭の端から樹つて天邊へ聳えてゐる二たもとの老松が、八方の翠微に色を交へて、たゞ清閑なる幹を近景として眼に迫まらせた爲體である。私はかゝる老幹を拳でほと／＼と叩いてみることを好む。好んでしかも叩かなかつたけれども、叩けば必ずや啄木鳥の響きよりはもつと鈍い、數百世紀前の人間が戀愛にやぶれて白日の野原をたどつてゆく蹙音のやうなひびきが傳はることを知つてはゐる。涙がおのづから湧き上つてくる大自然の慈悲のふところにはぐまされる心境である。しかしながら私に於ける現實は、羊羹の甘さがまだ口腔のどこかに解消しきれずに残つてゐる現實である。心に追ひ心に味ふ、神代めいた老樹の色、緑色のほの／＼とした潤葉樹の葉色、巖苔、泉聲、禽音等々から或は數十尺或は數百尺、數千尺をはなれて、詩友相もつれてゐることを充分に意識する自分でなければならなかつた。茶室を出て、樹間の徑をしばらく下つて行くと、さきの庭前から俯瞰した古池のほとりが、弓場であつたその名ごりをとめて古塚が盛られてあつた。青楓のもとに、袴姿で肩をぬいだ庵主がチョン髷を顫はせながら、満月にきり

／＼と弓をひきしぼつて、へうと射放した面影を偲ぶことが出来た。この弓場の古道を行きぬけるといつか山莊の園外に出てしまふことになるのであるが、行く／＼、今歩るいてゐるのが表道であつて裏に辿つたのは裏道であつたことが肯けた。このことが猶も幽邃な山莊をなつかしくふりかへらせた。

名、木、ち、る、菅、田、庵、の、表、道

行程二十五里

二十六日は、桂芳夫人と多々緒君の案内で松江市を發して、上記千鳥城、八雲舊居、有澤山莊等を尋ねた後、ひと先づ縣觀光協會事務所たる商工課に立寄り、桂山官邸に晝餉の御馳走を終つてから再び自動車の快走によつて、桂芳夫人と多々緒、子呆兩君と共に、鉾川郡の鰐淵寺を尋ね、八東郡の八重垣神社から、出雲大社へ詣で、玉造温泉の暢神亭へ落着いたのであるが、すでに大社參拜の頃は全く夜の色に蔽はれてゐた。行程二十五里と

いはれてある。遊山、観光たる半日の行程としては特記に値するものかもしれない。

鰐淵寺

門前にそびゆる嶽や秋霞

早くより出迎へたる鰐淵村々長某老軀をひつさげて案
内まことに懇ろであつた。

觀光にしたがふ爺や露の秋
カンナ咲く路ほとりなる草圃

八重垣神社

縁むすぶ神鎮みます椎の秋
そのかみの秋日影さす鏡池

九州觀光園といふ雲霞の如き自動車群に逢ふ。老若男
女を一杯に詰めて後から／＼蟻の續くが如く見渡すか
ぎり野徑を埋めて壯觀といへば壯觀だが避けるに苦し

む不運を舐めた。

神前

秋風や戀結願の錢の音

出雲大社

くらやみに水落つ音や大社みち
くらやみに大社の秋の燈かな
馬追の鳴く献燈の一つかな
秋雷や神在月の八雲山

暢神亭

玉造温泉といふのは、三種の神器の曲玉をつくつたといふ橿明玉命の舊跡であつた。二
千五百有餘年をへだて、今も其の青瑪瑙は此處から産出されるといふはなしである。其處

の暢神亭といふ最近建築したらしい温泉宿に着いて、廊下に備へられてある土産物の陳列棚を硝子越しに覗いてみると、装身具や何かのさまざまのものが青瑪瑙で造られてあつた。廊下を曲り曲つて、最後に鶯の間と云ふ一室に案内された。いさゝか月並な部屋の名に反して、總ての設備なり、待遇なり、長距離を運ばれて綿のやうになつたからだを、ゆるりと落着かせるに好適であつた。勿論桂山氏の好意に困るところのものである。桂芳夫人が身を居崩さないまでも、より以上へと／＼に疲れてゐることは談笑の中にとり上げるハンカチの揺らめきにも感ずることが出来た、間もなく松江から駆けつけて来た桂山氏を交へて五人の愉快なる團欒がつくられた。おの／＼一浴をこゝろみるといふので玉造温泉の靈湯に浸るべき場合におかれたが、さて獨り大理石づくめの浴室に身をはこんで驚いた。手を浸し足先で湯面を弾くと、湯がすこし浴槽を溢れ出たが、浴槽の廻りに車形にあけられてある小穴へ湯が落ちるに及んで、なんと美妙的な靈笛のひびきがかすかにつたはるではないか。その刹那に偽りなく私は太古草味の時代に於ける出雲人の口笛をきいたに違ひなかつた。それは實に文字通り刹那の感じであつた。次ぎに、どつぷりと靈湯の中へ身

を沈めたとき、之れは又如何に安價なオーケストラであるか。八方の穴から耐へ難い悲鳴が湧きあがるのである。浴槽に沈んだ遊子は果して笑ふのか、噴るのか、そも／＼又嘆ずるのか、いづれともつきがたい一種不思議な表情を面貌に上せて、澄んだ温泉の中に、皮膚を青白くしづめてゐた。たま／＼湯の波が蜥蜴色にゆらめくのをながめながら、深沈と更けわたつた温泉宿に、このすさまじいオーケストラが響きわたるので、その音響を最も明瞭に聴きとり得るところに我々の部屋が、鶯の間と名づけられる理由をもつものであると、考案者は不粹者に説明するであらう。妖怪變化めきたる人形のやうな愛人などひきぐしたる現代御曹子が、湯女のさげた玉盃に唇を近づけた時分、その妖怪變化が白魚の指先でびち／＼と湯を爪弾じきしたりすることによつて、辛うじて送り得た音波は、こゝにはじめて御曹子をして這個の境、春宵一刻値千金の聽覺を働かせうるものかもしれないと想像するのである。

靈湯の効驗はいちじるしく、一日の疲勞を一拂せしめた機嫌で、ぬれタオルを吊るした姿を鶯の間へ戻つてきた。

湖上の秋

松江棧橋から船に乗つて、中海の景を賞しながら美保關へ行かうといふのである。多々緒君の案内で、子呆君と三人。ぶらりと宿りをたちいでた身軽な行樂気分である。船はこの湖上を二六時中往復してゐる小汽船で、胴の間が上等席になつてをり、中二階のやうな屋根裏が普通席になつてゐた。むさくるしい胴の間には腰掛か何かしつらへてあるのだが寒風の吹きすさむ季でもあつたら知らぬこと、好晴の秋日和などには、展望を恣に出来る二階席が却つて興味あるやうに思へた。船客は數少い鹽梅で、胴の間も二階も船客の出入を自由にまかせてあるらしかつた。我等は、乗込むから二階席の一隅に座をつくつて、欄に凭れながら展望をむさぼつた。秋晴れの波が紺碧の色を深く疊んで、遠い湖上の帆船をば静止させて見えた。山嶽、丘陵が、水際に横たはることの長々しさ、ゆけどもく盡き

せぬ繪屏風の美景である。この大自然の繪屏風を背景として、小汽船の低い屋根下の座席に、ぼつりぼつりと雑談を交はしてゐる三人の隣りへ、俄かに、胴の間にゐた六七人の船客が入り込んで来た。婦人客が二人、他は一つぶしの荒くれ男で、婦人二人を交へての小遊覽團體であつた。婦人客の一人は齡五十を超えたらしい老婦人で、一人は三十才に一つ二つ間があらうかといふ何處やらにまだ名残りの艶味を漂はせてみえた。二人の婦人客はいづれも古ぼけた毛布を引つ被つて、一と睡りしようと思ふ積りらしいが、枕が無いのでぎこちないかして、殊に若い方の婦人客は起きてみたり寝てみたり、まことに居据はりのわるい風情だつた。そのうちに一行中の若い男が枕にする手提囊か何か持つて来てやると、素直に會釋して身を横たへた。子呆君はこの時分から階下へ下り、舷側に凭れて日向ぼつこをしてゐた。我等が足を欄外に突きおぼしたりすると、恰度子呆君の肩のあたりに達するやうな個所に立つて、萬遍なく秋の日影を浴びながら、水影の反射にまぶしげに眼を細くしてゐるのであつた。睡りに落つべき筈の若い婦人客は、しきりに頭を擽けては四邊を氣にした。多々緒君の、極めて髪の薄らいだ後頭部あたりへも一瞥をおくることを

惜しまなかつたやうである。多々緒君は、やをらポケットから綺麗な懐鏡をとり出してから、一と通り紳士の身だしなみを加へた。兩舷側に此の國土の太古をさながらに偲ばす秋日影と水影とがゆらめいてゐるのである。さうして眼を轉すると、仄かに秋霞みした山々峰々が静寂の姿を現じてゐる。波の上には、赤貝をとるのだといふ原始的な反小舟（そりこ舟）が、獨特な恰好をたもつて單調な動搖をつゞけながら、それこそ無數にむらがつてゐるのである。

六道湖船中

無花果を手箱に旅の媪どち
中 海秋扇水脈をながれけり

大根島といふ、中海の中に一つ据ゑられてある緑の小島の一端を眺めながら、此の島の沃土がもたらす豊饒な農産物等に就いて興味ある話を聽いてゐるうちに、何時の間にか小遊覽團は洞の間へ下りて姿が見えなくなつてゐた。聽て、境港の泊船の間に起重機が現はれ、市の騒音に交つて鐵板を打つ強い響きがきこえてきた。弓手の碧空に、峰々を壓へて

枕木山が緒茶けたすがたを聳えさせてゐた。境港から、その後方米子までつながれた天橋一帯の蜿蜒たる岬と美保關につらなる天險の岬一帯とが相抱く海面に我等の船が浮んでから、はるかに外海を眺望したところの黝んだ群青の汐は、まつたく新鮮の感じを與へるものであつた。海と天空とのつらなる單純な一線、それが單純なものだけ、底ひもわかぬ神秘的な海光をやどして、六道湖にも、中海にも決して見出し難い、深遠な謎をひそませてゐるかの感じを與へた。この荒く、強い、而して妖しい光景は、これまで眼にならされて來た謂はば女性的な、軟らかな細線をもつて描かれてゐるこしかたの湖上の風景をも却て亦なつかしいものに振り返らさしめるに充分であつた。屈強の青年がひそかに慈母のふところに抱かれた乳の香を思ひ出すやうに。

美保關の棧橋に着いたとき、其處には美保關町の多數の人々が一群をなしてゐて、直ちに美保神社へ拉し去られた。神社で嚴かな禮拜を終へてから五本松公園へ案内されて登つた。五本松公園は、美保關の背後に蟠る丘岡一帯を指すもので、打ち見たところ公園創始歲月甚だ浅いかの感があつた。縣觀光協會の説くところに訊しても石雲兩洲相寄つて國産

とするとところいくばくもない國情に照らして、縣是をさだむるに觀光團體を吸收すべく主力を用ゆることを以てするは當然過ぎる當然といへるのだが、その爲めに歴史的の幸運にめぐまれた此の縣が細大洩らさず史蹟を拾ひ景勝の地をあさつて、舟車の通ぜざることなからしめんとして努力を吝まない、さうした中の一つとして五本松公園も數へられなければならぬことは明瞭であつた。吸收せらるゝに比較的慌しい遊覽客の誰彼にとつて、五本松公園の絶頂へとみちびく坂路は、未完成とは云へないまでも、やゝもすると靴のうらをこらせては辛うじて松の根がたや岩石に止めさす様なこともあつた。それから又、遊覽客をして如何に心易く坂路を登攀せしめんかと苦心した痕は、麓路に樹てられある導標にした「登るほど樂です」といふ文字からも察せられた。賢明な深切を感じ得る文字でもあつた。

頂上近く、かの「關の五本松」が一本伐られたあとをとどめて、残り四本の黒松が縦横に枝を張つてゐた。さゝやかな茶亭に一憩して行くと、頭の上に空をついて海軍慰靈塔が聳えて見えた。昭和二年八月、海軍大演習の時、驅逐艦「蕨」が巡洋艦と衝突して、眞の

闇に艦長以下百餘名の將士が悲壯の最期を遂げられたことは當時新聞紙が詳細に報じたところであつたが、その英靈を慰むるために建てた塔であつた。そのあたりで沈没したといふ美保灣外二十哩。好晴の小波を疊んだ紺碧の海洋は、出來ごとの翌日とも思はれるやうに氣味わるく静まりかへり、海底の幽寂をしのばせた。その遭難の海上を遙かに隔てた水天鬐鬣の間に、この國びとが海上のパラダイスと呼ぶ隠岐島が模糊として遠望された。此の地點をふくめて、完全な長岬を形づくる一聯の山嶽と直下に展望される海洋の漁業の關係に就いて案内者の一人は、をちこち指さしながら物語つた。——此處に見渡し得る山嶽一帯は、樹木が鬱蒼と茂つてゐて、さながら千古斧を入れぬかの觀があるが、これは漁業保安林であるが爲めであるといふ。山々の樹木がまるはだかに伐採された時分は、頃に魚族の棲息することが減じてしまつて、漁業に大打撃が與へられた。古老の言にたゞすそれは海中に映する山影が裸坊主で、魚族の餌たる海草類につく蟲類の減退に因るものだといふところから、當局は再び連山の樹木伐採を禁じ、漁業保安林として今日に至つてゐるのだといふことであつた。然もその山影が海中に映じて漁業に影響するところは遙かに

數里若しくは十數里に及ぶと云ふことであつた。この話は海上の展望を一入興深くさせる力があつた。

飄乎として穹窿をわたりつかれた秋の日輪は、やうやく蕭々たる光りを、海上といはず連山といはず、又、風雨に晒された榻のほとりにもたゞよはせ、松風が幽韻を吹きおくつた。いまゞで眺望してゐた正反對の方角の樹間に、あか／＼と夕日影をあびた伯耆大仙のおごそかな沈黙をまもつてゐる姿が覗かれた。きびすを返して、皆一様に五本松公園を下つた。福間旅館で、淺酌低唱の間にこの地の俳人五松君から、故零餘子が此處へ遊びに来て勝チブスに罹り歸來病革つて死歿したものであることをはじめて訊いた。小盃になみなみと湛へられた琥珀色の液體を睨つと見詰めたとき、なにかしらぼんのくぼを薄氣味わるいものが小寒く掠め去つたことを感じた。欄ごしに、紺碧の海を夢のやうに白帆がたゞよつてゐるのが見えた。

丘岡の高きに登りて、果てなき外海の海光に面す

秋海にたゞ涙する旅路かな

秋雲や伯耆大仙神代より

桂山邸句會

美保關一泊の豫定であつたのが、松江で千鳥吟社名残りの句筵をしくといふことから、自動車がさしむけられて來たので、俄かに宵闇を衝いてひた走りに走る車内に揺られた。

宵闇や枕木山のふもと路

みちすがら秋夜の法會見たりけり

官邸秋宵の俳客十八九名。うちくつろいだ句筵になごりを惜しんで、千鳥城下の鷄鳴にうたゞ千早ふる神代の古調を感じたことである。

くさもものゝ夜さむの花や古邸

八雲たついづもの鷄や夜半の秋

秋冷や香爐のきゆるものゝかけ

丹波路

まだ宵ノ口と思つた京都行大社線の列車内が案外に更けてゐることに氣づいた。丹波の諸君は恰度多忙の時期に出逢ふてゐることだし、此方にしても餘日いくばくもないことなので、今回の行に於て丹波へ立寄ることは見合せる積りであつたのが、列車内へ宛てゝ來た懇篤な飛電で、その準備を突き崩すほどな非禮は爲し得べくもなかつた。福知山で大社線を見すてゝ谷川驛まで案内をうけた。夜風が身にしみて、流石に丹波路の秋冷はきびしかつた。だが又一莖、芳葉の兩君をはじめ誰彼となく素朴な柿の花吟社の諸君が、同行二人の俳行脚がする旅の我儘をもとがむるなく情愜をかたむけての歡待は、こゝろから感謝を吝しみがないところのものであつた。

柴ノ門に新造が迎ふ夜霧かな
井に湯氣たつ栗を語り草

夜闌、谷川を發つて又福知山へもどる。福知山發車は
午前一時なり。

丹波路やまだ夜を翔ける野分雲

名古屋一泊——東京

すでに遊覽數回をかさねてゐる名古屋の地は、ふるさとの思ひであつた。宿でゆるりとして一休してから名古屋城一見に出かける。松江に於ける千鳥城のやうな組立材料に特別なおもむきを持つてゐるとか、所藏物に珍寶をみとめるといつたやうなものでない限りは、凡そ内部は變哲もないものに過ぎないことをしばしば實見してゐる。けれどもこの城にあつてはなにしをふ名城のことである。離宮たるを解放されてこの方、まだ日月の浅いだけに老若男女の遊覽客は、きびすを接して多く階段を上り下りしてゐた。加藤主計介が精力を傾けて完成したと傳へられてある下層の堀井戸はさすがに珍とするに足るものがあつた。

關の頂に輝いてゐる鯨がこの名城を名城たらしめた主因たることは誰もが知るところであるけれども、その外に此の名城内部のどん底に、天邊の鯨と充分一對を做し得るところの斯うした古色蒼然たる古武士の偉いなる魂がひそんでゐたことは比較的世人の話題に上らなかつた。尠くとも鯨の金光に及ぶべくもなかつたことは事實である。私は其のがつちりした井桁乃至井蓋等が薄埃をかぶつてゐる爲體を打ち眺めて、名城の輪廓より城主の面影より、往時千軍萬馬の巷を往來した偉丈夫の面影が髣髴するを覺えた。

城内をたちいでたとき、飛行機が一つ天主閣の空高くとんでゐた。

たちいでし城ふり仰ぐ爽氣かな

山國のふるさを發つたのが十月十七日。富士驛から、富身電車で歸庵するとすれば、甲府まで三時間である。家郷を模糊たる雲煙の間に遠くのぞんで、特急富士のはしるがまゝに身をゆだねた。同じ月の三十日、東海の帝都がたちまちのうちに眼前へ展開した。

龍子邸

竹籬に露まだむすぶ巖かな

秋蟬も去にたる櫻欄の五六本
秋惜しむ湯氣の婆娑たる紅茶かな

(昭・七・一一)

素描旅日記

——神戸・大阪篇——

甲斐連山のひがしほとり、白雲ふかき中腹の蝸廬をたちいで、まだみぬ西國の旅にあこがれつゝ、路の邊にゆらりと曳く影法師やどる草々の穂にいでたかく秋風になびき伏さんとする風情、わけてもほそくとした莖間を透してかんがりと照りはえたる秋日影の爽かにも亦なつかしく打ちながめらるゝに、之れは又いつしか流るゝ水の面に淡々しくひきなしたる二つの影、いひ合せて行をともしする吳龍、行く雲を仰いで語り、叢にすだく蟲を指しては囁きあふ親しみのこゝろ相もつれて行くほどに、富士溪流にそふ汽車まつしぐらに唯三時間餘り、さきのほど野徑にさゝやける二人をば早くも富士驛に下車せしめて

雲表に登ゆる大富嶽にはらりと來し秋雪をふり仰がしむ。

即事

苜蓿に穂はちりくゝのすゝきかな 蛇 笏

富士驛に乗り換へたる東海道本線の汽車の窓、すこぶるめまぐるしけれども、心に一笠一簑の旅情たゞみて倦むことなし。かの風羅坊が、

ひとつぬいで後に負ひぬ衣かへ 芭 蕉

と詠じつゝ飄々と旅路の夢をむさぼりたる遠き世の事は今の世に倣ひ難しとして、喇叭ズボンに靴音を鳴らし大都の灯の巷を踏む御曹子の身にも猶街路樹の黄葉をちらす秋風は吹きかゝりぬ。上りの空なる人の心に秋風がもたらす淋しさ、街路樹がふるふ落葉の静けさが映すると映ぜぬとは餘外事として、世は如何やうに移り變るとも、秋來れば秋風の吹かぬことなく、落葉樹の落葉せぬことなし。

旅人や秋に後るゝ雲と水 蛇 笏

十月二十二日の夜を、琵琶湖畔なる大津の町に下車して紅葉館といへる旅籠に一宿をた

のむ。思ひきり湖水へのりだして建て設けたる別館の静かなる一室へ案内さるゝに、深沈たる夜氣、湖上の月影を遠くゞだきて、仄かなる叡山の灯影夢路に通ふ。

月 遠 近 江 の 宿 の 夜 食 かな 蛇 笏

朝起、窓近く漁夫とその女房をのせたる漁舟湖上にかゝりて、漁夫の丹念に細紐を引くを見る。紐には十尺おきくらゐに小さな竹瓮懸りゐて、時々老夫婦顔と顔をつき合はせ嬉しげにのぞきこむを見受く。朝日影、湖面に漲りかゞやく。をちこちに白帆織るが如く浮ぶ。老漁夫舷にたちて、こともなげに小便をたらす。女房傍らに孜々として働く。ひろき硝子戸を透して、朝餐の座に湖景なほ仔細に見ゆ。

湖 霧 も 山 霧 も 罩 む 旅 籠 かな 蛇 笏

大津驛へ向つて走る自動車の小窓より、たま／＼街なかの店舗に掲げ賣る大津繪を見受く。驛待合にて、このあたりの農婦らしき旅客、女の童と共に筍の煮つけを箸に懸けつるして辨當をしたゝむ。恐らく鐘詰の筍ならんも、竹藪多き京阪の地方をしのばしむるに足るものとす。

山 科 や 篁 か す む 薄 紅 葉 吳 龍

大阪の驛にて、奏鳳、如星の二君と窓をへだて、相見る。大文字君來り乗車、ともに神戸に揺られ去る。行く／＼窓外の秋景、竹林に趣きふかきものあり、柿の實又思ひがけなく小なるを面白しとす。不安なるものゝ一つとして心に描ける上方辯何等の澁滞なくなめらかに心に入る。大文字君の元氣に満つおもゝち、爽快なる聲調はまづ早く不安を消さんとするに似たり。

神戸驛頭に、墨石、躑躅、吟陽、水華、量人、季發、芥子、千鶴女其の他の諸君出迎へ呉れたるに、心和みて、いざなはるゝまゝ行を共にす。晝餐をしたゝめたる明海ビル、八階中央亭を出てビル屋上より指願の市街を瞰め、港の船舶に思ひを遣り、躑躅、墨石君等の説明に従つて、市街の後背を形つくる連山諸峰のたゞすまひに心を遊ばす。ひそかに六甲、鐵拐諸山の低きをかこつは、名にしおふ甲斐の山々峰々餘りにも高きに馴るゝ己が眼のこれに比較せんとするいたづらごと笑止とやいふべき。夜、三菱俱樂部に七時より講演。終つて九時。吟陽居に一泊。久淵を叙し快談夜半を過ぐ。

二十四日。快晴足かろく須磨、明石の海濱に吟行す。眇陽、水華、千鶴女、りよ女、如星、奏鳳、墨石、吳龍等の諸君。

秋晴れや須磨の浦人藁をうつ 吳龍

海水浴場として夏雜鬧せる名残り、沙上一帯に見ゆ。蛸壺の山。揚船の數々、太刀魚を釣る竿の先きに小鈴つきたるが横たふ。足もとに打ち寄する潮、塵芥をすかせて案外きたなく、去つて防波堤を歩むに及び、海波をへだて、淡路島を望めば、秋霞に茫乎として此の島動きゆくに似たり。海岸をわたる電車軌道の傍らに

何にくそ死んでたまるか

と、筆太く明瞭に書きながしたる轢死防止の標柱たつ。海風強く、秋日

影鮮かに死靈あたりにさまよへる感を覺ゆ。

渚ちかく、魚を突く漁夫唯ひとり、波間にたゞよひ鳩の如く潮に沈む。その上空を秋の鳶靜かに舞ふ

明石城に登る。本丸跡にて、墨石君たはむれに一行を撮影す。

敗荷に竹の古葉のたまりけり 吳龍

正午、柿ノ本神社の廣前、高臺なる旗亭に憩ふて晝餉をしたむ。脚下の林梢をへだてて海見え、やはり淡路島かすむ。風景に浸りてわざと路傍の卓に凭る。籬の上に草花、仙人掌の小鉢あり。軒に柘榴の盆栽あり。行人の影をみとめず路面水の如く淨し。

秋蠅や人丸庵の飯にとぶ 蛇笏

一の谷

小篁や敦盛塚の秋の水 同

鉢伏の山表を登攀。中腹にいたりて佇む。野菊咲き、馬酔木とところ／＼に葛をまとふ。眼界をさへぎる樹木とてなければ、はるかなる麓、一帶の松原かすかに秋風に鳴りひびきて、やうやく秋陰を帯びきたれる空合ひ纒かに旅愁をそより、淡路島あらはなる海上一面の陰影海波に垂れ、ゆきかふ數多の船舶うす／＼と蔽はる。

秋曇る淡路島山見て佇てり 千鶴女

舞子驛に陶物師のわざを少時く面白しと見る

霜降の陶ものつくる翁かな 蛇 笏

夜、三菱倶楽部樓上の句會にゆく。神戸俳句會としてめづらしき大衆一堂に會したると訊きて俳人としての幸福を感ず。松濱、躑躅君等と二三葉の繪葉書をしたゝむ。

席上作句。

霧こめて日のさしそめし葛かな 蛇 笏

みさゝぎへ道ひと筋の濃霧かな 同

霧さぶく屋上園の花に狎 同

朝霧や眞葛薙ぐべき利鎌提ぐ 同

老鹿の眼にたゝへたる涙かな 同

十時墨石庵へ歸着。

二十五日。朝起吹き降りの中に墨石庵をあとにして奈良の古諸寺院をめざす。東道の墨石君、多年の蘊蓄をかたむけて、佛像、建築等の説明懇篤を極む。秋雨やむが如くにして降り、忽ちにして霽れ又降る。

南大門の長き土塀にそふ野徑をしよぼく／＼と行く一人の旅人の影あはれになつかし。

墨石、千鶴女、吳龍、相離れ相寄り、かたみに語りあふ聲やうやくにして疎く、唐招提寺の古美術鑑賞を終へて草むらの微雨をふむころほひ、かたむくる傘の端に、風さへ出でけぶれる雨天を仄かに透かして日のうすづかんとする景色に肌寒をおぼゆ。柿、濡れて紅く、松みどりに、遠く百舌鳥啼く。遙かなる山麓に靜かにたつ法隆寺の塔に名残りを惜しみて去る。

二三ヶ寺めぐりて暮るゝ秋日かな 吳 龍

夢殿や雨の霽れ間の石たゝき 蛇 笏

墨石庵に泊す。

二十六日。風雨やゝつよき神戸の市街に、珍陽君の専用車へ窓より別れをつけつゝ、墨石、吳龍の兩君とゝもに揺られて、三ノ宮驛に至る。構内トタン屋根野分に剝がれて紙の如く鳴る。別離うたゞ寒し。

野分つよし何やら思ひのこすこと 蛇 笏

大阪梅田驛に奏鳳、如星、大文字、白映、江雲諸君其の他に迎へられて奏鳳別庵に誘はる。晝餉後小憩、五時より大蓮寺にゆく。曩に大毎社の田村木國君の招きあるがため。奏鳳君の案内にて途中少時その約を果たす。大蓮寺句會は雨天にも拘らず大衆殆ど時間を嚴正にまもりて會場に滿つ、一絲みだれず緊張せる態度うたゞ快適の情をそゝる。丹波より遙るん、尋ね來られたる一莖、草史、羽城、芹石等の諸君に會ひ、又和歌山より來られたる樂南君に會ふ。爽雨、曉水、櫻玻子、夜半等の諸君其の他親炙せる雅號の持主、二百の會衆に數へんとすれば追もなし。

席上作句。

ほけし絮の又離るゝよ山すゝき 蛇 笏

茨叢や日和のすゝき二穂三穂 同 同

をりとりてはらりとおもきすゝきかな 同 同

會後、一場の挨拶に加へて所懐を述ぶ。

奏鳳庵一泊。

二十七日。奈良吟行。

興福寺門前の秋日和を織る雜關に埃りをあび、寄る鹿にたはむるゝ一行は、大文字、奏鳳、柏人、白映、みのる、千鶴女、春人、紅夢、如星、江雲、草月、吳龍の諸君。鹿の餌なる煎餅の一と束ねを我にも配らるゝに、まづ其の一個を與へんとすれば、路傍の鹿はやくも我が手より煎餅を捲ぎとりて、喰ひ盡したる上に、鼻先きのぬら／＼する個所をわが手には拭ふなりけり。素より魂ぎる聲をはなつほど然かく貴族めきたるものに非ず、山賤の身の仔細なれと思へども、猶しばらくがほどは氣持わるし。

東大寺に詣づ。

大伽藍塔蕭々と奈良の秋 芹 石

嶽々と角ふる鹿のかけぼふし 蛇 笏

旅人に秋日のつよき東大寺 同 同

春日神社に詣で、丹塗りの廻廊に薺々とたれたる古色蒼然たる吊燈籠に數奇ごゝろをひかるゝと思へば、苔蒸したる石燈籠かぎりなく打ちつゞくに、陶然として心歲月の流れ

に酔ふ。馬酔木あり、櫻あり、柿あり、鬱蒼たる老杉の梢を、日輪流るゝが如し。鹿たま
たま鳴く。

嗽草山の麓を通りゆくに、折から日曜日に當れば、一日の行樂をこゝにする阪、神の都
人づれ、道をかすめて黄塵をあげ、榻を埋め、芝草のしとねをせばめて、中腹より頂かけ
て、たゞ橙色なる秋日影のみ静まれるをみる。浅茅ヶ原の小丘江戸三亭に憩ふ。曩より待
ちうけ、松濱、百壽、一莖、草史、羽城、芹石の諸君此處にあり。談笑はなやかさを加ふ。

欄干におはす夫人や紅葉茶屋 艸月
秋晴や山廬先生鐘を撞く 奏風

京都にて

障子洗ふ尼僧とこそは見たりけり 千鶴女
文机や秋の日させる草の庵 如星
すさまじき浅茅ヶ原の鹿の尿 蛇笏

亭前、蔦紅葉の籬をへだて、小池あり。艸月君、竿を携へて空しき釣を垂る。日かゞや

きて秋風あたりを吹く。大阪の市街にもどりて、道頓堀の夜景に浸る。灯の波顔に寄せ、
雑音入り亂れて身は路上より浮く。流行を織り做したる左右の店舗に交りてところ／＼昔
めきたる懸行燈あり。「松川」「大儀」など、達筆に癖ある文字を染む。如星君の謂らく、
「雪の降つたとき此街を歩くと面白いですよ」と。此の街路に降る霏々たる春雪さながら眼
前に髣髴す。斷髪いまだ寥々、洋装を婦人に見かけることの尠きところ脂粉の香はなはだ
強し。灯の巷をよぎつて河岸に横ふ牝蠟舟に入る。大文字、奏風、江雲、紅夢、白映、如
星、千鶴女、吳龍諸君に加はるに寒々君あり、快談百華降りみだれ天鼓轟く。絃をふり返
れば夜の河水、軒提灯の灯影を落して、遠きは對岸の街燈、店舗のともし灯を流す。蘆手
をなす河波、戎橋を行きかふ雑鬧をはなれて生く。酔ひ充分にまはる。

河波にさませる酔ひや星月夜 蛇笏
住吉にもどりて瀟洒たる白映庵にやどる。

十月二十八日。

白映庵

朝顔の實のおびたゞし 厠窓 蛇 笏

白映庵をたち出で、住吉神社の境内をゆく。西鶴のむかしを偲び、御田の熟れ稻を之れかと思れば、あまりにも田面せまく、見どころもあらぬに、ぞんざいなる案山子あまた立ちならびてうるさげなれども、流石に霜枯れの風情、細葉垂れに垂れて、織かにのこれる薄みどり、露したゝかなれば蝗もとばず、秋がすみほのかに浮びぬ。

さるほどに弓矢すてたるかゝしかな 蛇 笏

天満、驛にて、見送りくれたる大文字、柏人、紅夢、如星、江雲の諸君と名残りを惜しみて別れたれども、尙、奏鳳、千鶴女、白映三君は行をとみにす。

宇治にて雨丈君の迎ふるに會す。

平等院

そのかみの火むらをしのぶ紅葉かな 蛇 笏

陀しき裏町

秋茄子の葉も花も干す 庭かな 同

宇治橋畔の茶亭にて晝餉をしたゝめ、繪葉書數葉を書く。雨丈君の東道にて桃山御陵と乃木神社參拜、聽て奏鳳、千鶴女、白映の諸君と袂を別つ。京都に入りて御幸町旅館に導かれ、野葡萄、玉石、ながし君等に會す、虚子翁をはじめ俳人の定宿なるよしを訊く。夜圓山公園「あけぼの」の句會にゆく。會衆中、緋衣の僧二人相ならびて坐せるを見うく。旗亭恰も僧院の如く、會衆肅として静まり、三昧の境に入る。

作句。

山風にしばらく鳴かぬ 園かな 蛇 笏

園籠つるせばうつる山泉 同

夕影や落穂をひろふ井手の水 同

句會後講演。旅籠に歸る。

二十九日。雨丈、玉石、雨城、比古、吳龍、正男の諸君とよもに北嵯峨探勝の歩をはこぶ。渡月橋にたつて嵐山の翠微を仰ぎ、大堰の清流に向へども、句一つとして生るゝなく、一帶のしがらみ徒らに水聲を送つて、屋形船にあやつる水棹遠く樹がくれゆくに詩情をかもすものなし。亭に憩ふて季節外れの櫻餅をつまむ。櫻餅ちまきのごとく味甚だ面白し。櫻餅と、翠幣のところ／＼に點する薄紅葉と、色を相等うするものあり。修學旅行の童女が蹴たつる土埃りは、この餅色を曇らすほどにもあらず。

嵐峽の紅葉茶屋なるうす煙り 蛇 笏

大堰川のほとり、野徑の間に小督、局が墳墓を見る。さゝやかに生籬低くめぐりたる爲體。喬木二たもと三もと太やかなる藤蔓を纏ふて、薄紅葉せんとする葉末より墓邊に白露をふらす。我れ幼にして彼の盛衰記に耽り、その小督のくだりにたましひを奪はれたる事今に忘れず。突梯なる冷泉大納言隆房が三年越しなる戀慕は、いかに窈窕たる絶世の國色

たりしかを證するにあまりあるものゝみ、殿上に召されて後、平相國の横暴に辟易して、ひそかにこの邊りにのがれ、雨露を草庵にしのげば、――

「仲國明月に鞭をあげて、西を指してあこがれゆく。八月半の事なれば路芝におく露の色、月に玉をや瑩くらん。我ならぬ在原業平が男鹿啼くその山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋の比、さこそは哀に覺えけめ、片折戸したる所を見付けては此内にもや御座すらんとひかへく聞きけれ共、琵琶弾く所もなかりけり。――

龜山のあたり近く、松のある方に、幽に琴こそ聞えけれ。峰の嵐か松風か、尋ねる君の琴の音かと覺束なく思ひ駒をはやめてゆくほどに、片折戸の内に琴をぞ弾きすまされたる。手綱をゆるへて聞きければ、少しも混ふべうもなく、小督の殿の爪音なり。樂は何ぞと聞きければ、夫を想ひて戀ふと讀む、想夫戀と云ふ樂なりけり。仲國急ぎ馬より飛び下り、やうちようぬき出し、ちと合せて立寄り、門をほとくと叩けば、琴をば弾きやみ給ひけり。――」

すでに人口に膾炙するところ、作者をして、思慕連々、愁思綿々の情を叙せしむるに至り

たる、古今に絶せんとする行文のおもむき、絢爛として心に展開すれども、露おく石、秋風に戦ぐ草むら、げにも茫々八百年、幻滅一つとしておもかげにたつものなし。竹んで杖を墓畔の土に曳けば、土は好晴の己が影法師を現じて、龜山のあたりちかく松籟の奏べながれわたりぬ。

秋 さむき 小督の墓の蜥蜴かな 蛇 笏

龜山公園に入り、赤松深く阪路をゆくほどに、小倉山はるけく芒がくれに見ゆ。水滸れたる山沼のほとりに北人君と會す。北人君は一行を追ふに逆路を辿りて此處に出逢へるなりといふ。制帽を脱ぎたる額に汗少しくにじみたり。雑談やゝ賑はしく、林間の秋日和に

落柿舎

元祿の俳聖去來の住庵なり西行庵跡亦此處と傳ふ
去來翁の墓は庵後の藪中にあり

心はなやぎつゝ常寂光寺に詣づ。門前の澄清淨として苔ふかく、一樹の紅葉すでに満つものあり。院内寂として聲なく日影靜かなる簷に秋蜂あまた飛ぶ。

去つて落柿舎を訪ふ。

生籬にさゝやかなる古門あり。門内、柿の老樹ありて無數の熟柿をつゞるもと、一構の穂家わびしげなるすがたは、さながら元祿の往時を物語るに庶幾きものあるが如し。壁に破笠懸りて、去來の用の古びたるものと云ひ傳ふ。濡縁と奥間とを境する障子の中、硝子を透き、現住堀某といふ老人の書冊、文具など見ゆ。雨丈君老人を呼び出し、繪葉書を求め記念にもといふ。老人の顔、去來に似ずやと、ちらと見る。去來は奥にありて咳するがごとし。廣からぬ庭、軒端のほか八重葎しげりて踏みどころもなし。「柿ぬしや梢はちかきあらし山」の舊庵主の句碑、葛かづら纏ひて、ほとりに梅嫌くれなる實をむすびたる、荔枝の熟れかゝりて二つ三つ叢深く垂れたる自然のすがたは、往時も亦、恐らく今とことならざるべし。門をいで、庵後の墓に詣づ。これは又甚だ風流にして、小さな石ころ、其丈ヶ凡そ一尺。臺石もなく地上に突つたち、傾くが如くにして倒れず、數個のごろた石、碑側をかためたり。去來、ごさんなれとや云はんか。

元日や家に譲りの太刀佩かん 去 來

と、かた／＼しき此の風流坊。武士にして僧の如く、僧に似て煩惱猶「盲より啞のかはゆ

き月見かな」の境をはなれず。而も蕉翁の「實は去來にしかず」の律義。

魂 棚 の 奥 な つ か し や 親 の 顔 去 來

と、眞骨頂を示すに似ず、風流落柿舎の日蔭をたのんで、竹藪の笹落葉をあつめては柚味噌を焼くこんたん、その碑の餘りにもあらはなるを語るに似るのである。線香も持合せねばあはれをとめて此處を去る。藪最も昔を偲ぶに足る。

祇王寺を訪ふ。篁の阪路爪先き上りにながく辿りゆけば、門かたむき境内苔敷きわたりて「いらか破れては霧不斷の香を焼き。とぼそ落ちては月常住の燈をかゝぐと云ふ」そこに往む尼法師の陰鬱なる生活、まさぐとあたりに沁みて、留守を戸閉したれども、少時もとどまるに堪えがたし。庵後の古井戸に小さなバケツを結びたる吊竿横はり、裏縁に一と掴みほど名知らぬ木の實干され、柚の木に二つ三つの實熟ぜり。

嵯峨の町に下つて、清涼寺の境内をよぎる。大伽藍の廣庭、老松みどりふかく千古の色を湛ふ。獵夫、犬を率て高き籬を仰ぎつゝ去る。門側に天狗の面を躍ぐ媼あり。老尼あり傍らにありて、年若き婦と語る。

もの 賣りに 馴染の 尼や 秋 拾 吳 龍

門外一路の秋日和を踏みて、天龍寺門前を行く。老松のもとに落葉を焚くあり、戸々多く軒端に菊を培ふ。王朝の牛車をこそ偲ぶ眼の前を、咲き揃ひたる菊を運ぶ荷物自動車たまく行き過ぐ。嵐峽相生庵に憩ふて、一座空腹をみたし、小句蕙をいとなむ。かくてこの行の收穫を吟味す。

やぶ垣の 背面此面や 嵯峨の 秋 王 石
嵯峨人の 障子洗へる 筏かな 比 古
風塵をあびて 柘花 咲ける 雨 城
花すゝき 大堰の水にとぶ 架かな 吳 龍

祇王寺道

秋 日和 なかゝ 賣れぬ 櫛かな 蛇 笏
旅籠に 歸る。

夜。野風呂君の招きに應じてゆく。野風呂庵にながし君もあり。庵主、東洋花壇の夜景

を一見せしめんとて誘ふ。即ち野風呂、雨丈、北人、比古、ながし、吳龍諸君同行。

小倉山日當りながらしぐれけり 雨 丈
翠黛の日をふり仰ぐしぐれかな 蛇 笏
芋畑にくゝられ盛る黄菊かな 同 同
菊の葉やつゆけく青き裏表 同 同

夜半、宿に歸りて眠る。

三十日。朝起、叡山をめざして發つ。

一行雨丈、王石、吳龍の諸君、正男亦之れに加はる。八瀬驛より短兵急にケーブル、カアの便をかりて登り、一瞬間に阪本に下る。森茫たる琵琶の展望、根本中堂の清閑、老杉のもとに煙りをあぐる焚火、樹間をとぶ啄木鳥、懸巢鳥それくく印象深し。わけても、辨慶水のほとりの腰掛茶屋にて、紅顔の少年うぐひす笛を響ぐあり。その吹きこゝろむる巧妙なる音、遠くひびきわたたりて老樹森々たる叡山の末枯れの幽谷、遊子をしてうたゞ一陽來復の情をいだかしむ。各、首をさしのばして、其の笛に一瞥をなげつゝ通りすぐ。

笛ふいて老いせず露の童子かな 蛇 笏
行くく眺望展く。

冬がすむ旅の日和や深山空 蛇 笏
横川路土匂ふ薦のみちして 同 。

阪本の旗亭にて名物蕎麥を喰ふ。酒一二行。つゆもの、渴きたる喉に味淡し。

琵琶湖畔、義仲寺に芭蕉の墓をとふ。大津の町裏、秋日和の湖、風ぎに風ぎて、岸うつ小波囁くがごとく、をちここに漁舟を見る。赤蜻蛉空にたゞよひ、路ゆくわらべの頭を追ふ。不圖、清楚なる一小寺門を見る。芭蕉葉土塀たかく折れかゝりて風韻古蹟を示すに足るものあり。即ち義仲寺なり。小さな古松をそふ寺門をくゞり入るに、あたり一面の俗句碑廣からぬ庭をうづめて、さながら浄土を瀆すものゝごとし。

其角はその當時をしるして「門前の少し引入りたる所にかたのごとく木曾塚の右にならべて土かきをさめたり。おのづからふりたる柳もあり、かねての墓のちぎりならんとそのまゝに卵塔をまねひあら垣をしめ冬枯のはせを、植ゑて名のかたみとす」とあれども、そ

の古りたる柳は、星霜三百年、風雨時をうつして今見るかげだになし。門内數十歩、木曾殿の蒼古愛すべき碑と、相ならびたるは聖翁の碑なり。はるか後代に於てなせしとおぼしき臺石、たま垣、二三尺のたかみをめぐりて、中に温容あり。芭蕉翁こゝに永遠にねむる。墓石の丈、一尺五寸を出でず。形容薩摩諸に似て、腰据はり、頂に至るに従つて石削げて尖らず。地黒く、克明に「芭蕉翁」の三字を刻す。芭蕉葉微かに風に鳴り。秋日影あたりに漲る。墓石、儼として而も驕れるに非ず。悠揚として飄逸に過ぎたる感を與へず、敬虔にして卑下に失せず。天下無敵のすがた、宛然松尾忠左衛門宗房が個性そのものを示現するに似たり。石、もと、山野に轉せるものゝみ。誰か能く蕉翁が碑たるを知らんや。しかも門弟うちつどひ、歿後蕉翁がすがたをいかにかのこすべきを相はかりし、その結果無礙圓滿なるこの石こそは擇ばれきたりぬ。芭蕉あえてはかる處なし。思ひおのづから門弟の心を貫いてこゝに至るを偉とす。世上泡沫の塵事、倣ふてこれに及ぶものあるや否や。低徊去るあたはず。感傷、しばらくこの土に足をとどめしむ。哭するがごとき夕日四邊にながれ、落莫として秋風衣袂を吹く。

芭蕉塚 秋日の墓をいだかばや 蛇 笏
午後四時十分、義仲寺境内を出る。

義仲寺を出て古町や秋の風 吳 龍
浪際や茶の花咲ける滋賀の里 蛇 笏
舟行、石山寺に向ふ。

秋の日のうつるにはやく、影こまやかなる中に暮情をおくつて、岸邊の蘆間にたゞ／＼浮く鳩さびしげなれども、今の世の往きかひしげき旅客になれて舟をおそれず。淀の川波たゞ蒼涼たり。芭蕉入寂直後「物打ちかけ夜ひそかに長櫃に入れてあき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、去來、乙州、文章、支考、惟然、正秀、木節、吞舟、壽貞が子次郎兵衛、予ともに十人、笠もる雫袖寒き旅ねこそあれたびねこそあれとためしなき奇縁をつぶやき、坐禪稱名ひとり／＼に年ごろ日比のたのもしき詞むつまじき教をかたみにして、俳諧の光をうしなひつるに思ひしのべる人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ」と、其角が遺筆につまびらかなる情景、同じこの川波に浮べるとしれば、遙かに、聖翁が

なきがらをのせたる舟眼にみゆるが如し。

秋風 川舟はやき旅愁かな 蛇 笏

石山寺境内人影稀れに、樹木秋霜を感じ、わけても老楓の葉おほよそ三分の紅を吐く。

石山の石のはさまの秋の土 吳 龍

巖根なる観音菊やつゆの秋 蛇 笏

石山の古き玉座も暮の秋 同

榻に倚りて遠く琵琶の水をながめ、更に院の格子をへだて、王朝才媛のすがたをしのぶ。名篇「源氏」に彼の女はその主人公が須磨消遣のすがたをうつして、

「白き綾のなよびかなる、しをん色など奉りて、濃かなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御様にて、釋迦牟尼弟子と名のりてゆるかによみ給へる又世に知らず聞ゆ。沖より舟どものうたひ罵りて漕ぎ行く等も聞ゆ。ほのかに唯小さき鳥の浮べると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねてなく聲、梶の音にまがへるを打眺め給ひて御涙のこぼるゝをかき拂ひ給へる御手つきくろぎの御珠數にはえ給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝ

ろ、皆慰みにけり」

と、艶麗流暢玉の如く呵するかと思へば、十二帖には、

「まづ居丈の高う、をせながに見え給ふに、さればよと胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは御鼻なりけり。ふとめぞとまる、ふげん菩薩ののりものと覺ゆ」と、人を喰ひたる心にくき醜女描寫の才筆、成人するに従ひ我れいくたびか之れを幻影にとどむること、一面「奥の細道」より蕉翁夢寢のあひだに去來するを感ずると、全く内容相反して、而もこの兩性我れに無限の詩情をおくるの好一對なり。薄暮せまらんとする中に、几帳文案、豊頬麗膝髣髴として現ぜんとす。夕風梢を吹き、落葉みだれ、僧、門を閉してたち去る我等のうしろに晚鐘鳴りわたる。

ふたゝび淀の舟に泛び、京に歸りて、三たび同じ旅籠に籠る。夜半、野葡萄、雨丈、王石君等と茶を啜りつゝあるに、ながし、兎月、琅玕子、草徑等の諸君見え、即ち小句會をいとなむ。

夕霧のすでに罩めたる下山かな 雨 丈

山路や又雲霧の吹き返す 吳龍

比叡山

何鳥や啼く音に杉の霧はやみ 蛇 笏
曉ちかゝらんとして眠りに就く。

三十一日。三河路をさして發つ。名古屋を過ぐるとき、蘇南、不釣、一甫等の諸君と驛頭に會ふ。岡崎に下草。軒石、藻路、湫雨等の諸君に迎へられ一路中島に着いて瀧北新居に旅装を解く。瀧北君先年の不幸に會してより、今新に婚約の成るあり借老同穴の契り僅かに數日を越ゆるのみ。遠慮を知らざるに非れども懇ろなる情に浴す。夜、中島の旗亭豊田屋に張らるゝ盛宴に逢ふ。既往十數年。會遊の地にしてこの旗亭を深く印象にとゞむ。なつかしき床あり、天井あり、紙襖あり。而して電燈明る四邊を照らす。

瀧北、越南樓、軒石、藻路、湫雨、吳龍等の諸君。

瀧北居に泊す。

十一月一日。

朝起、露ふかき里道を逍遙す。朝日影、稻田に漲る。

菊さけば南蠻笑ふけしきかな 蛇 笏

二日。崇福寺句會に行く。

作句。

三河路や秋日の雲を見て憩ふ 蛇 笏

杉の雲啄木鳥あるくほどの隙 同

句會後講演。中島豊田屋に夕餉。崇福寺を散じたる人々の中、又この旗亭にぼつ／＼集り來れるは秋葉子、楓子、水華、鄙路、せつ女等の諸君と瀧北、越南樓、軒石、藻路、湫雨等の諸君なり。打ち交りて快談す。諸君の懇望あり、即ち句評及俳句漫談に時を過す。

瀧北居に歸る。

三日。名古屋に向ふ。

驛頭に、不釣、かけい、蘇南、冷石、一甫等の諸君に迎へられて清駒別館に案内をたのむ。清駒は嘗て宿泊せるなつかしさを誘ふによる。一休後、冷石君等の肝煎にて、折から

名古屋に開催せらるゝといふ繪畫展覽會に案内さる。會場一巡後、聞天閣に上りて休憩、少時中京市街の展望に時をうつす。公園の瀟洒たる旗亭に、蘇南、不釣、冷石、かけい冬々、一甫、斗久刀等の諸君がねんごろなる晚餐會を催さるゝに列して後、含松寺句會に行く。句會後講演。

作句。

月虧けて山風つよし落し水 蛇 笏

菊はこぶ童子の顔のかゞやきぬ 同 同

北嵯峨の庵の日和や菊の塵 同 同

清駒一泊。

四日。名古屋驛に不釣、蘇南、一甫、斗久刀、其他諸君の見送りをうけ焼津に向ふ。仁阿彌庵に小憩。歡談數刻。庵主、白鳳、耳郎、漂人諸君の懇情もだしがたきを固辭して静岡に向ふ。興津に吳龍と袂を別つ。静岡下車。俳諧行脚に終りをつぐ。

二三日や身にしむ旅の夢をみる 蛇 笏

(同・四・一一)

道中葉

かねてより朝顔日記を偲び、或は輦臺を想ふてなつかしき大井川、そのほとりなる河骨吟社の人々記念の大會にのぞんで懇ろに一遊をすゝむるまゝ、霞外、吳龍兩君と共に八月十九日早曉うちつれて旅だつ。

なつかしや秋立つ旅の袖のちり

遠州吉田村能滿寺——清水龍華寺の蘇鐵とゝもに並び稱せらるゝ古く大なる蘇鐵あるを以て開ゆ。大幹蛟龍のごとく枝をくねらせ。葉藜々前庭を蔽ふ。折から七夕祭なり。

酒涙雨車軸をながす蘇鐵かな

能満寺俳句會作句

棧かたはしやふり仰ぎたる天の川

夏の雨花卉あらはなる磯家かな

吉田村

畔垣に枇杷もなごりの早稲田かな

旅泊住吉海濱の一夜

大濤のとゞろと星の契りかな

環の音のおもねる軒を吊る婢かな

晚餐のあとしばらく寛いで「残暑」一題を課し互ひに

作句す。

秋暑しみだれてながき深山草

仁阿彌庵即事

蔦の葉や隠れては出る古瓦の蜘蛛

大崩れ海岸

盆浪や命をきさむ畦づたひ

一里ほど、訊きたる時化あとの磯を浪先によるめきよ
ろめき辿りゆくに、何時か寄す浪に打ちあげられたる
小兒の屍とおぼしきもの遙かに沙上にあり。たちより
て見れば犬の屍なり。天日おほどかにこれを照らす。

盆浪のかへして遠き屍かな

漸く用宗の驛ちかく沙上に憩ふ

秋沙や世すぎの船のこゝかしこ

用宗驛に、はるく送りくれたる波月、枯雪兩君と袂
を別つ。

秋蟬にわかれを惜しむ小驛かな